Z32-B88

金の星

国立国会
8. 3. 28
図書館

第六卷　三月号　第三號

（行發日一月一日）　明治物語郵便三等日三十月六第一十正大

行發日一月三年三十正大　本誌認可日九月二年三十正大

Kodak Color Control Patches
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black
© Kodak, 2007 TM: Kodak
Kodak Gray Scale
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19
© Kodak, 2007 TM: Kodak

獨逸國アダルベルト親王殿下の
カルピス圖案
貴家の
繁榮の爲めに。
めっぽうかいうまい滋强飲料
カルピス
店商 店品料食 店酒 所賣販
社會式株造製スピルカ 元造製

日本幼稚園協會編纂

加藤まさを先生裝幀及挿畫

幼兒に聞かせるお話

増訂改版
第三版發賣

四六判上製本全一冊
五號活字總振假名付
定價三圓八十錢
送料金十八錢
紙數六百五十頁
高雅なる裝幀本

このお話の本は、お茶の水幼稚園で、數年に亘つて園兒に聞かせた澤山のお話の中から、子供が三度も五度も繰り返へして聞きたがつた特別に面白いものを更に百數十種撰り拔いたものです。つまり無邪氣な眞實な子供によつて嚴密なる審査を經た譯ですから、幼稚園は申すに及ばず一般の家庭でも安心して其儘讀んでお聞かせになる事が出來ます。今度活字を大にして、お子供さんにも自分で讀み得る樣に振り假名をつけ、お話も更に增加しまして、美しい裝幀と繪畫を飾りまして、改版第三版を皆樣にお薦め致すことを編者は喜びに堪えません。

◇童話アイアンの島廻り　西條八十先生著　定價金貳圓五十錢　送料金十二錢

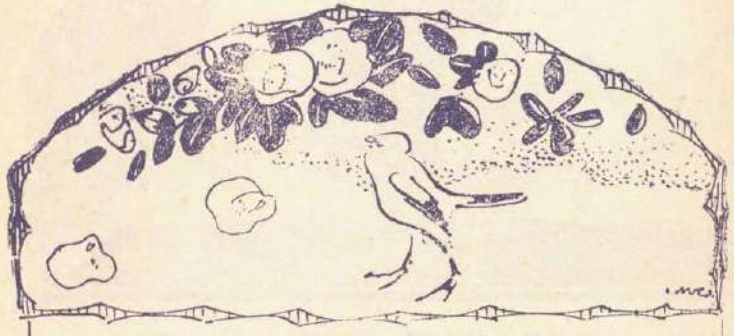
◇新童話傑作選集　第一輯　讀賣新聞社編輯　定價金貳圓五十錢　送料金十二錢

◇新童話傑作選集　第二輯　讀賣新聞社編輯　定價金貳圓五十錢　送料金十二錢

◇童謡畫集　人形の墓　加藤まさを先生著　定價金貳圓八十錢　送料金十八錢

◇抒情小曲集　哀唱　西條八十先生著　定價金一圓七十錢　送料金十二錢

東京市日本橋區大傳馬町二丁目　内田老鶴圃　振替東京一二一三三四五六　電話浪花一二一三三四五六



TRADE MARK
"OSAMA"

各宮殿下より御嘉納の榮を賜れる名譽ある

王樣水彩繪具
王樣クレイヨン
キングクレイヨン

右三品とも全國師範學校小學校の先生方が御試驗の結果御選定に成つた優良品ですから安心して御使用下さい

製造元　◇東京◇　合名會社　王樣商會

各地文具店ニアリ

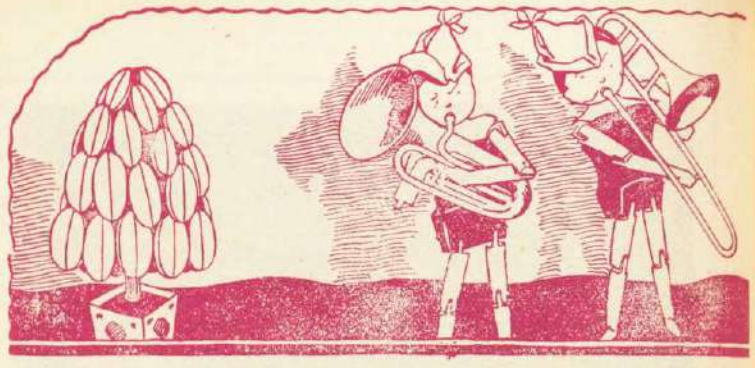
目次

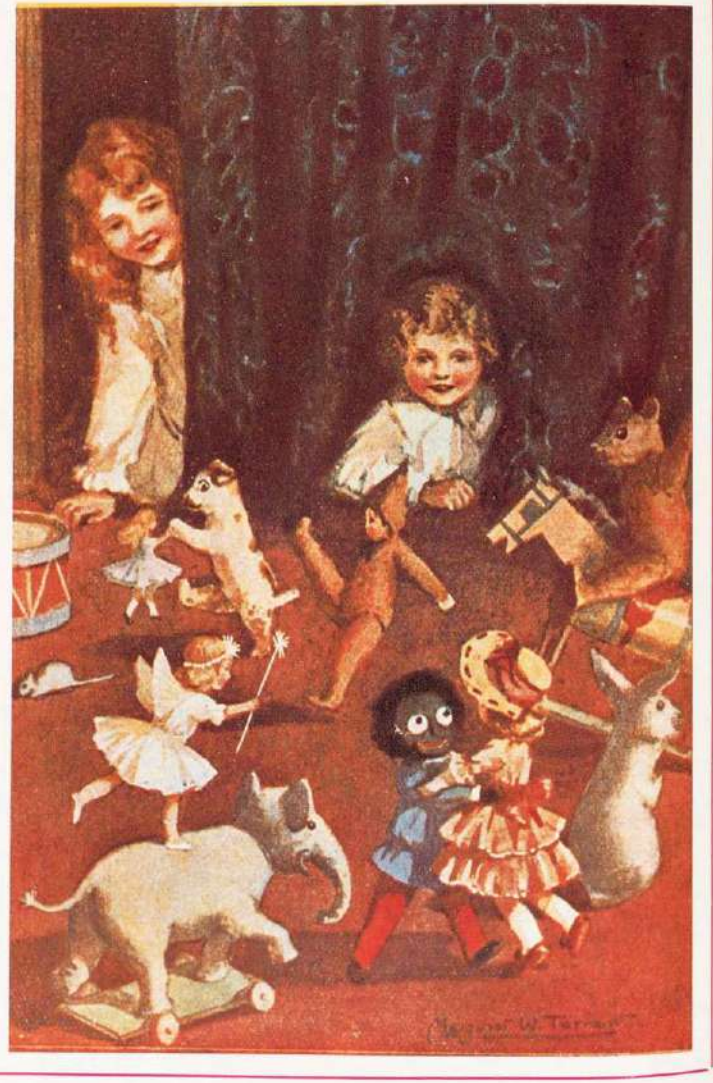
（第六卷・第三號）

羊よ、來い來い（表紙・原色版）……寺内萬次郎
玩具のお芝居（口繪・三色版）……マーガレット・タルカント
雀の機織り（童話）……野口雨情
同作曲……小松耕輔
決死の使者（長篇）……西條八十
黄金時代（童話）……水島爾保布
化石島の話（童話）……中島孤島
梅の花のお土産（童話）……若山牧水
十五少年漂流物語（長篇）……霜田史光
ひとりぼっち（推薦童話）……伊藤邦夫
ズンダラーラム王（童話）……武井武雄
池の主（推薦童話）……北田初子
ホシローヒルム（戯曲）……寺内萬次郎
金貨を生む鼠（童話奇談）……中川杏果
かくれんぼ（童話）……野口雨情
磁石島（行った坊さんの話）（童話）……齋藤佐次郎

◇支那傳奇童話◇

孫悟空と牛魔王……楠山正雄
仙人……小島政二郎
醉っぱらひ狐……三宅房子
妙な占者……宮島資夫
とんだお客様……藤森淳三
瓢簞と冬瓜……犬田しげる
ふくろ（童話）……野口雨情
すめ（幼年詩）……若山牧水
金柑の實（自由畫）……山本鼎
卵買ひ（親方）……齋藤佐次郎
（金の星誌上講演）
どちらが偉い？……沖野岩三郎





おもちやのお芝居

（泰西童話名畫その一）

重版出

西條八十先生著

新らしい詩の味ひ方

▽詩を讀み詩を作らんと欲する諸君は先ず本書を讀まざる可からず
▽詩の眞諦に理解し得る者は作らずとも立派なる詩人と謂ふを得べし

詩は文學の本質なり詩を解せずして文學を語る者は春の野にあて櫻を見ざる徒輩と等しく其心情や愚も亦甚し

四六版上製箱入定價金一圓六十錢送留金十五錢

●永遠不朽に傳
●ふ可き詩集也

散文詩集

憶東京

八十、春月、雨情、信子、夢二其他の各詩人が血と涙の結晶とも謂ふべき震火災記念出版にして萬人必讀の價を有す

四六版上製金一圓廿錢送留十五錢

▼吉屋信子女史著（第六版）
●内容、憧憬篇、追慕篇、讃美篇哀傷篇の四別にして何れも著者が若き日の涙多き思ひ出集なり……

散文詩集

憧れ知る頃

何人の追隨を容さゞる版畫界の最大權威者たる著者が初めて自ら滿足の笑を洩らせる本畫集の美にして聖なる眞に空前の誇と謂ふべし

好評益加はる白熱的の註文

總羽二重特上製金一圓四十錢送料書留十三錢

蕗谷虹兒先生新著

虹兒畫譜

第一輯

虹兒畫譜 睡蓮の夢

▼本文紙はコットン紙拓畫ニテトイツアート（ーバー色刷は種色變り優美なること目醒むるが如し

四六版上製美本金一圓四十錢送料金十五錢

挿畫三十餘枚入

交蘭社

東京振替口座 四〇二七九

南神田 神保町 東京

天下の少年は何故に爭ふて大日本國民中學會に入會する乎

■講義が新いから
■會費が廉いから
■指導が良いから
■學制が正いから
■基礎が固いから
■講師が善いから
■卒業が早いから
■成功が慥だから

會長 尾崎行雄

學監 文學博士 遠藤隆吉
理學博士 山内繁雄
顧問 新渡戸博士 三宅博士 井上博士 浮田博士
岡田前文部大臣

新學期開講入會の絶好機

講義錄見本つき
規則書無料進呈

一人前の男となるには

どうしても中等教育を受けなければいけない。中等教育の學力のない者はどうしても生存競爭の勝利者たることは六ケ敷い。併し家庭の事情で中學に入れぬ者も決して失望するには及ばない。中學校に行かずに中學卒業同樣の學問をする方法がチヤンと出來てゐる。創立以來二十二年の古い經驗のある講義錄で有名な大日本國民中學會の通信教授法がそれだ。

◎大震火災の爲め本會事務所燒失の厄に逢ふも直に復興に着手し講義錄全部完成せり。

東京駿河臺（お茶の水電車通り）
大日本國民中學會
電話 神田三〇〇二 神田三〇〇三
振替名古屋四二八〇番
東京貯蓄貯金課燒失に付當分名古屋四二八〇番を使用す

◆驚くべきよい成績を得たい人は◆
東京高等師範教授附屬小學校主事 佐々木秀一先生指導
日本教育研究會編纂

小學日習書

◇◇全科正解◇◇

を學ぶに限ります。

◇修身、讀方、綴方、算術、地理、歷史、理科など各科の生きた練習や復習の手引は是です。

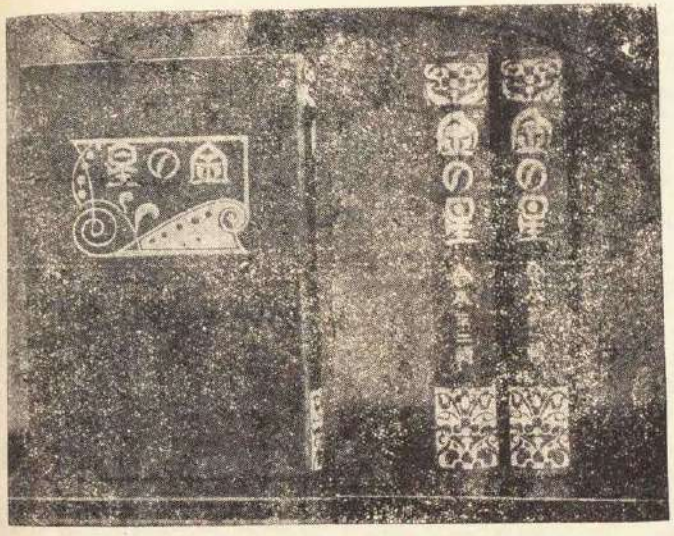
◇綺麗な挿繪や教科書にない面白い話や試驗問題など澤山に載つてゐます。

明日と云はずに、今すぐに、
お求めなさい、賣り切れぬ間に。

尋三	定價金三十錢	
尋四	定價金三十五錢	
尋五	定價金四十五錢	
尋六	定價金四十五錢	
高一	定價金四十五錢	
高二	定價金四十五錢	

◇全國々定教科書販賣店に有り◇

發賣所 東京神田 東京堂書店 振替東京二七〇



美しい「金の星」の合本第三輯が出來ました!!

▽水島爾保布先生裝幀△

總クロースへ麗しい金箔を置いたそれは〳〵美しい裝幀ですから皆樣の書棚にお飾りになつたら、どんなに見事でせう。そしてこれが幾冊にもなつたら、一段と皆樣のお書齋を美しくする事でせう。賣切れません内至急に御申込み下さい。

第一輯（絶版）　定價金一圓八十錢　送料十四錢

第二輯（第五卷一號ヨリ同六號マデ）　定價金一圓八十錢　送料十四錢

第三輯（第五卷七號ヨリ同十一號マデ）　定價金一圓五十錢　送料十四錢

東京市端外　田三五一　金の星社　振替東京五九六番　電話小石川五九三五七番

美しい兒童圖書館叢書出づ

第一篇　星の國

赤坂清七著　齋田たかし裝幀（忽四版）

四六版二百七十頁　定價二圓廿錢　送料八錢

目次

蟻の冬ごもり、犬になつた猿、友吉の出世、あひるのてがら、水こりと鬼、蛙のごけちい　外三十三篇

第二篇　月張月

吉田助治著　武井武夫挿畫（忽再版）

四六版三百頁　定價二圓　送料九錢

あの名高い源爲朝の生ひ立ち一代記です。小供さん達ばかりでなく誰が讀んでも實にユカイな物語りです。

第三篇　飴玉の天使

小川未明著　齋田たかし裝幀（最新刊）

四六版二百五十頁　定價二圓　送料八錢

目次

アメチョコの天使　幸福に暮した二人　阿呆鳥の鳴く日、北へ降る鳥、お姫樣と乞食の女、外二十篇

會員募集

月刊雜誌　イデア　お正月號

▲教育・哲學・藝術・宗教に關する批判と紹介▼
▲定價一冊五錢・一年分五十錢（但郵稅共）▼
▲毎月廿日發行・發行數一萬五千部▼

小原くにより主幹

（購讀御希望の方はどうぞこの際至急に申込下さい）

日本一の廉い雜誌が出ました。　實費提供　毎號四六版三十頁

發行所　東京市牛込區山伏町一四　イデア書院　振替口座東京一五四二三

金の星

三月號

支那傳奇童話號

通卷第五拾貳号

雨情選作叢書

各大家の作曲入・定價各冊金十五錢・送料各冊金二錢

本居長世先生作曲
◇帝都復興の歌（童謠）
（帝都復興の歌・アンデルセン）

中山晋平先生作曲
◇須坂小唄（民謠）
（須坂小唄・かなしい海）

大和田愛羅先生作曲
◇雀遊び（遊技唄）
（雀遊び・南風北風）

佐藤千夜子女史作曲
◇野の唄・海の唄（子守唄）
（野の唄・海の唄）

藤井清水先生作曲
◇矢車草の咲く村（民謠）
（矢車草の咲く村・機織り虫）

宮崎琴月先生作曲
◇二つの蝶々（童謠）
（二つの蝶々・皆さん明日また）

雨情選作叢書は野口雨情先生作の童謠民謠中より素朴、優麗の作品を撰み作曲大家の作曲を付して逐次出版いたします。童謠と民謠の新しいパンフレットです。

野口雨情先生著
●童謠教育論　定價四十錢　送料二錢

「童謠の正風」とはどんなものか、教育上どれだけの効果があるか、といふ事を正確に知るには童謠教育の創始者である野口先生の述べられた本書に依るより外にありません。四六版七十頁の小冊子であるが、慾めて平易に誰にもわかる樣に一々實例を擧て說れて有ります。

野口雨情先生著
●童謠作法講話　定價四十錢　途料二錢

童謠はどんなふうに作ったらよいかといふことを、尤も親切に、尤も判り易く說かれたもので、直接先生の御話を目のあたり伺ふ樣な感じがする。

大庭三郎先生著
●勤王の志士　定價五十錢　送料四錢

日本が今日こんなに强く大きくなったのは、みんな維新當時の勤王家達の賜である。本書はその勤王家達がどうして働いたかを史實に基いて書いたもので、今日の思想問題からして是非みなさんに讀んで貰ういたひのです。

發行所　東京神田錦町一ノ一　振替東京五二三三九　米本書店

雀の機織り

小松耕輔作曲

♩=144

p　pp

すずめの　はたおり　すずめの　はたおり
ヂヤヅメノ　ハタオル　スズメノ　ハタオリ

p

すずめが　はたおる　すずめの　はたおり
ケフーキリ　ヒカナイ　オヨメノ　オシタク

mf　p

ふくおる　よくおる　チン　チン　パタ　パタ　チン　チン　パタ　パタ
イソガシ　イソガシ　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

mf　p

p 次第に弱く　pp　D.C.

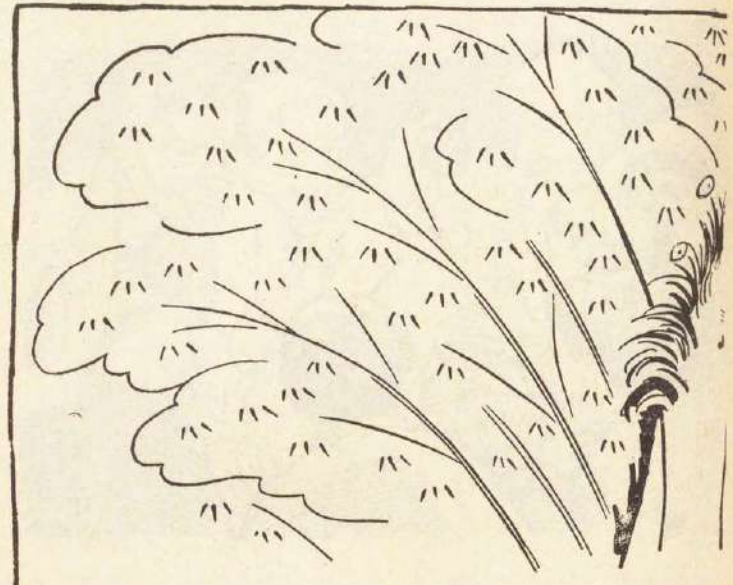
チン　チン　パタ　パタ　チン　チン　パタ　パタ
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

p　pp　D.C.　mf

雀の機織り

野口雨情

雀の機織り
雀の機織り
雀が機織る
雀の機織り
よく織るよく織る



チン チン バタ バタ
チン チン バタ バタ
お藪で機織る
雀の機織り
今日きり日がない
お嫁のお仕度
忙がし忙がし
チン チン バタ バタ
チン チン バタ バタ

ヂエラール將軍武勇傳

決死の使者（長篇）

西條八十

一　ナポレオン大帝の御召

諸君！　世の中には怪我の功名と云ふことがある。今夜は僕が戰場での大失敗談をして聞かせよう。だがその失敗のおかげで、僕はこの特別名譽勳章をしかもナポレオン大帝のお手づから授けられたのだ。まあ一寸これを見てくれたまへ。　老將軍エティエンヌ・ヂエラールはかう云ひながら、奥から古びた皮の小函を持つてきました。さうして恭々しくその中から銀光燦爛とした勳章をとり出して一同に見せてから、パチンと音させてその函を暖爐棚の上にのせ、さて昔の物語にとりかゝりました。

諸君！　戰場生活の一日、僕は至急出頭しろといふ上官からの命令を受けた。そこでさつそく本部へ伺候すると、そこには同僚のシャルバンティエ大尉が、これもおなじ命令をうけたと見えて來合せてゐた。

やがて扉が明いて上官の姿が顯れた。何かひどく心配事のありさうな引しまつた顔つきをしてゐる。

『ヂエラール大尉！』

『はッ』

僕は擧手の禮をした。

『シャルバンティエ大尉！』

『はッ』

『皇帝陛下の御召である！』

あとは云はずに上官は先に立つた。僕等は無言のまゝ恐る〳〵その後に跪いた。

ナポレオン大帝の御姿を馬上で見うけるのはほとんど毎日の事だ。だが徒歩でゐられるところはめつたに見かけたことがない。このへん皇帝はさすがに賢明にわたらせられると感じた。と云ふのは、どう見ても皇帝は馬上の御姿の方がお立派である。さう云つては何だが、今かうして見ると、皇帝は身丈五尺そこそこのごく小兵で、足にくらべて胴の方がむやみと長い。それに大きなまるい頭と、撫肩と、それから、髭の無い顔とそろへて見ては、どうしても佛蘭西帝國の大元帥と云ふよりは、どこかの大學の先生といつた感じがする。人によつて好々ではあるが、僕は自分がいま鼻の下に蓄へてゐるやうなビン　尖端がはねた軍人髭を、ならば皇帝のお顔につけてあげたいと思つた。さうしたらたとへ威嚴をますことはあるとも、決して障りになるやうなことは萬無いと信ずるのだ。

だが皇帝のかたく結ばれた唇、それからその爛々と輝いた双の眼には、何としても上御一人の爭はれぬ御威光がある。いつぞや僕はその眼が嚇と憤怒に

燃えて、自分らの方へ向けられたのを見たことがあつた。その時ゾッと五體へしみわたつた恐ろしさを今でも忘れることが出來ない。まつたく、もう一度あの眼で睨まれる位なら、瘦馬に鞭うつて何十萬の

敵軍の中へ飛び込んだ方がましだと思つたほどだ。と云つて諸君！　僕がめつたに人前で怖氣をとるやうな男でないのはよく御存知だらう。

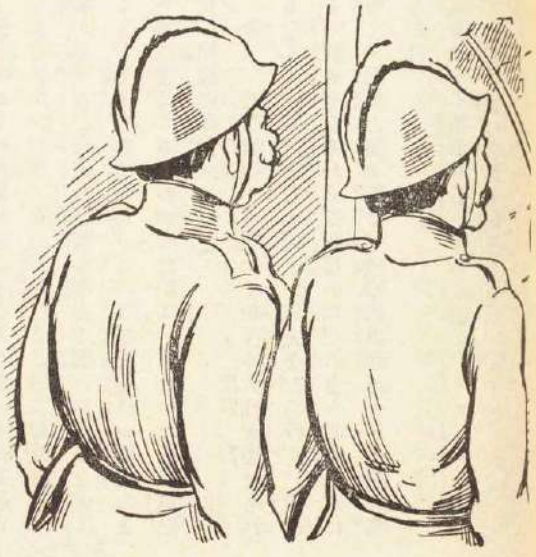
ところで――と、話がすこし横みちへ外れたが、僕らが扉をあけた時、ちやうど皇帝陛下は會議室の隅で、壁に懸つてゐた大きな地圖を參謀の一人と眺めて居られた。皇帝はぢれつたさうに參謀の手から劍を奪つて、それで地圖のあちこちを突きながら、何か口早に二言三言云はれてゐた。入りしなでよくは聞きとれなかつたが『伯林、伯林』と云ふ言葉だけハッキリ聞えた。

參謀官が知らせたので、皇帝はくるりと此方へ向き直られた。さうして近く進むやう招かれた。

『ヂエラール大尉！　おまへは名譽勳章を持つとるか？』

皇帝は訊かれた。

僕は『持つて居りません』と返事をした。さうし



てその直ぐ後に「持つて居ないのは自分に手柄が無いからではなくて、間が惡るかつたのだ。』と附加へようとしたが、皇帝は皆まで聞かず、

『シャルバンティエ大尉！　おまへはどうぢや。』

と、今度は同僚に尋ねられた。

『持つて居りません。』

シャルバンティエ大尉も同じやうに答へた。

『ではおまへ方二人に今度はそれを得る機會を與へて遣はさう。』

かう云ひながら皇帝は僕らを最前の地圖の前へ伴れて行き、劍のさきをその上に當てた。

『よいか、これは軍機に屬することだが、特に話してきかせる。こゝがわれ〳〵の今滯まつて居るランスだ。こゝに我軍の司令本部が在るのだ。それからこゝが巴里だ。その間の道程が廿五リイグ（約三十里餘）ある。ところで北には敵軍の司令官ベルティエルが居り、南にはおなじく敵軍のシュワルツエンベルグ將軍が居る』

皇帝はかう云ひながら、劍のさきでブッ〳〵地圖に穴をあけた。それからまた言葉をつゞけて、

『で、これらの敵軍が一層深くわが國へ侵入して來

れば來るほど、われ〳〵は一擧にしてかれらを粉碎することが出來ると云ふものだ。よろしいか。だがそれはよいとして目下巴里には朕の弟西班牙王が十萬の軍兵を率ゐて駐屯してゐる。でおまへらに用と云ふのはその西班牙王のところへ朕の手紙を屆けてもらひたいのだ。その手紙にはこの二日間内に、朕が兵馬及び銃砲の全部を率ゐて援けに行くと云ふことが認めてあるのだ。この手紙を朕は一通宛おまへ等に委托する。わかつたか？　わかつたら早速巴里へ出發の用意をせい。』

あゝ、皇帝陛下から親しくかゝる大任を委せられるなんて、軍人として何といふ光榮だらう！　僕はその親書を皇帝から受取ながら、あまりの愉快さに覺えず昂然と胸を張り、靴の拍車をガチヤリ踏み鳴らした。

『それから道順を教へておく。』

皇帝は更に言葉を附足して、

『おまへら兩名はバゾーシュまでは必ず一緒に行くのだ。そこで兩人は別れ〳〵になつて、一人はウルシ及びニュイリを經て巴里へ行き、一人はブレーヌソアソン、それからサンリスと、北を通つておなじく巴里へ行くのだ。よいか、何か質問があるか？』

僕は默つてゐた。するとシャルパンティエが口を開いて、

『畏れながら陛下！　若しその途が安全と認められない場合には、勝手にほかの途をとつても宜しいでせうか？』と伺ひを立てた。

『軍人には命ぜられた一途あるのみだ。行け！』

皇帝は短かく云ひ放つて、命令はもう終つたと云ふ風に、くるりと向うをむかれてしまつた。

だが僕等がもう一べん恭々しく擧手の禮を施してから扉の外へ退かうとしたとき、皇帝は何思つたか急にこちらを振返られた。さうして、

『兩名とも首尾よく仕遂げい。』

と云つて、何やら意味あり氣な眼ざしをぢつと僕等に注がれた。その眼先の意味は僕にはまるで解らなかつたが、たゞ『はッ』と答へて畏つて外に出た。

二　合點の行かぬ友の擧動

僕等が時を移さず身支度を整へたのは云ふまでもない。三十分と經たぬ間に、兩人は馬の鬣をそろへてランスの大通りを進んでゐた。さうしてこの町で有名なあの大寺の傍へさしかゝつた時に塔の時計がちやうど十二時をうつのが聞えた。僕の跨づてゐるのは名馬『荒風』である。その速力にいたつては陣中に及ぶものが無い。今日まで幾十回の競馬に出たが、僅かに一度英國のロヴイゴ侯の乘馬に敗けただけである。

ところがシャルパンティエ大尉の騎つた馬となると、これは駄馬も駄馬、ひどい痩馬である。蛇籠

のやうな背中と、心張棒のやうな足をしてゐる。しかもその上に跨つたシャルバンティエが大兵肥滿の男と來てゐるから、その對照の奇妙さかげんと云つたら無い。それでもシャルバンティエ御當人はひどくうぬぼれて、窓々から娘たちがハンケチを振るのを見ては、自分のスタイルのいゝのを褒めて呉れるのだとばかり思ひ込んで、いやに反りかへるのだからやり切れない。

やがて僕等は町はづれへ出た。そこは昨日までの戰場で、敵味方の死骸が累々としてゐる。僕は今更のやうにわが軍の形勢が日に非なることを考へて黯然として涙をのんだ。なにしろ北方に八萬の普魯西軍、南方に露西亞、墺太利の西軍合せて十五萬の敵兵を控へてゐるのだ。最前上官たちがひどく心配さうな顏付をしてゐたのも無理はない。けれども僕はあの勇邁なる皇帝陛下がなほわれ〳〵と共にあつて、然も優しく僕等に名譽勳章の約束をせられたことを思つて、忽ち勇氣をとり返した。そこで『何糞ッ』と叫んで『荒風』に一鞭くれた。馬は疾風のやうに駈け出す。ところで驚いたのはシャルバンティエ大尉だ。とても自分のヨタ馬では追付けないと觀念したか、背後から大聲をあげて、『待つてくれ？』と來た。そこで僕は不承不承もう一ぺんかれと轡を並べた。

僕とシャルバンティエ大尉とは決して親しい間柄ではない。だが二十哩も一緒に歩いてゐて彼が今日位口をきかないのは珍らしかつた。眉根に深い皺を寄せ、顎を胸に埋めて、かれはしきりと何か思案に耽つてゐる。

『おい、何をさう考へてゐるんだい？』

僕は一度ならず重ねて彼に訊いてみた。彼よりはよつぽど豐かだと自信する自分の智慧袋を、彼のためにすこし傾けてやらうと思つたのである。

ところが彼の答はいつも定つてゐる。それは今日

の使ひのことを考へてゐるんだと云ふのである。僕はその返事で呆氣にとられてしまつた。今日の使ひ！　それについて何を思案することがある？　陛下に命せられた通りの使命を、一刻も早く果して戻ればいゝんぢやないか！　そんな單純な、軍人的な仕事をくよ〳〵思案してゐる彼の了簡が僕にはさつぱり解せなかつた。

そのうちに僕等はたうとうバゾーシュまで來てしまつた。こゝで兩人は別れて彼は南へ向ひ、自分は反對に北へと向ふのである。ところがいざ別れとなつて馬首を轉らしながら、彼はもう一ぺん僕の顏を見た。さうして一種奇妙な表情を浮べて訊ねた。

『ブリガルデイエ君。君はいつたいどう思ふ？』

『何をさ？』

『この使ひのことを。』

『そりやあ分り切つてるぢやないか。』

『君はさう考へるかね？　なぜ陛下は僕らに大切な計畫を明されたのだらう？』

『それは僕等を信賴してのことさ。』

シャルバンティエ大尉はニヤリとばかり、一種異樣な笑ひかたをした。彼はまた云つた。

『では君に訊くがね、君がこれから行く村々が敵の普魯西兵でいつぱいだつたらどうするつもりだね。』

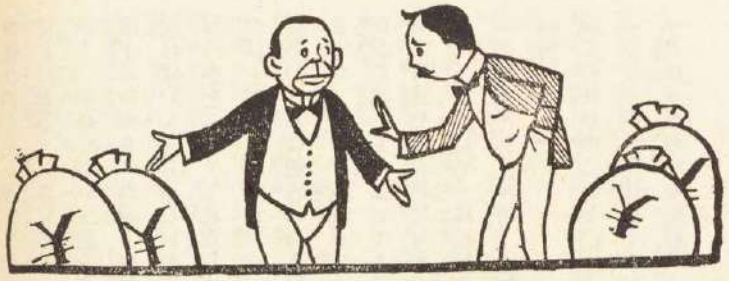
『何がどうあらうと僕は陛下の命令をなし遂げるつもりだ』

『だがさうすれば君は殺されちやふぜ。』

『それは覺悟の上だ。』

シャルバンティエ大尉はこれを聞いてまたニヤリと笑つた。その笑ひかたがいかにも人を馬鹿にしたやうなので、僕は憤然として佩劍の柄に手をかけた。だが自分が一言も口をきかぬ前に、彼は馬を返して南の往還へとつとゝ駈け出した。

そこで僕は彼の大きな毛皮の帽子が丘の向うに消へるのを見送つてから、合點の行かない彼の今の樣子を考へ考へ自分の途に馬を進めた。（つゞく）



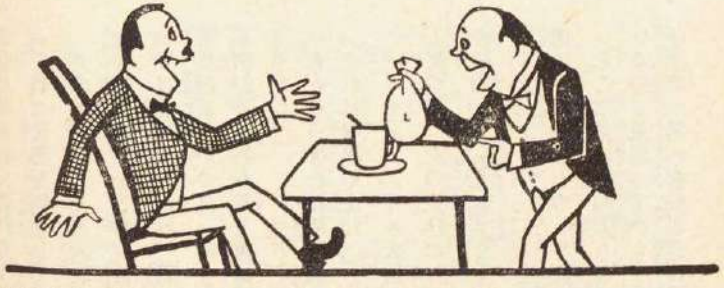
黄金時代

水島爾保布

（一）

お金があり餘つて、何にもかうにも始末がつかなくなりました。世間の人達は寄ろときさはるときつとこんな馬鹿をいひ交しました。

『ほんとに何て困つた事になつたんで御座いませう。たしかに惡魔がこの世の中を占領して了つたに違ひありません。何うかして金を無くす工夫はないものでせうか。金貨を焼き棄てる機械でも發明してくれる人があつたら、世界中の人間が一どきに助かるわけですがなア。』



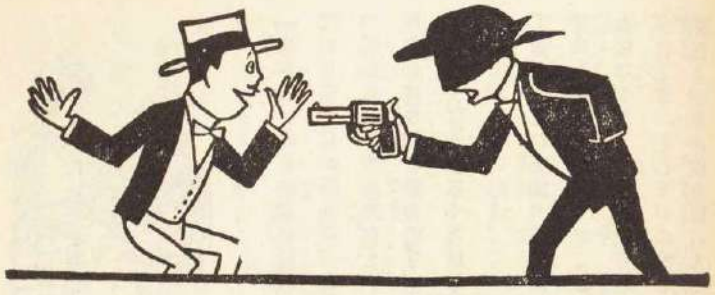
（二）

コーヒー一杯百萬圓といふ看板を出した店がありました。

『有り難い。かういふのが本當の社會奉仕といふものだ。』と、人々はお金の袋を擔いで、ぞろ〳〵とその店へ押しかけました。

コーヒーを一杯百萬圓で賣るのかと思つたら、さうではなくて、百萬圓の金貨を持つて行つて呉れる人には、コーヒーを御馳走するといふのでありました。

これを見ならつて、あつちの町にもこつちの町にも、洋食屋だの蕎麥屋だのが澤山店をひらきました。ライスカレー一皿が一千萬圓天ぷらそばが一億圓などゝいふのが相場でありました。



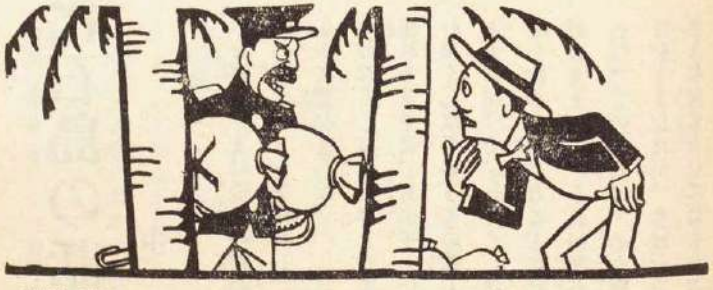
（三）

『コラ手をあげろ！』つて、突然公園の木蔭から、ピカピカやるピストルを持つた覆面の男が飛び出しました。

『ありがたい！』とばかり、急いで手をあげると、これはまた何といふ亂暴な話でせう。その泥棒はいきなり自分のポケットから、ありつたけの金貨をつかみ出して、對手のポケットの中へギユーギユー押し込みました。さうして、

サンキユー！』

とその人の肩をたゝいて、そのまゝ暗へ姿をかくしてしまひました。



（四）

『こんなにお金を持たせられちやとても堪らない。もう一足も歩けやしない。』

と、そんなことをブツブツいひながら、そこら中を見廻しました。幸にあたりには人の影もえませんので、

『さアこの時だ。』とばかり、ズボンのかくしや上着のポケットに、ある丈の金貨を出して、そこの木の根つこのところへ、うつちやらうとしますと、

『こらツ！』と、この木蔭から巡査が飛び出して來ました。

『毎晩々々こゝへ來て金貨を捨てる奴！貴樣だな。不埒な奴だ。この間から捨てた金をみんな持つて行け！』と、いつて、兩手に抱へてゐた、貨の袋を二つ、この人の背中へ乘せました。

化石島の話（下）

中島孤島

一

『奥さま』とその若者は語り出しました。『只今あなたのなすつたお祈りで、あなたもほんたうの神を知つてゐらつしやる方だといふことが分りました。わたくしは今神の威力のすばらしさをあらはしたお話をおきゝに入れなくてはなりません。まづ第一に申上げておきたいのは、この町はわたくしの父が治めてをりました王國の首都だつたといふことです。あなたもごらんになつたことと存じますが、あそこで石になつてをります王と后がわたくしの父と母でございます。そしてあの后も、宮中の男女もこの都の住民も、その他全國の人民も、すべてマジ教徒で、火を拜し、また全能の神のかはりに、神に叛いた惡魔の王ナルヅンを禮拜し、火と光と蔭と熱と日輪によつて誓ひました。

わたくしは父の年よつてからの子で、わたくしの生れるまでは、男の子といふものがなかつたので、わたくしは手のうちの珠とめでられて、おほきくなりました。で、わたくしは偶像禮拜者を父母にもちましたが、幸ひなことには、この宮中に一人の老女がありまして、それが熱心なマホメット教の信者でした。この老女は、心の底では、神と使徒とを信じてをりましたが、うはべではわたくしの家族と同じやうな儀式をしてゐましたので、父はそんなことは

少しも知らずに、この老女の正直な、溫和な性質を見こんで、わたくしの教育がかりにいたしました。

『この子をお前の手で育てゝ、よくわたしどもの宗教の儀式を教へ、そして立派な人間に仕立てゝくれ』

と父はこの老女にいひつけて、わたくしを渡しました。

けれども老女は、わたくしを受取ると、マホメット教の信仰で育てあげるつもりで、わたくしに齋戒の儀式だの、祈禱の仕方だのを教へました。そしていつもかういつて聞かせるのでした。

『王子さま、本當の神樣は一つしかありません。本當の神樣よりほかのものを、決して拜むのではありませんよ。』

老女はわたくしにアラビヤ文字の讀み方を教へそして讀んで見ろといつて、一冊の書物をくれました。その書物はマホメット教の聖典コーランでした。でその中に書いてあることがわたくしにわかるやうになると、老女は一句一句ようく説明をしてくれて、わたくしの心に、信仰をふきこむやうにいたしました。けれども父にも、そのほかの人にもこればかりはけつしていつてはいけない、これが知れると、殺されるかも知れないから、と老女はくれ〳〵もわたくしに申しつけました。

間もなく、老女は死にましたが、死ぬまへに、わたくしはもうすつかりマホメットの教へをのみこんでしまひました。そしてそれから後もずつとマホメット教の神を信じて、いつはりの神ナルヅンと火の禮拜を憎むことにかはりはありませんでした。

そのうちに、この都の住民はいよ〳〵不信心になり傲慢になり、罪深くなりました。するとある年のこと、どこからともなく、雷のやうな聲で、市民に警告する聲がきかれました。その聲は、だれひとり、きゝ洩したものがないやうに、かうはつきりと、全都に響きわたつたのです。

『この都の住民よ、速かにナルヅンと火の禮拜を棄てゝ、全能の神を禮拜せよ。』

人々はこの聲をきくと、青くなつて、一どに父の王宮へ押かけてまゐりました。そして口々に

『只今怖ろしい聲が、天の方からきこえましたが、あれはいつたい何でございませう？』といひましたが、父はたゞ

『あんな聲に驚くことはない、あんなことで信仰をかへてはならない。』

と答へたので、人民も父の言葉に從つて火の禮拜を棄てずに、いよ〳〵不信心の罪を重ねてをりました。

すると、その翌年も、またその翌年も、三年つゞけて、同じ聲がきこえましたが、それでもだれ一人改心するものもなかつたので、たうとう神のお怒りに觸れて、三年目のある朝この都の住民は、一時に石になつてしまひました。そしてその時、立つてゐたものは、立つたなりで、坐つてゐたものは、坐つたなりで、一人のこらず、ごらんの通りの、眞黑な石に變つてしまつたのです。父の王も、ごらんの通り、この宮殿の中で、石になつてをりますし、母の后も、同じ運命に陷りました。

その中で、わたくしだけが、一人きり生きのこりましたので、その日から、いよ〳〵熱心に神に仕へて、ごらんの通り、かうして祈禱と斷食と讀經をつゞけてをるのです。けれども賀のところ、わたくしはもうかうして、だれ一人話相手もなく、一人ぼつちで暮してゐるのが、つくづくいやになりましたので、あなたがこゝへおいでになつたのは、全く神樣が、わたくしを慰めるために、あなたをおつかはしになつたやうに思はれますので、いよ〳〵神のみ惠みを感謝せずにはをられません。』

この長物語を聞いてゐるうちに、わたくしの心はいよ〳〵この若者の方へ引きよせられてゆきました。そのうちにも、最後の言葉をきいた時には、思はず

胸を躍らせてもう默つてはゐられなくなりました。

『王子さま。本當にわたくしの船をあなたの港へ引きよせたのは、全くあなたをこの氣味のわるい島から出られるやうにしてあげようといふ神のみ心に相違ありません。わたくしが乘つてまゐりました船をごらんになつても、幾らかおわかりになりませうがわたくしはバグダッドでは、多少身分のあるものでございます。あちらにはかなりの財産ものこしてありますから、あなたがバグダッドへお着きになつて多分御承知でもありませうが、あの豫言者の代理でもあり、信徒の統率者でもある教王から、ご身分にふさはしい待遇をおうけになるまでは、わたくしがきつと引きうけて、あなたに御不自由はさせません。あの世界に名高い教王は、今バグダッドにおいでになりますから、あなたのやうな方が自分の都へ來てゐるといふことが耳にはひりさへしたら喜んであなたのお力になつて下さるでせう。もう〳〵見る

こと、聞くことが、悲みの種になるやうな、この都においでになることはありません。どうぞわたくしの船へいらしつて下さい。』

かういつて、熱心にすゝめましたので、王子もつひにわたくしの言葉に從つてくれました。そこでその晩は、王子のそばで夜を明しましたが、わたくしの胸の中は、嬉しさが一ぱいでしたから、淋しいことも、怖しいことも忘れて、ぐつすりと寢こんでしまひました。

六

夜が明けると、わたくしたちはすぐに起きて、庫へ行きました。そしてそこにしまつてあるものゝうちで、目方が少くつて、それで一番金目になりさうなものをさがして、それをもつて王宮を出かけました。

町の方へおりて行くと、丁度わたくしをさがしに來た二人の姉と船長と奴隷たちにあひましたので問はれるまゝに、わたくしの見たことを殘らず話しそれからこの若者の身の上や、この都の人民がかうして石になつたわけをも話しました。みんながびつくりして、わたくしの話を聞いてをりました中で二人の姉は、この時わたくしが若い男をつれてかへつたのを見て、おそろしい妬み心をおこしたのをわたくしは夢にも知りませんでした。

水夫らは匿から積んで來た荷をおろして、その代りに王宮から運び出した寶石とか黃金とか、貨幣とかいふやうな貴重品を積みこむのに四五日ばかりかかりました。家具とか食器とかいふものは、とても船へ積みきれないので、おいて行くことにきめました。そんなものをのこらずバグダッドへ運ばうと思つたら、一艦隊を率いて來なければならなかつたでせう。

かうして一番價値のありさうなものを船へ積みこんだ後、航海中にいるだけの食料と水を積みこんで風向きを見定めて、この島を出發しました。

島をはなれてから、しばらくの間は、若い王子と二人の姉とわたくしとは、愉快に日を送つてをりましたが、そのうちに妹たちは、わたしと王子の仲のいゝのをだん〳〵と妬むやうになりました。そしてある日、いろ〳〵な話の間にわざとわたくしに向つて、かういひました。

『あなたはバグダッドへ着いたなら、この方をどうなさるつもり。』

わたくしはすぐに、姉たちがわたくしの氣をひいて見るつもりで、こんな問をかけるのだと氣がつきましたから、わざとはぐらかすやうに、かう答へました。

『えゝ、わたしはこの人と結婚するのよ。』

かういひながら、王子の方を向いて、わざとそばへすりよつて、かういひました。

『ねえ、あなた、どうぞわたしのお願ひをきいて下さいね。バグダッドへ着いたら、わたしはあなたの奴隷になつて、わたしの手で出來ることなら、どんなことでもするつもりなんですから。』

『奥さん。』

と王子は困つたやうな顏をしていひました。

『あなたのおつしやることは、冗談か、眞面目か分りませんが、わたくしとしては、姉さんたちの前で、眞面目に申上げますが、只今からわたくしは喜んであなたのお言葉に從ひます。併し決してあなたを奴隷にするのなんのといふのではなく、あなたに妻になつていただきたいと思ふのです。』

この言葉をきくと、わたくしは姉の方を向いてかういひました。

『わたしは、この人があれば、もうなんにもいりません。船の中のものは、みんなあなた方にさしあげます。』

『まア大へんな御執心だこと！。』

と姉は冗談のやうにいひましたが、それでも顏

色がかはつてゐたので、わたくしはすぐに姉の心もちを見てとりました。

わたくしどもは、間もなくペルシャ灣にはひりました。そしてこの風向きでいつたら、明日は確かにバルソラ港へ着くだらうと思つた晩のことでしたが、王子とわたくしが、なにも知らずに眠つてゐる間に姉たちはそつと起きて、二人を海の中へはふりこみました。

その時、王子は泳ぎを知らなかつたので、すぐに溺れてしまひましたが、わたくしは、水へ落ちるや否や、不思議にも、一本の材木に手がさはつたので、それにつかまつて、海の上に浮かんでゐるうちに、運よくも、陸地のやうなところへ打ちあげられました。

わたくしは闇の中をたどつて、だん〳〵と水のない方へ歩いて行きましたが、そのうちに夜が明けて見るとそこはバルソラから二十哩ばかりのところにある一つの無人島の海岸でした。

その時丁度日がのぼつたので、わたくしは濡れた着物を日にかはかして、島の中を歩いて見ると、ところ〴〵にいつ〳〵な果物がみのり、岸の間からはきれいな水が湧き出してゐるので、これならばまア餓死をするやうなこともあるまいと思ひました。

そのうちに、大分くたびれて來たのでとある木蔭へはひつて、一休みしてゐるとふとむかふから大きな、翼のある蛇がこちらへ向つて走つて來るのが見えました。

その蛇はしきりにからだをうねらせて、苦しさうに、長い舌を吐いてゐるので、これは怪我でもしてゐるのだなと思つて、思はず立ちあがつて蛇の方を見ると、そのうしろに、もう一つ大きな蛇がゐて、前の蛇の尻尾をくはへて、引きもどさうとしてゐるのでした。

それを見ると、前の蛇がかわいさうでたまらなく

なつて、われ知らず、手近にあつた石を拾つて、力一ぱいに、あとの蛇へ投げつけました。するとそれがうまく頭へあたつたので、蛇はその場で死んでしまひました。

その時、前の蛇は、いきなり兩方の翼をひろげて空をめがけて飛びあがりました。わたくしは呆氣にとられて、しばらくそのあとを見送つてをりましたが、たうとう見えなくなつてしまひました。

そのあとでわたくしは急にがつかりしたやうな氣がしてまた草の上へ横になつて、そのまゝ眠つてしまひました。

しばらくしてふと目をさますと、黒い着物を着たひとりの美しい少女がしづかにわたくしの足をさすつてをりました。そして少女のそばには、二匹の黒犬がしつかりと鎖につながれてゐるのが見えました。わたくしはびつくりして起きあがると、すぐに坐

つて、その少女にたづねました。
『あなたはどういふ方ですの、そしてなにかわたくしにご用でもございますの。』
『わたくしはつひ先程あなたに助けていたといたあの蛇でございます。』
と少女はしづかに答へました。
『あんな形になつてはをりましたが、本當のことはわたくしは一つの妖精で、あの時、丁度讎の魔におつかけられて、もう少しで殺されるところを、あなたに救つていたときましたのです。ですからこの御恩がへしには、二人のご姉妹のわるだくみにかゝつてひどい目におあひになつたあなたの復讎をしてあげるよりほかはないと思ひまして、自由の身になるや否や仲間の妖精を呼び集めて、すぐに船のあとをおつかけて行きました。そして船に積んだ物をのこらずバグダッドのお宅の倉へ運んでおいて、船はそのまゝ海の底へ沈めてしまひました。それからあなたの姉さんたちは、魔術の力で、二匹の牝犬に變へました。こゝにをります黒犬がそれでございます。併しこれだけではまだまだ罰が輕うございますから、わたくしがあとで申上げる通りな取扱ひをしていただかなくてはなりません。それからあの若い王子はかわいさうに海へ溺れておしまひになりました。』

かういつてしまふと、妖精はいきなりわたくしを片方の腕へ抱き、片方へは二匹の黒犬を抱へてバグダッドへ運んで行つて、わたくしの邸の中へおろしました。

見ると、倉の中には、あの化石島からもつて來た寶物がぎつしりとつまつてをりました。

それから妖精は、別れる前に、二匹の黒犬をわたくしの手に渡して、きつとした聲でかういひました。

『海の支配者なる神の名によつて、あなたに命じます。もしあなたがこの二人と同じ妻になりたいと思はなかつたら、この二人があなたに對し、また海で死んだあの王子に對して犯した罪の罰として、毎夜この二人に、一百づゝの鞭をおあてなさい。』

この時から、わたくしは妖精に誓つた言葉を守つて、毎夜、世間が寢靜まつてから、一百づゝの鞭をあてるのですが、これが姉だと思ひますと、つひ氣の毒になつて、自然に涙が流れ、もう〳〵こんな殘酷な役目は勤まらないと思ふのでございます。（をはり）

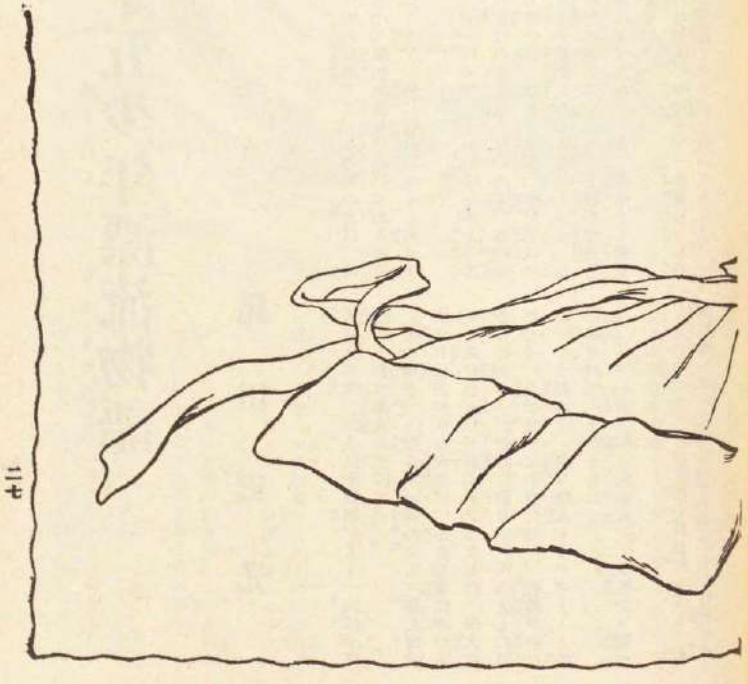
かういひ渡されて見ると、どうしてもそむくわけにはゆかなくなつて、『きつと御命令に從ひます。』とわたくしは誓ひました。

梅の花のお土産

若山牧水

遠足のおみやげに
梅の花の枝折つて
袂に入れて
忘れてしもた
ほつと思ひ出して

とりだして見たら
五つ附いた小枝の花が
たつた二つになつてゐた
可哀相になつて
鼻にあてて見たら
かはいい梅の花
もとの通りに匂つてた



十五少年漂流物語

霜田史光

一、嵐の海に船ひとつ

西暦一千八百六十年三月九日（今から凡そ六十年前）その夜のこと、空いっぱいに黒雲がひろがつて、海の上は月も見えなければ、星も光らないので眞闇です。物凄い唸り聲をあげる風に大波は惡魔のやうに荒狂つて、時時電光がする樣はとても陸では想像も出來ない程の恐ろしさです。

この海の中を東へ東へと走る一つの船があります。この船は百噸にも足らない程の小型のスクーナーと云ふ二本檣の船で、嵐の爲めにきん〳〵に痛められて沈むことを防ぐのは餘程むづかしい有樣です。この船の名は、スロー號と云つて船尾の横板に書いてあるのですが、それも今では渾に洗はれてよく判りません。

夜はもう十一時すぎ、この船のゐる太平洋のあたりは夜はあまり長くないので、五時頃になつたら空が白くなるでせう。夜が明ければ若しかすると嵐が止むかも知れません、然しその夜が明けるまでこのスロー號が沈没しないでゐられませうか。そして首尾よく助かることでせうか。

船の上には四人の少年が、一生懸命力を合せて舵輪につかまつて舵を取つてゐます。一人は十五歳、二人は十四歳、もう一人は十三歳でこれは黒人の子です。

その時どつと凄まじい響を立てゝ壓し寄せて來た山のやうな大波に、小さな船は碎けるかと思はれるほど胴ぶるひしました。四人の少年は根かぎり舵輪に取りついてゐましたけれども、力が足りなかつたのか、舵輪が逆に廻つたと思ふと、忽ち四人ともパタ〳〵と投げ出されてしまひました。

『アリアン君、船は大丈夫か』と誰かゝ倒れながら叫びました。

その時アリアンはすぐはね起きてもう舵輪に取りついてゐたのでした。そして他の少年に向つて、

『しつかり手をかけてゐるんだよ、ドノバン君、僕達は自分の生命の外に船が大切だと云ふことを決して忘れてはいけないよ』

また黒人の子に、

『モコー、お前は怪我をしなかつたか』

『いゝえ、僕何んともありません』

と黒人の子のモコーは答へました。

この少年達の話してゐるのは皆英語でしたが、たゞアリアンと云ふ少年の言葉つきにはいくらか佛蘭西なまりがありました。この時船室に通じてゐる梯子の戸口が開かれて二人の少年の顏が現はれました。續いて一頭の犬も出て來て二タ摩三摩高らかに吠へました。出て來た二人の少年は十位が年上でした。

『アリアン君、どうかしたの』と少年は心配さうに訊ねました。

『何んでもないよ、オバーソン君、君達は心配しないで早く船室に歸つてゐたまへ』とアリアンは命令するやうに云ひました。けれども他の一人の少年は、

『だつて僕達はあんまり恐ろしくて、じつとしゝゐられないんだよ』と云ひます。

『他のものも皆恐がつてゐるんだよ』と大きい方の少年も云ひました。

アリアンは半分笑ひ聲で、

『心配することはないよ。歸つて蒲團にくるまつて眼を閉じてゐるがいゝよ。さうすりゃ怖ろしいこともあるまいさ』とアリアンが笑ひながら云つてゐる言葉のまだ終らぬうちにモコーは大聲で叫びました。

『氣をつけなさい、また大波がやつて來ましたよ。そら』

成程小山程の大波が來てどつと船尾の方にぶち當りました。然し、船室の方へは幸ひにも水はほひりませんでした。

アリアンはもう我慢が出來ないと云ふ風で二人は歸つてゐるんだと云ふのに解らないのか』

と嗔鳴りつけましたので、小さい二人の少年は駭つて船室の方へ梯子を下りてゆきましたするとまた別の少年の顏が梯子口からぬつと

出て、

『アリアン君、僕達にも働かしてくれないか』

と云ひました。

『いけないよ。君達は下方にゐて小さい者達の世話をしてやつてくれなきゃ困るぢゃないか。此處は僕達四人で澤山だよ』とアリアンは云ひました。

一體この船はこんな太平洋の荒波の中にゐてこれらの少年達の外に大人は一人もゐないのでせうか。

さうです。この船には十四人の少年と、給仕としての黒人の子モコーの外は一人も大人はゐないのです。

普通ならば百噸位のスクーナー型の船なら、船長と副船長が一人づゝに水夫が五六人はゐなくてはならないのに、十五人の少年だけとはどうした課なのでせうか。

そしてこの船は何の爲めにこんな太平洋へ乗り出して來たのか。そして何處へ行かうと云ふのか。

若し他の船が海の上でこの船に出遭つたなら、その船長は何よりも先にこんなことを訊れるに違ひありません。その時は少年達は充分にその課を話すことが出來たでせうけれども、この時はこの船の外に四方幾百里の間に一隻の船も見當らなかつたのであります。

かうしてスロー號は嵐の爲にさんざんいぢめられて、大波は絶えず甲板を乗り越えるし後の檣は折られて今は前に一本の檣があるばかりで、それも暴風雨の爲めに却つて船を危くする位です。帆は大方吹きちぎられて殘つてゐるものも隨分ひどく風に破られてしまひました。

夜半ごろになつてアリアンがモコーと共に一生懸命で甲板の上に働いてゐた時、船室の梯子から出て來た一人の少年は驚きの聲をあげて云ひました。

『來てくれ、早く來てくれ、船室の中へ水が漏り出した』

『ほんとか』

と叫んでアリアンも流石に驚きながら船室を駈け下りました。

あゝもういよいよこの船も沈むのか、と云ふ考へは電のやうにアリアンの頭の中を走つたのであります。

船室には一つの吊りランプが中ほどにかかつてゐます。

うす暗い光の下には十人の少年が、安樂椅子や寢床の上に横になつて、中には抱き合つてゐる者もあります。

八歳か九歳の少年達は恐ろしさにがタ〳〵と慄へてゐるのでした。アリアンは夫でも一同に元氣をつけてやらうと、

『僕達はもう陸に近づいてゐるんだ。皆んな心配することはないぞ』と云ひながら蠟燭をつけて、室内を見渡すと、少しばかりの海水が船の搖れるにつれて室内を流れ廻つてゐるのでした。

然し、アリアンが室内をよく〳〵調べて見ましたけれども、海水が漏るらしい場所も見えませんでした。

はて訝しいと思ひながらその濕つてゐる所をよく見ますと、成程わかつた。

それは甲板を洗つてゐる浪の飛沫が船に飛び込んで、それが船室にまで流れて來たものでした。それでアリアンはほつと一安心して、その課を皆の者にも話して安心させました。

アリアンは再び甲板に出て來ましたが、その時はもう夜は二時頃になつてゐました。嵐は少しも止みさうもありません。却つて益々ひどくなるばかりです。

その時アリアンは激しい嵐と波の叫びの中に、頭の上を啼いて通り過ぎた一羽の海燕の聲を聞きました。はて珍らしい聲と、アリアンはなつかしさにその聲の方を振り向きました。

海燕の聲を聞いたからと云つて必ずしも陸に近づいたとも云はれませんけれども、アリアンは何んとなくそんな氣がして急に勇氣が出て來ました。

二、モコー行方不明となる

また一時間ばかりしてから、まるで大砲でも打つたやうな轟然とした響がしたかと思ふと、前の檣が二つに折れて帆布はずゝたにちぎれて空中に飛び散りました。

『あゝ、もう帆をかけることも出來ない』

とドノバンは悲觀して云ひました。

『何、帆が無くなつたつて、帆があるのと同じやうに走ることが出來るさ』

とアリアンが力づけて云へば、モコーも、

『うまいことには船は波を背負たから、これからは眞直に走ることが出來るでせう。たゞ時々波に追ひかぶされるでせうから、僕達は舵輪にしつかりと縋みくゝりつけて、波に凌はれないやうにしなければなりませんよ』

と、モコーがまだ云ひ終らない内に一塊の大きな浪が壓し寄せて來て、その頭を船尾の上に出したかと思ふと、凄まじい響を立てゝ甲板の上に崩れ落ちて來ました。その浪は舷口（船廂の口）の一部をもぎ取つて、救命艇二隻と短艇一隻と羅針盤函とを凌つて、その上に船檣を碎いて海の中へ引き上げてしまひました。

若し波がそんなに迅く引き上げてくれなかつたら、船はその重さに耐え切れなくなつてきつと沈没してしまつたでせう。

この時アリアンとドノバンとゴルトンの三人は船室の梯子口になげつけられましたけれども、やつとのことでそれに捉まつて、海の中へ凌ぎ込まれることを逃れました。然しモコーの姿が見えません。モコーはほんたうに海に凌ひ込まれたのでせうか。

アリアンはやつと口が利けるやうになるとすぐ、

『モコー、モコー』

と、呼んで見ました。

『海の中へ凌ひ込まれたのかな。』

とドノバンは云ひました。

ゴルトンは急いで船側に行つて海の中をのぞき込みながら、

『影も見えない。聲さへ聞こえない。』

といひました。

アリアンはきつと決心して、

『僕達はどうしてもモコーを救はなければならぬ。さア、浮圖と索を投げるんだ。』

と云ひながら、

また、

『モコー、モコー』

と呼びました。すると何處からともなく微かな聲で、

『助けて……助けて……』

と云ふ聲が聞えます。

『おや、海ちやないらしいぞ、船首の方から聲がしたやうだ。』

と云つてアリアンは『僕が行つてあれを助け

て來る。』

とすぐ樣よろめく足を彼に凌ばれないやうに注意しながら、甲板の上を傳つてやつとのこと船首の方に走り寄りました。

ブリアンは舵口のところまで來て、またモコーの名を呼びましたけれども、今度は答へがありません。

二度、三度、『モコー、モコー』と呼んでゐるうちに微かな答へがブリアンの耳にはひりました。

ブリアンはその聲をたよりに蛟車盤と軸との間に來て、しきりに闇の中を探してゐましたが、やがて聲さへ出すことの出來ない黑人少年モコーの體に摸り當りました。

モコーは先刻の大波に放り出されて危く海の中へ波はれる所でしたが、幸ひにも帆綱に纏ひつかれて命だけは助かつたけれども、その帆綱はモコーの喉にまでからまつて、もがけばもがくほど喉をしめつけられて、今はもう呼吸することさへ出來ない程になつてゐたのでした。

ブリアンは手早くナイフを取り出して帆綱を切つてモコーを救ひ出しました。モコーに

嬉しさの餘り幾度となくお禮を云ひました。そして二人は悦んで、また舵輪の方へ戻りました。

幾度も船に乘つて海を歩いたことのあるモコーが助かつたので、少年達は大層喜びましたが、ふと氣がついて見ますとブリアンがさつき云つた言葉と違つて船の速力は大變減つてしまつてゐるのです。帆がなくなつてからは、波が船を追ひこし〳〵して先へ行つてしまふので、船はいまにも波の爲めにひつくり返されさうで、その危いこと一通りではありません。今は何一つ帆の代りにかける布もない少年達は、どうしてこの難儀から救はれることが出來るでせうか。

三、陸が！　陸が！

スロー號の進んで來た南半球の三月は私達の住んでゐる北半球の九月位の氣候で午前五時頃には曉の色が見えるのであります。夜が明ければ風の勢ひも輝まるかもしれないし若しまたなつかしい陸も見ること、あるかも知れません。この二つの中の一つでも幸ひに少年達に來るなら、この十五人の少年は九死のうちにも一生を得ると云ふものです。

凄まじい風の中にも待遠い曉はやつと來て四時半になるとどうやら東も白んで來た樣子です。靜かに東の水平線から明るくなり出して、だん〳〵とそれが空の色へ擴がつて行きます。然し不幸にも深い霧が來て海の上を包んでしまひましたので、少年達は三丁も先は見ることが出來ません。雲は恐ろしい勢ひで東の方へ〳〵と飛んで行くし、風はちつとも衰へないし、霧の流れる間々に前の方を眺めても、眼の屆く限りは水と雲で、外は何物も見えませんでした。

今まで根限り働いてゐた四人の少年もこれを見てぐつと力が落ちてしまひました。そして各々心の中で、自分達の運命が望み少なくなつたことを感じました。

その時！　モコーが急に叫び聲を上げたのを聞きました。

『陸が！　陸が！』

モコーはこの時霧の流れの間から、遠くの海の上に帶のやうに擴がつてゐた陸らしい影を見たのでせう。然し、それも忽ちのうちに霧の爲めに包まれて見えなくなつてしまひましたので、はたして、モコーの見たのは陸であるか、また、高く盛り上つた波であるかよく判らないのであります。

モコーの言葉に他の少年達は怪しみながらも喜びの爲めに胸が波うつやうでした。やがて霧がまた一寸晴れましたので、舳の左の方を見ますと、今はもう疑ひもなく陸がはつきりと見えるのであります。東の方の水平線上に、その長さ五六マイルに亘つてなつかしい陸地の姿は續いてゐるのであります。

『あ、ほんとだ、陸だ。ほんとに陸だ。』

とブリアンは我を忘れて叫びました。

スロー號が若しこの速力で進んで行けばその陸地までは一時間もかゝらぬうちにゆき着くことが出來さうです。風の勢ひは益々加つて來ましたが、今は一分でも早く陸に着けることが何より嬉しいので、少年達は却つてそれを喜んでゐました。

やつとの事近いて見ますと、その陸地の岸には百幾十尺とも知れぬ岩が聽のやうに立つてゐて、その岩の前の方には黃色に輝いてゐる砂の岬が見えます。その左手の方には一群の雜木林があつて、それは多分陸の内地の方まで續いてゐるものと見えます。

その林の緣、土の色、嚴めしい岩の姿を見て、彼等十五人の少年達はどんなにか胸を躍らせたことでせう。

ブリアンは舵輪を他の三人に任せて一人舳の方にきて、どこへ船を着けたらよいかと見定めてゐましたが、海岸には船を入れるやうな灣は一つもないし、そればかりでなく、岬の前の方には銀の齒のやうに立つてゐる大岩小岩が水の中から頭を出してゐることです。何んと云ふ危いことでせう。船がそれへ乘りかければ忽ち沈沒してしまふことはわかり切つたことです。

ブリアンは『これはいけない。』と思ひましたが、船室にゐる小さい少年達をも皆甲板に集めました。

小さい少年達は一度は眼の前に陸の見えたことを喜びましたけれども、大波が白馬のやうに跳ね上つて岩にぶち當つてゐる物凄い景色を見ては、知つて自分達の身が危いことを知つて中には泣き出すものさへありました。

四、暗礁へ乘り上げた！

午前六時の數分ばかり前、船はいよ〳〵海岸に近づきました。

ブリアンは早速に上着を脫いで船が暗礁に

乘り上げた時、誰かと海に落ち込んだらすぐ樣助け出さうと身構へました。

と、ゴリ〳〵ッと云ふ音がして船は何かにつき當つたやうです。正しく暗礁へ乘り上げたのでせう。

けれども幸ひなことには船の外側は大分痛められた樣子ですが、まだ水が船の中へ這入つて來るほどでもありませんでしたから、プリアン始め十四人の少年達はほつと一安心いたしました。

すると後から來た大波がまたどつと船を壓し出して、五十尺ばかり前の方へ進ませました。これで船は左の方へ傾きながらすつかり動けなくなつてしまひました。

かうして船はやつとのこと沈沒だけは逃れましたけれども、まだ砂の岬からは三丁も沖にありました。

プリアンとゴルトンとは船の中をすつかり調べて船の中に破れた所のないのを見屆け、安心してまた甲板に上つて來ました。そしてプリアンは皆んなに向つて、

『心配することはないよ。船は少しも破れちやゐない。それに陸地は眼の前にあるんだ。暫らく待つてゐたまへ。僕は上陸する方法を考へるから』

と云ひました。

『何だつて待たなきゃならないんだい。』

とはやく上陸したい氣でいつぱいなドノバンが云ひました。すると十二歳のキルコクスと云ふ少年も、

『さうだ、ドノバン君の云ふ通りだ、何だつて待つんだい。僕達ほどうしたつて待つてなんかゐられるもんか。』と合槌をうちました。

『何故つてさ。こんなに波が高いぢやないか。若し無理をして渉らうとすれば僕達は岩の上に擲げつけられて體を碎かれてしまふぢやないか。』とプリアンは云ひました。

『そんなことを云つたつて、ぐづ〳〵してゐるうちに船が碎かれてしまつたらどうする。』と今度はウエッブと云ふキルコクスと同じ年の少年が云ひました。

『僕はそんなことはないと思ふよ。少くとも潮の退いてゐる間は船の碎かれる心配はあるまい。』とプリアンはまた云ひました。

矢張り年上だけにプリアンの云ふことは正しかつたのです。太平洋の潮の滿ち干きはそんなに深山はありませんけれども、その區別ははつきりして居ります。若しプリアンの云ふ通りに今幾時間かを待つてゐれば、若しかすると海の底が出て來るほど潮が干いて、岩の上を傳つて歩いて行けるやうになるかも知れません。

けれどもドノバン、キルコクス、ウエッブ、ゲロースなどゝ云ふ少年達は何んでも彼でもプリアンの云ふ事ばかり聞いてゐるのが不平だつたので、それに逆らはうとしたのはこれまでだつて一度や二度ではなかつたのです。今まではプリアンが航海について一番よく知つてゐたので止むなくその云ふ事を聞いてゐたのですが、もう陸が眼の前に見えたからにはさう云ふ事ばかりも聞いてゐられない程、早く危い海から安全な陸地へ上りたくなつたのであります。

プリアンに反對の四人は船側の窓へ行つて海を暫らく見てゐましたが、波が荒く、岩が深山あるので、とても泳いでも渡つても行かれないと知つて、すご〳〵とまたプリアンのゐる所に來ました。それを見たプリアンは、自分達は十五人心を合せて働かなければならないことや、お互に離れゝばお互が身を危くするものだと云ふことをよく話して聞かせました。

『君は僕達に法律みたいなものをこしらへて從はせる權利がどこにあるんだい。』

とドノバンは餘りプリアンが大將ぶるのが癪にさわつたと見えて叫びました。

『いや、僕にそんな權利なんかありアしないさ。たゞ皆んなが一緒に助かりたいばかりに云つたゞけなんだよ。』とプリアンは云ひました。

『さうだ、プリアン君の云ふことに間違ひはないよ。』

といつも考へ深いゴルトンは云ひました。それにつれて、プリアンを信じてゐる二三人年若い少年が『さうだ、さうだ。』と聲を合せたので、ドノバンと他の三人は默つてしまつて向ふの方へ行つてしまひました。

プリアンはそんなことは心にかけずに望遠鏡をとつてしきりに陸の方を見てゐましたが、陸には一つの舟さへ見えず、一すぢの煙も立つてゐません。どうも人が住んでゐさうな樣子が見えないのであります。

風は少し靜まりました。少年達は船室や船艙から種々な食物や入用なものを甲板に持ち出していつでもそれを背負つて上陸出來るやうに用意しました。

七時頃になると大分潮が退いて海が淺くなりましたが、その代りにスロー號は前よりも餘計に左の方に傾き出しました。このまゝすつかり水が干てしまつたら或ひは横ざまにひつくり返らないとも限りません。

殊にこのスクーナー型の船は速力をうんと出す爲めに龍骨を高くして、船底をとがらしてありますので、その心配はもつともであります。

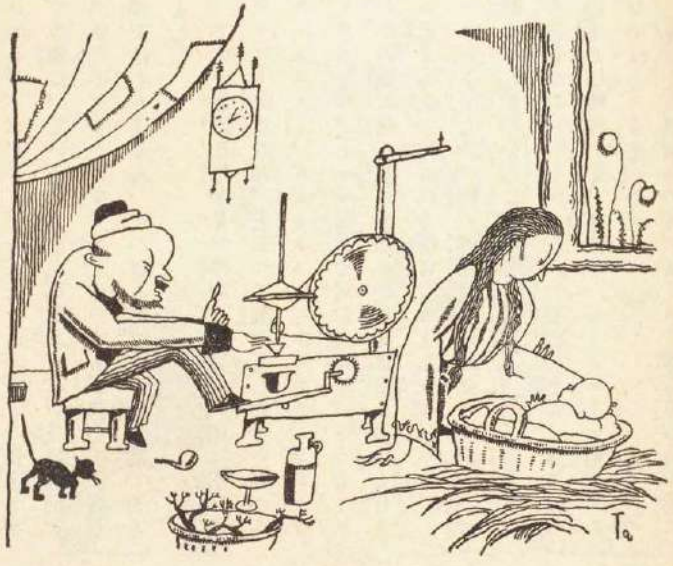
あの此夜の嵐の時に若しボートが一隻でも奪ひ去られずに殘されてゐたなら、それで早速漕いでゆくことも出來るのですけれども、今は船が危いとは思ひながらも潮の干てしまふのを待つより外、仕方がないのであります。

（つづく）

ひとりぼつち（推薦）

伊藤邦夫

夜明けのお空に
月ひとつ
はだかの銀杏に
星ひとつ
みよちやん死んで
僕ひとり



フンヌエスト、ガーマネスト、ヱコヱコ、ズンダラーラム王

武井武雄

空の西の方に不思議な星が現れました。この時、エッベ國といふ國の貧乏な珊瑚削りの仕事場の隅の繦褸の中で、一人の赤ん坊が生れたのです。側には珊瑚を削る轆轤が赤い粉を虹の樣に散して、ビーコビーコと小人の樣な小さい唄をうたひ乍ら廻つて居りました。その又側には鬚だらけのお父さんが、ちつと默つてびつこの足で轆轤のからくりを踏んでゐました。

赤ん坊は男の兒、お父さんは早速名前をつけました。その名前は、フンヌエスト、ガーマネスト、ヱ

コエコ、ズンダラーラム王といふのです。長生きをする樣に、といふのでこんな途方もない長い名前をつけたのださうです。王と云つても、決して王樣なのではありません。やつぱり貧乏人の赤ん坊でありました

この不思議な星を見た事から、村の人達は第二のキリストが生れた、と云つて騷ぎました。それからフンヌエスト、ガーマネスト、エコエコ、ズンダラーラム王などと一々呼んで居た日には、どうもこめかみの處が痛くなつて來るので、誰云ふとなく只ラム王ラム王と呼ばれる樣になりました。

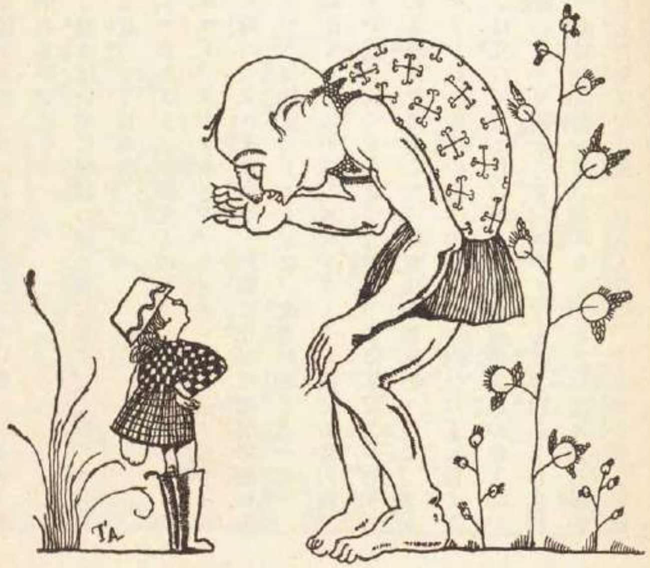
ラム王が七つの時、珊瑚削りのお父さんが、一寸庭へくしやみをしに行つて、仕事場へ歸つて見ると、今迄たつた一つしか無かつた髑髏の側に、もう一つの小さい髑髏が同じ早さで　ビーコビーコ廻つてゐたではありませんか。

吃驚したの何のつて、あんまり變な事が眼の前に出來上つてゐるので、お父さんは思はず自分の手で自分の額をパチンと打つてしまひました。その上もう一つ不思議な事：は、今迄珊瑚の屑の中で繪本を見てゐる小さなラム王の姿が見えません。いよ〱お父さんの禿頭の先から爪の先までが吃驚してしまひました。ラム王が變身の術を現はしたのはこの時からの事です。

それから後時々さういふ事がありました。お母さんが干葡萄を食べかけると、その干葡萄がいきなり『痛い痛い』なんぞと云ひ出したり、お父さんが髑髏前で居眠りをすると、耳の中の耳糞がだしぬけに『ヨオ、ヨオ』と大きな聲を立てるので、みんな少々氣味が惡くなつて來ました。

『うちのラム王はいつの間にか魔者に食べられてしまつたんだよまあ、そして魔者めがあんなラム王の姿をしてゐるのに違ひない、小憎らしいつたら。』

と、お母さんはブッ〱怒り出しました。



そこで間もなくラム王は、小さい乍らもなつかしい自分の住家を追出される事になりました。お母さんは、でも可哀さうだと思つたのか一袋の胡桃を、出がけにそつと渡してやりました。その實惡魔は胡桃が大好きだといふ事を聞いてゐたからなのかもしれませんけれども。

だがラム王の方では一向平氣なもので、悲しみもしなければ驚きもせず、散歩にでも出る樣な調子でブラ〱出かけてゆきました。夜になると駒鳥や啄木鳥になつて木の枝に眠り、晝は復ラム王になつて歩いてゐる内に、今度は本當の魔者に出喰はしてしまひました。魔者の方では相憎腹の減つてゐる處へ、意地惡く胡桃の匂ひがしてやり切れません。そこで馴れ馴れしくラム王の側へやつて來て、いやにニタリニタリと笑ひ乍ら、

『胡桃、……いやその、一寸ものをお尋ね致しますが、エヽトその貴君はラム王樣ぢやありませんか。』

『違ふよ君、人の名前を尋ねるのに仇名を云ふ奴があるかい。』

魔者はいやに理屈つぽい奴だなア、と思つたけれど仕方がないので、

『アツトさう〳〵御尤もの話で、するとそのフンヌエスト、ガーマネスト、エコエコ……。』と云つてゐる内に、ラム王は素早く蜉蝣に化けて魔者の腰にとまつて欠伸をしてゐました。魔者が漸く考へ考へ、

『えゝとそれから、ズンダラーラム王はあなた樣ですか。』と云つてしまつた時に、もうそこには何んにも居ませんでした。魔者はあきれかへつて、ソンダリとあいた口からべーッと舌を出したまゝ暫くそこに立つてゐましたが、その内に何と思つたものか悲しさうな顏をして、スタ〳〵と歩き出しました。

魔者の故郷へ着いてみると、そこにはエッペ國から七百里ばかり離れた巨人國で、その魔者はこの國の郵便くばりでありました。

そこで蜉蝣からびよこりとラム王にかへつて素敵に大きな門の處に休んでゐると、その門の中の方で、ズランカーン、ズランカーン、とそれはとても大きな金物を叩く音が聞えて來ました。どえらい鍛冶屋があつたもんだ、とあきれ込んで、とりあへず燕に化けて門を飛越えて樣子を見ると、鍛冶屋どころのお話でなく、驚く勿れ王樣の御殿ちやありませんか。

いま王樣と家來の目の前で力自慢の巨人が五六人、すばらしい鐵槌で變な鐵の箱の樣なものをなぐつてゐるのでした。ラム王はいきなり人間になつて王樣の前へ飛出してお辭儀をしました。それから、まづ第一にその變な箱の由來を聞いてみました。

恰度今から十一年前、西の空に不思議な星が現れた事があるが、漁師達が湖水の底からこの箱を見つけ出して引上げると間もなくその星が消えてしまつた。さては何か貴いものに違ひない、といふ譯で王樣の處に擔ぎ込んだが、それ以來國中の力持を集めて、十一年もの間ズランカーン、ズランカーンと叩いて來たのに、開くのは愚か凹みもしないといふ事です　十一年前といへば恰度ラム王の生れた年です。そこで小さいラム王は、王樣に向つて云ふ事に、

『私に一寸考へもありますから、あの箱をあけさせてみて下さいませんか。』

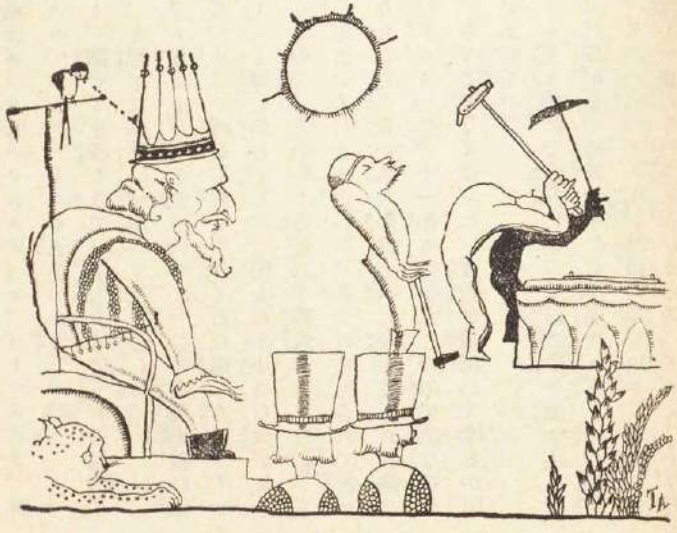
王樣をはじめ家來達が一緒に、いきなりブーッと吹出してしまひました。何を小人の癖に、身の程も知らない、と思つたからです。中にも力自慢の鐵槌を持つた奴共は、

『なんだ、この豆の樣な小僧奴、生意氣な事を抜かすとひねり潰して目藥にしてしまふぞ。』

とおどしつけました。王樣はちよいと顎を亂暴な奴共の方へしやくつて、

『これ待て待て、さてところで小人に聞くが、お前はどこのもので、何といふ姓名ぢや？』

と仰せられました。



『私はエッペ國のフンヌエスト、ガーマネスト、エコエコ、ズンダラーラム王といふ者です。』

と、聞いて王樣もさては小人の國の王かもしれない、と思つたので一寸頷いて見せました。

ラム王はまづ箱の側へ行つて一つの珊瑚轆轤に化けて、小さい時から馴らされてゐた廻し方でビーコビーコと廻し始めました。間もなく小さな穴があきましたので、そのやり方で二十程穴をあけると、すぐ蓋があいてしまひました。あつけにとられて眺めてゐた二百人程の人の眼は一齊に今あけられた箱の口に集りました。十一年も待つたこの不思議な箱から、さてどんなすばらしい寶物が飛出して來るか!!!といふので。

ラム王も急いで人間に還つて箱の中を覗き込みました。處がその時箱の中から恰度ラム王と同じ大さの、もう一人のラム王が飛出して、いきなりラム王の體と一緒になつてしまひました。するとラム王は見る〳〵内に、ムク〳〵とふくらんで立派な巨人の子供になつてしまひました。この時、王樣はしげ〳〵とラム王の顏を見てゐたが、眼に一杯涙を浮べて、

『オヽオヽ、お前歸つて來たかい。』と云ひ乍ら、ラム王に抱付いて鬚だらけの頰をこすり付けました。

王樣は可愛くて可愛くてならない、たつた一人の王子が十一の歳で亡くなつてから今迄、夢にも忘れられなかつたのに、その王子の顏を今眼の前に見たのであります。そして歳とつて霞んだ王樣の眼には、ラム王が巨人になつた時はじめてそれと見分けがついたのでありました。

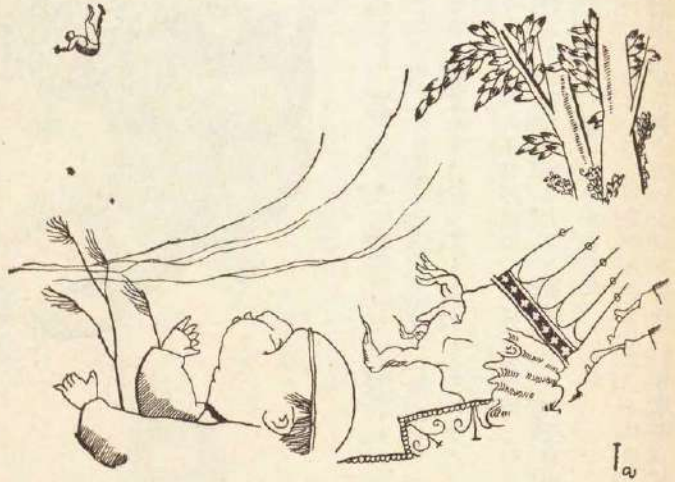
ラム王は、それから王子として何不足ない暮しをしてゐましたが、たま〳〵元の體が戀しくなる事があるので　その時は變身の術を使つて、時々小さなラム王になつては遊ぶのでした。

ある時小さい體になつて木の枝の上に唱歌を習つてゐると、すぐ隣に腰かけてゐた一人の巨人がいきなり立上つたので、今迄曲げられてゐた木の枝は、ビューンと恐ろしい音で風を切つて、はね上りました。ラム王は一たまりもなくスポーンと大空へフッ飛ばされてしまひ、王樣が飛出して御覽になつた時は、もう一つの小さい點にしか見えませんでした。

間もなくエッペ國の西の空に復不思議な星が現れたといふ評判が立ちました。又その星がやがて珊瑚削りの仕事場の方へ落ちた、といふ人がありました。

その時、珊瑚削りの仕事場の隅の縦樓の中へ、珊瑚の赤い粉のチッ〳〵と飛ぶあたりへ、そして小さい轆轤がビーコビーコと優しく呟いてゐる近くで、復一人の赤ん坊がフガーフガーと元氣よく泣き乍ら產れ落ちたのであります。

さてこの小さいフンヌエスト、ガーマネスト、エコエコ、ズンダラーラム王は、また元通りの事を始めから繰返すのでせうか。それとも又、前とは違つた奇拔な生涯を新しく送るのでせうか。（をはり）



池の主（推薦）

北田初子

『母ちやん、今夜も又お話して頂戴ネ。』と、私は毎晩するやうに、母さんのお蒲團の中へもぐり込みました。母さんはその晩次のやうなお話しを聞かせて下さいました。

『昔々ネ、上野の不忍の池の、そばに金丹園といふ薬屋がありました。家は大そう繁昌して、何不自由なく夫婦仲よく暮してをりました。

しかし、たゞ一つの不足がありました。それは二人の仲に一人も子がないことでした。その爲に二人は淋しい思ひをしてをりました。近所で遊んでゐる子供を見ても、外へ出て逢ふ人が子供をつれてゐるのを見ても、ちつとしてゐられませんでした。そしてとう〳〵上野の辨天樣へ願をかけました。

廿一日の間、雨が降つても風が吹いても、日參を缺かした事はありませんでした。すると、廿一日目の願明けの日から、妻はお腹が大きくなりました。まあ一家の喜びはどんなでしたらう。大事の上にも

大事を取つて、赤ちやんの生れる日を指折り數へてまつてゐました。いよ〳〵赤ちやんが生れました。それはそれは可愛らしい、玉の樣な女の子でした。夫婦をはじめ一家のものは店の小僧にいたるまで、皆んなよろこびました。

女の子は名をお光とつけて、手の中の玉のやうに大事に育てました。お光は大きくなるにつれて、いよ〳〵美しくなつて、そして、ほんとにやさしい利巧な娘になりました。夫婦の者はもう娘が可愛くて〳〵、心の中はいつも娘の事で一ぱいでした。娘のためには何んにもおしみませんでした。

お琴を習はせても、お三味線に通はせても、踊をならはせても、皆お師匠さんがおどろく程上手になり、茶の湯から生花、和歌の道まで、何一つ出來ないものはなくなりました。今は夫婦の自慢ばかりでなく近所近邊でお光をほめない者はありませんでした。お光が美しい振袖に、帶を猫ぢやらしに結んで、稽古の本を胸にかゝえて行く姿は、どんな人でも振返つて見ない人はありませんでした。

そんなにお光は美しくつて、そして何んでも出來ましたけれど、決して自慢をした事はありませんでした。ですからお光を知つてゐる人は、だれでもお光がすきでした。

お光は十七になつて、もうそろ〳〵お婿さんを貰はなければならなくなりました。ところがその秋の事、一寸したことから病氣になり、床につくやうになりました。はじめの内は、そんなにひどくなかろう、とおもつてゐましたのに、だん〳〵惡くなる一方で、却々なほりさうもありません。

さあ兩親の心配は大變です。それ醫者よ藥よと、出來るだけ手をつくしました。それでもよくなる樣子は見えません。今度は名醫といふ名醫にはすつかりみてもらひましたけど、どうしてもその病が何んだかわからないのです。かうしてお光はだん〳〵弱つて行きました。

悲しみの内にその歳も暮れましたが、未だよくなる見込みはありません。今はたゞ神佛の力におすがりするより仕方がなくなりました。

春ののどかな日がつゞくやうに つた時、めづらしくお光は氣持がよいといつて、床の上に起上りました。そして水が一ぱいほしいと申しますので、早速女中が水を汲んで來ました。

するとお光は一口のんで、

『不味い！』といつてはき出してしまひました。それから又も、一人の女中が水を汲んで來ましたが、これも又『不味いぢやないか。』といつもに似ず、むづかるのです。そしてたゞ、

『水々、水。』と水をほしがります。

又他の女中が今度は他の井戸から水を汲んで來てのませましたが、やつぱりまづいといつてはき出します。そこで手わけして、家中のものが總がゝりで水を方々から汲んで來て、それをのませてみましたが皆んなまづい！〳〵といつてのみません。一番しまひに、店の小僧の一人が、池の水はどうかしらとおもつて、不忍の池の水を一ぱい汲んで來ました。そして、それを飲ませてみましたら、

『まあ！ 甘味事 何んて甘味んだらう！ どうぞ

もう一ぱいください。』と急に晴々した顏になつて申しました。

又汲んで來て飲ませましたら、一層よろこんで、もつと〳〵と後をひきます。

仕舞にはその池のそばまでつれてつてくれとまで云ひ出しました。そして兩親が止めるのもきかず、一人で出て行かうとします。そこで兩親は今は仕方なく、皆んなして娘をつれて池のそばへつれて行きました。池の水をみると、お光は嬉しさうに雀躍しました。そしてその水を、

『あゝ甘味い〳〵。』と夢中になつてのみはじめました。しまひには、だん〳〵體を前にのばして、ア、甘味い〳〵といひながら、ヅル〳〵と池の中へ入つてしまひました。

『アッ！』

と皆はおどろいて引上げようとしましたが、その時は影も形もみえませんでした。その内、池の水が急にザワ〳〵と波立つて來て、池の中程にお光が浮出ました。皆んなは夢中で池のまはりにあつまりました。

『お光！〳〵。』

『お嬢さん〳〵！』

けれどもお光がこちらをむいて、姿を全體現はした時、一同は『アッ！』とおどろいてしまひました。お光はもう元の姿はなくて、體半分は蛇になつてゐました。お光は靜に皆に向つて、

『皆樣、お父樣お母樣、長い間大變お世話になりました。私はもとこの辨天樣の使姫でございました。そして辨天樣のお言つけで暫くこの世に生れ、貴方のお家でお世話になりました。今度又神樣のお召でこの池に歸らなければならなくなりました。御恩返しもせずに行くのは本當に申譯けのないことですがどうぞおゆるし下さいませ。池に歸つても、きつとお二人樣の身をお守り致します。では皆樣左樣なら。』

と云つたかと思ふと、その姿はもう水の中へ消えてしまひました。兩親は氣の拔けたやうに、そこへ泣き伏してしまひました。そして皆にたすけられてやつと家へ歸つて來ました。

それから大分年が經ちました。

或年、淺草の本願寺で偉いお坊樣のお剃刀をいただける事がありました。お剃刀といふのは、坊さんが金の剃刀で一寸頭をする眞似をするのです。さうして頂いた人は、死んでから極樂へ行けるのです。

ですから日頃信心してゐる人は、きそつて來るのです。其時は偉いお坊樣から直々にお剃刀がいたゞけるといふので、大變なさわぎでした。男は袴をつけ、女は白裝束で、髪を下げて、皆本願寺へつめかけました。

大勢女の人の來た中で一人、美しい氣高い女の人がありました。青ざめた顏をうなだれて、その目には涙がたまつてをりました。

式がすんで皆んなが歸へる時、その女の人は來た時とちがつて、嬉しさうにいそ〳〵として歸つて行きました。ぢつとその女をみてゐらつしやつたお坊樣は、そばにゐる坊さんに、

『お前方は今の女人を知つてゐるか？』と、おつしやいました。

けれ共だれもお答へ出來ませんでした。そこでお坊樣は又おほせになりました。

『あれはたゞ者ではない。たしかに蛇である。ことによると不忍の池の大蛇であらう。これであの蛇も天上することが出來るだらう。あれが蛇といふ證據には、あの女の座つてゐた跡が濡れてゐるだらう。しらべてみよ。』

皆は不思議に思ひながらしらべてみましたら案の條、しつとりと疊がぬれてゐました。それに、その女が來た時は、大變な雨がふりましたが、平氣で歩いていつたのも不思議の一つだつたのですが、その女が蛇と分つた時、皆は成程と思ひました。

それから二三日の後、不忍の池の上に五色の雲が下りて來ました。すると急に池の水が捲上つて、大きな〳〵蛇が姿を現はしましたが、その五色の雲にのつて天上してしまひました。すつかり蛇の姿が雲の中へ入つた時、上から、ヒラ〳〵と蓮華の花びらが散つて來ました。そのあり樣をみた人々は、皆池のまはりに集つて、そのいさましい、神々しい姿をおがみました。（をはり）

風車小屋の巻

ホシローフィルム

1

シッシッ イヤダ モウヂキダヨ

2

ソロ〳〵ウンテンヲ オツパジメヨウカナ

3

アッアッアッ…

4

ダイヤ

5

マママッテクレ

6

ホシロークン ドウシタ〳〵

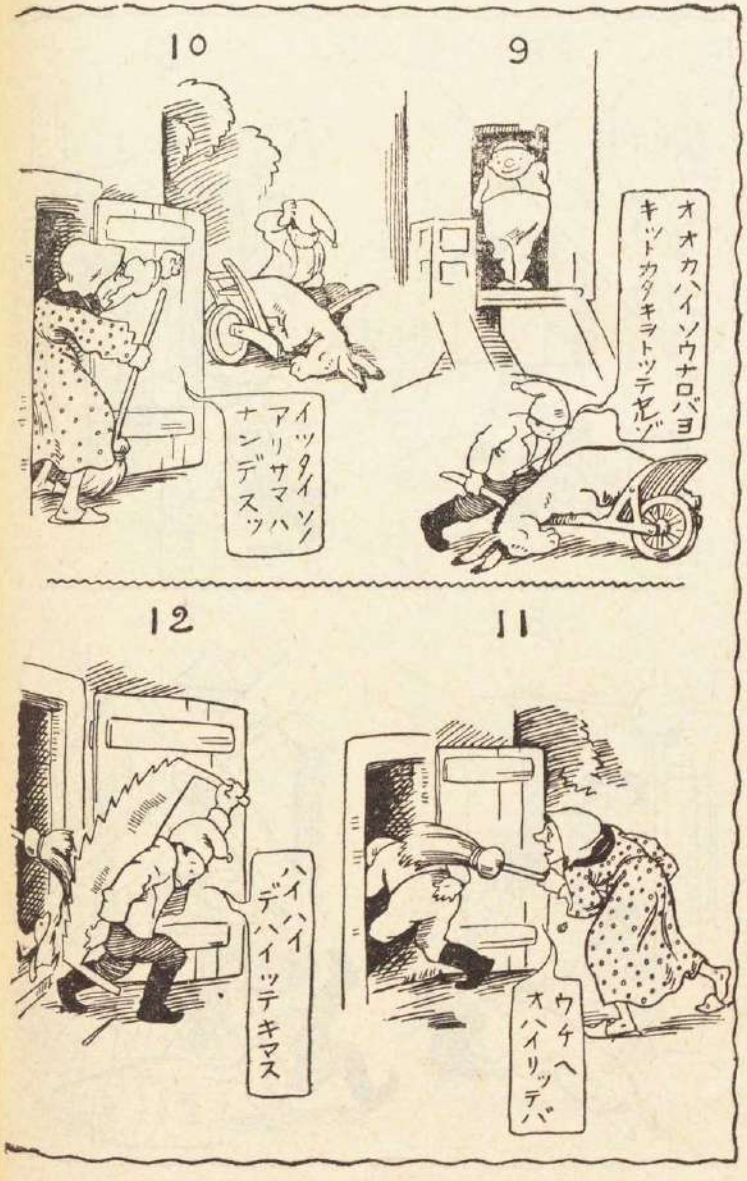
シッポガ キレタ アッ

7

ウワッ タスケテ

8

オボエテヤガレ


9
オオカハイソウナロバヨ
キットカタキヲトッテヤルゾ
10
イッタイソノ
アリサマハ
ナンデスッ
11
ウチヘ
オハイリッデバ
12
ハイハイ
デハイッテキマス

13
ロクデ
ナシノ
マヌケノ
14
イイアンバイニ
ネテヰルゾ
15
ドンナモンダイ
16
ヒヤッ
オホ
ジシン
ダッ
タスケテ
クレッ
エヘヘ…

諸國奇談

金貨を生む鼠

中川杏果

富山縣、富山市は昔から越中富山の反魂丹と云ふ名高い藥の名産地でありまして、この町に生れた男の子は十六歳になると、キツト藥箱を背負つて、日本全國を賣つて歩くことになつて居りました。

其處で一人の藥屋さんが、富山の町を出發致しまして、荒波で名高い日本海の沿岸に沿つて、だん〳〵と北の方、北の方へと、やつて參りまして、越後の直江津の濱へ着きました。さうして其處の宿泊屋に泊つて居りますと、夕飯の御給仕に來た女中さんが申しますには、

『藥屋さん、アナタは日本各地を年が年中お廻りになりなさるものだが、何が耳寄りの話は澤山お存知でせうが、一つ私に聞して下さいな。』と云ひました。

すると藥屋さんは『僕は、今度は國を出てからマダ幾日にもならぬので、今の處ではこれと云ふ面白い話は聞ぬが、女中さん、お前さんは、かうして毎日種々のお客さんのお相手をするのだから、ズキブン面白い話を知つて居るだらうが、一つ僕に聞かして下さいな』と云ひました。女中さんは、

『さうですか、お前さんはマダ國を出て來たばかりで何も知らんのならば、私は近頃珍らしい話を一つ聞かして上げませう。それはすぐ此の近所の名立と云ふ村のお寺に一疋の白鼠が居ますがナ、其鼠は十日目十日目に一粒宛のお米を喰べさせると、キツト一枚宛の金貨を生むさうです。喜が不思議のことには、モシ慾張つて一時に二枚の金貨が欲しいからと云つて二粒のお米を食べさせたのでは、少しも生まないさうです。それから又今日も一枚明日も一枚欲しいと思つて毎日お米を食べさせたつて、やつぱり駄目ださうです。何と不思議な話ぢやありませんか。』と云ひました。

これを聞いた藥屋さんは大層面白い話を聞いたので喜びました。それから晩になつて藥屋さんがツラ〳〵考へまするには、『僕は毎日かうして重い藥箱を背負つて、汗水たらして、日本全國を駈けめぐつた處で十日に一枚宛金貨を生む譯には行かぬ。思つて見れば、實に馬鹿々々しい話だ。一つ其の鼠を買ひ受けて自分の家に飼つて置かう。さうすれば、自分だつて毎日かうして歩かなくてもよし、至極、結構なことだ。』と思ひました。其處でいよ〳〵其の白鼠を買つて國に歸ることに決心致しまして、翌くる朝は、早々そのお寺を訪ねました。

『私は、越中富山の藥屋でございますが、こゝ

ちらには大變めつらしい白鼠が居るさうですが、どうか、それを私に賣つて貰ひたいものですが、いかがですか。』と云ひました。

すると寺の和尚さんは、『ハア、あの鼠ですか。實は誰にも賣らぬことになつて居りますが、お前さんが、さうして遠い處から、ワザワザやつて來たのでは誠に氣の毒でありますから、それぢや賣つて上ます。』と云ひました。

其處で藥屋さんは大變よろこんで、其の白鼠一疋を十圓に買つて國へ歸りました。が、やがて、恰度十日目の日が參りましたので、藥屋さんは、常より早く目をさまして、神樣や佛樣に御燈明をつけたり、お供へをしたりして、どうか此の白鼠が、金貨を生みまするやう、特別の御加護が願ひたいと祈りました。サテ其の白鼠に一粒のお米を食べさせますと、間もなく其の鼠はカチン〳〵と音をさせて、眼もくらむばかりに美しい山吹色の百圓金貨を一枚生みました。藥屋さんは大そう喜んで、又た次の十日目の朝も前と同じやうにしましたが、其の日も同じやうに百圓金貨を一枚生みました。其處で一家のものは大へん喜びまして、此の分ならば月に三百圓一年には三千六百圓の金は確かに儲ると云つて喜びました。

それから、少し經つてから其の藥屋さんが居ない時、その藥屋さんのお神さんが考へようするには、『十日目に一粒宛を食べさせて十日に一枚の金貨を生ませるよりは、ウント一時に澤山のお米を食べさせて、一時に澤山の金貨を生ませる方がよいぢやないか。今日は幸に、主人が留守だから一ツ試驗にやつて見よう』と思ひまして、一時に一合ばかりのお米を食べさせました。スルト見る〳〵うちに、鼠が大きくなつて來ましたから、お神さんは、大變よろこんで、此の分ならばキツト澤山の金貨を生んでくれるだらうと思つて居ました。スルトその鼠は、お米を喰べ終へるや否や、サツサと其のお家から外の方へ飛んで行きました。お神さんは大變びつくりして、これを捕へようとしましたが、鼠はとうとう居なくなりました。それから主人の藥屋さんが歸つて來て、此のことを聞いて、それは大變なことをしたと思ひましたが、モウ致し方もありません。あまり欲張つた罰であらうとあきらめて居りました。それから二三年たつて、其の藥屋さんが前の直江津に泊まりまして聞きますと、其の鼠は佐渡の金山へ行つて働いて居るとのことでありました。さうしてあとできますと其の鼠は、佐渡の金山が立ち始まつて以來棲むで居たのを、或る人が買ひ受けて名立のお寺へ奉納してあつたのだとわかりました。（をはり）

かくれんぼ

（自動遊び童謡）

野口雨情

下駄に火がつく
かくれんぼ
出て來

出て來　かくれんぼ
鼻緒が
燃える

下駄に火がつく
鬼さんは
留守だ

出て來　かくれんぼ
かくれんぼ
出て來

磁石島へ行つた坊さんの話（つゞき）

齋藤佐次郎

少年はふと、私の方を見ました。こんな場處で見知らない男を見たのすでから、少年は驚いて立上りました。そこで、私は安心させるために、すぐとかう申しました。

『あなたは誰か知りませんが、恐れることはないのです。私は王の子です。あなたを害しはしません。寧ろ私は、あなたが生きながら、埋められてゐるこの墓から、救出すためにこゝへ來たのです。』

私の言葉を聞いた少年は、やつと安心したと見えまして、私に向つて申しました。

『私は埋められたのではありません。隱されてゐるのです。しかし、どっちにしても此處にゐる譯は、あんまり不思議な事ですから、お話したらあなたはたゞ驚くばかりでせう。私の父は金持ちの商人で、澤山の土地や船を持つてゐます。手廣く寶石商をやつてをりますが、長い間自分の財産をつがせる子供がないのを悲しがつてゐました。ところがある日、夢を見ました。來年は子供が生れるといふ夢を見たのです。ところが果して私が生れましたので、私の行末のことに就て國中の賢人達に相談しますと、みんな同じやうなことを申しました。私は十五の歳までは仕合せに育つが、その年になると怖しい危險に出遇つて、逃れることが出來ないと申されたのです。しかし、その時を巧く免れることが出來れば、大層長生きが出來るといふのです。賢人達はまたこんな事も父に申しました。磁石島の頂上にある黄銅の馬を、カシブ王の子のアギブが、海の中へ投げ落したら氣をつけなければいけない。お前の息子はそれから四十日目にアギブの手にかゝつて命を失くすから、と申したさうです。

『この豫言は父の心をひどく悲しませて、その後何時までも、鬱ぎ込んでをりましたが、でも私の教育だけは、十分注意してくれまして、つい此の間私の十五の誕生日が參りました。ところが、昨日になりまして、磁石島の黄銅の像が十日前に海に投げこまれたといふ知らせが參つたのです。父は大層あわてゝ、早速、その時の用意にと前からこしらへて置いた此の地面の中の部屋へ私をかくしました。そして、四十日過ぎたら、私を出しに來るといふ約束をしました。しかし、私はちつとも怖くはありません。アギブがまさか此處まで、私を探し出しに來るとは思ひませんから。』

私は心のうちで笑ひながら、この話を聞いてをりました。

こんな罪のない少年を私が手にかけて殺さうなんて、餘りに馬鹿々々しい話だからです。そこで私は、少年に好意を持つてゐることや、尚それ以上に、保護してやりたくも思つてゐることを言ひました。その代り少年の父親の船に乘せて、私を本國へ歸れるやうにしてくれと賴みました。で、私自身が、少年のおそれてゐるそのアギブであることは、知らせないやうに特別の注意を拂ひました。

その日はいろ〳〵の話をして暮しましたが、少年は智慧が深いばかりでなく、敎育もなか〳〵あることを知りました。私は自分で下僕の役をつとめて、少年が顏を洗ふ時には金盥や水を持つて來たり、また食物をこしらへて、食卓の上に並べたりしましたので、少年はすつかり私を好くやうになりました。そこで、三十九日の間、私達は地の下で出來る限りの面白い暮しをして過しました。

四十日目の夜がほの〴〵と明けました。少年は目

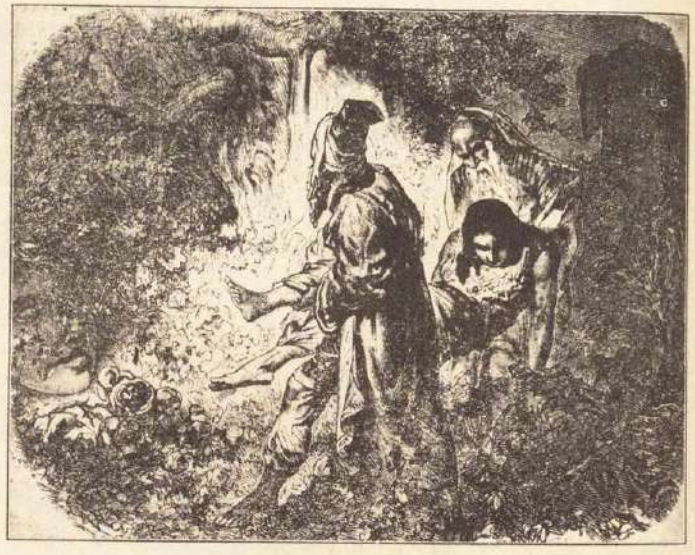
を覺すと、もう危險が去つたのだといふ喜びで一ばいになつて、私に禮をいひました。

それから少年は私に向つて、お父さんがいつ來るか知れないから、どうぞお湯を湧して、入れるやうにしてくれ、着物も着換えてお父さんを迎へる支度をしたいから、と申しました。

そこで私は賴れるまゝに湯を持つて來て、少年の身體を洗つたり擦つたりしてやりました。少年はその後でまた横になつて、暫く眠りました。眼を覺した時、少年は私に甜瓜と砂糖を持つて來てくれと賴みました。それを食べて元氣になりたいからといふのです。

そこで私は殘つてゐた甜瓜の中から一番よさそうなのを一つ選り出しましたが、それを切るナイフが見當りませんでした。すると少年が、

『私の頭の上の棚を見て下さい。あすこにあると思ふから。』と申しました。しかし、その棚は私のせい



よりも高くつてなか〳〵屆きませんでした。でも、やつとの事で屆いたかと思ふと、私の足が掛蒲團にひつかゝつて、アッといふ間もなく辷つて、恰度少年の上に倒れてしまつたのです。その途端、ナイフはヅブリと、少年の心臟に突刺つてしまひました。

この恐ろしい光景を見た私は、悲しみと苦しみで、聲をあげておい〳〵泣き出しました。私は地面に倒れて、着物を引裂き、髮の毛をかきむしりました。しかし、愚圖々々してゐたら、少年の父親が來て私を人殺しとしてどんな目に遇すかも知れないと思ひましたので、階段の石の揚蓋を起して地下室を出ました。そして、何も彼も元通りにして置きました。

さて、漸くにしてこれだけの事を終へた時、海の方を見ますと、一艘の船が島の方へ向つて走つて來るのが見えました。私はいかに自分の罪のないことをいつたとて無駄だと思ひましたから、またも傍

の樹に上つて自分の身體をかくしました。

老人と奴隷達は船が陸地に着くと、急いで地下室の入口の方へと歩いて來ました。しかし、近くへ來て、地面が掘り返されてゐることを知ると、思はず立止つて、眞蒼になりました。一同は言葉もなく、地の下へ降りて行つて、少年の名を呼びました。その後、一寸の間、何の物音も聞えません。

と、不意に怖ろしい叫び聲が聞えて來ました。次いで奴隷達が、老人の身體を抱へて階段を昇つて參りました。老人は悲しみのあまり氣絶してしまつたのです。奴隷達は私のかくれてゐる樹の下に老人を寢せて、息を吹き返させようと骨折りましたが、隨長分い時間かゝつてゐました。でも、漸くにして息を吹き返しましたので、奴隷達は老人を殘して墓穴を掘りに行きました。それから、少年の死骸をその穴に埋めて、土をかぶせました。

その仕事が終ると、奴隷達は地の下からいろ〳〵の家財道具を運び出して來て、船に乘せました。それから樹の枝を切つて筏を造つて、老人をその上に乘せて船までつれて行きましたが、やがて、船は帆を揚げて、海へ行つてしまひました。

私はまた一人ぼつちになつてしまひました。それからまる一と月の間、私は毎日島中を歩いて、どうかして島から出る工夫はないかと探しました。すると、或る日のこと、この島が思つてゐたより大きくて、しかも、陸地に近いといふことを發見したのです。私は、嬉しさのあまりをどり上りました。これが本當だとすればありがた過ぎます。しかし、暫くの間見つめてゐましたが、全く疑ふ餘地がありませんでした。島と陸地の間はたゞ一つの小さい川を渡ればいゝのでした。

私は無事に向側の陸地に着くことが出來ましたが、でも乾いた地面に達しるまでには、沼地のやうな處や、砂の上などを越して行かなければなりませんので、大層疲れました。その時でした。遙か向の方を見ますと、銅のお城が見えたのです。一と目見た時には火事ではないかと思つた程でした。私は出來るだけ急いでその方へと參りました。そして、疲れた足をひきずりながら數哩の間行きますと、やうやくその前まで來ましたが、來て見ると本當にびつくりしてしまひました。私はこれまでにこんな不思議なお城を見たことがなかつたのです。

さうして私が驚いて眺めてゐますところへ、背の高い一人の老人が來ました。その老人は綺麗な顏をした十人の青年を連れてをりますが、どの青年も右の眼がつぶれてゐるのです。

何といふ不思議な光景でせう。十人の青年が一人のこらず右の眼がつぶれてゐるなんて。——全く銅のお城と同じやうに不思議なことです。私は心の中で一體この不思議には、どういふ意味があるのだらうと獨りで考へてをりますと、その人達はやさしく私にあいさつをして、どうして此處へ來たかと尋ねました。そこで、私は、自分の話はなか〳〵長いから、坐つてゆつくり聽いてくれゝば話すと答へますと、その人達は是非話してくれと申しましたので、私は皆な話してしまひました。すると、その人達はお城まで來てくれないかと頼みましたので、私は喜んで一しよについて行きました。

お城は非常に廣くて、通り過ぎた部屋は數知れないほどありましたが、最後に大廣間があつて、そこには寢臺と腰掛けを兼た青い色の小さい長椅子が恰度十個備へつけてありました。それは青年たちの分で、その眞中にある別の一つは老人の分でした。そして、どの椅子も一人しか掛けられませんので、私は床の敷物の上に坐るやうにといはれました。そしてまた、何を見ても、一切質問してくれるなといはれました。

しばらくたつと、老人は立上つて夕飯を持つて來

ました。私はお腹がすいてゐましたので、がつ〳〵それを食べました。と、青年の一人が、もう一度私の話をしてくれないかと賴みましたので、私がまた話しますと、一同は驚きに打れて聽いてゐました。話がすむと、青年達は老人に向つて、もう遲いから床に入りたいと思ふから、おつとめをして下さいと言ひました。その言葉を聞くと老人は立上つて、押入れの方へ行つて、中から青い布のかゝつたお盆を十板出して來ました。そして、それを燭のついた蠟燭と一しよに青年の一人々々の前に置きました。

お盆の巾を取ると、中には灰と炭の粉とランプの油煙が一ぱい入つてゐます。青年たちはめい〳〵それをかき混せて、自分の頭と顏に一面に塗りつけました。それから自分の胸を打つて『皆な怠惰の結果でございます。われ〳〵の惡い生活の結果でございます。』といひながら、おい〳〵泣き出しました。

この行はほとんど夜中つゞきました。それが終ると青年達は、身體を丁寧に洗つて、きれいな着物を着て、横になつて眠りました。

これを見てゐた間に私の好奇心は燃え立つて、燃え立つて、身體に燒穴でも出來さうな位でしたが、それでも譯をたづねずにぢつと辛抱してゐました。しかし、翌日になつて皆と一しよに散歩に出た時、私はとうとう堪え切れなくなつて、

『皆さん、私は皆さんの命令に背かなければならないのです。もう默つて辛抱してゐられません。皆さんは智惠の足りない人でもないのに、なぜ狂人でなければ出來ないやうなことをなさるのです。皆さん、私の身にどんな事が起きて來ても構ひません、是非これだけのことを伺はせて下さい。何故あんな黑い物を顏にお塗りになるのですか。それから何故皆さんは、一人殘らず片方目がつぶれてゐるのですか。』とかう申しました。

しかし、これ程までに私がいつたにも拘らず、青

年たちは、そんな事はあなたに關係のない事だし、却つて平氣でゐてくれた方がいゝ、とだけしか答へませんでした。

で、その日は一日外の事を話して暮しましたが、夜になると、また同じ行を繰返しますので、私は前よりも熱心に、その譯を話してくれと賴みました。

すると、青年の一人が、

『あなたのお賴みをきかないのは、皆なあなたの爲めを思ふからです。私どものやうな不幸にあなたがならないやうに思ふからです。しかし、あなたが私達と同じ運命になりたいと仰るのなら、すぐにもお話します。』

と、かう申しました。そこで私は、たとへどんな破目になつても構はないから、自分の好奇心を滿足させたいといふことや、それからどんな結果でも自分の身に引受けて、決してあなた方を怨まないといふことをいひました。すると青年がまた私にいひますには『たとへあなたが眼を失ずやうなことがあつても、もう人數が一ぱいでこれ以上增すことが出來ないから、私達と一しよに置く譯には行きません。』とかう申しました。しかし、私はそれに答へて、あなた方のやうな正直な方と別れるのはつらいが、そのために自分の決心を變へることは出來ないといひました。

私の堅い決心を聞きましたので、十人の青年たちは一頭の羊をひいて來てそれを殺しました。それから一丁のナイフを私に手渡して、これは今に入用になるからと申しました。

『この羊の皮の中にあなたを縫ひ込んで、私達は歸つて行きます。すると、ロック鳥といふすごく大い鳥が、あなたを羊だと思つて現れて來ます。その鳥はあなたを掴み上げて空中高く飛び上りますが、決して驚いてはいけません。何故かといひますと、鳥は無事にあなたを下ろして、山の頂上に置くから

です。そこで地面の上に降りましたら、あなたはナイフで皮を切つてそれをお脱ぎなさい。ロック鳥がまた間もなく來ますが、羊だと思つたのが人間なので、恐れて飛んで行つてしまひます。しかし、あなたはそれからお城のあるところまで行かなければいけません。そのお城は黃金の延板で張りつめてあつて、寶石が一ぱいちりばめてあるのです。それから大膽に門の中へ入つておいでなさい。門はいつも開けたさゝになつてゐますから。しかしそのお城で私達が何を見たか、またどんな目に遇つたかといふことは訊いて下さいますな。たゞ、そのお蔭で私達は右の目を失くして、この通り毎晩苦しいおつとめをしなければならなくなつたといふことだけをお話しすることが出來るのです。」

青年の一人はかういつて私に話しました。

それから皆なして、私を羊の皮の中に縫ひ込んでしまふと、私だけを一人殘して家へ這入つてしまひました。

間もなくロック鳥が現れました。そして私を爪にひつかけて、まるで一枚の羽かなんぞのやうに輕々と山の頂へ持つて行きました。この大きな白い鳥は象でさへ山の中の自分の巣へ運んで行くといふ強い鳥なのです。

そこで私は、足が地面にさはると、すぐ樣ナイフを取出して羊皮の縫糸を切りました　私の着物姿を見たロック鳥は膽をつぶして、さつと翼をひろげて飛んで行つてしまひました。そこで私はお城を探しに出かけたのでありました。

幾日の間さまよひ歩きましたでせうか。その内に漸くお城を見つけましたが、その立派さはこれまでに思つて見たこともない程です。門を入ると、眞四角な庭がありました。その庭に面して百枚の扉が開いてをります。その内の九十九枚は珍しい木で出來てをりますが、殘りの一枚は黃金で出來てをります。扉の間からは、美しい花園や、品物の一ぱい入つた倉が見えてをります。

ためしに開いてゐる一枚の扉から入つて行つて見ますと、大廣間へ出ました。すると四十人のそれは〳〵美しい娘さんが椅子にもたれてゐたのです。娘さん達は私を見ると、すぐに立上つて、よくおいでになりましたといつて私を迎へてくれて、自分たちの椅子より一段高い椅子に私をかけさせてくれました。しか

しこれだけではまだ足りないといふやうに一人の娘さんは、驚くほど立派な着物を持つて來て私に着せてくれました。また一人の娘さんは香水をなみ〳〵と盤に入れて來て私の手にかけてくれました。また、一人の娘さんは忙しく御馳走の支度にかゝつてくれました。そこで、私はおいしい御馳走や珍しいお酒を食べたり飲んだりしましたが、その後で娘さんたちはぐるりと私を取圍んで、私の冒險談をのこらず話してくれと頼みました。

私が話しを終つた時は、もう夜になつてゐました。娘さんたちはお城へ蠟燭をともしました。その明るさは晝をあざむく程でした。やがて私どもは晩餐の席につきましたが、テーブルには干した果物や味のよい肉がいろ〳〵出ます。皆なは歌つたり踊つたりしました。私はすつかり面白くなつてしまつて、時のたつのを忘れてをりますと、一人の娘さんが私の傍へ來て、『もう眞夜中ですから、さぞお疲れになつたでせう。お部屋が用意してありますから。』といつて私を案内してくれました。娘さんはお休みなさいといつて、私を殘して出て行つてしまひました。

それから三十九日の間、私は最初の日と同じやうに過しましたが、いよ〳〵四十日目になりますと、娘さんたちは、いつもの習慣通り私の部屋に來て、よく眠れたかどうかと訊ねました。しかし、その樣子を見ますと、いつものやうに元氣にこ〳〵してはゐないで、目に一ぱい涙をためてゐるのです。

娘さん達は申しました。

『私どもはいよ〳〵あなたとお別れ申さなければなりません。しかし、こんなにお別れのつらい事は今までにない事です。もう二度とあなたにお目にかゝれることは御座いますまい。もつとも、あなたがしつかりした克己心さへ持つてゐらつしやれば、またお目にかゝれる事もあるのですが。』と申すのです。

そこで私は、

『皆さん、不思議なことを仰ひますが、それはどういふ譯ですか。』と尋ねました。

すると、娘さんの一人が、

『私たちは皆な王女です。ある王の娘です。私たちはあなたの御存知の通り一しよにこのお城に住んでをりますが、毎年、年のをはりになりますと、ある秘密の役目をはたすために、四十日〻間呼び戻されるのです。その時が今まゐりました。しかし、私どもが出かける前に、あなたに鍵を置いて參ります。それがあれば、お食事やその他の事にお困りになる事はありません。ですが、たゞ一つあなたにお願ひして行かなければならないのは、どんな事があつても、黄金の扉だけは決してお開けになつてはならない事です。もし、それをお開けになれば、あなたには平和がなくなつて、一生涯不幸になつてしまひます。あなたがその扉をお開けになつたが最後、私どもはあなたと永久にお別れでございます。』と申しました。

私は泣きながら、必ずあなた達のいふ通りを守ると約束いたしました。娘さん達は私をやさしく抱いて、それから皆などこかへ出て行きました。

それから毎日私は二つか三つづゝ新しい扉を開けて見ましたが、いづれも中には珍しい物が澤山にありますので、王女達のゐない事は物足りないことではありますが、でも怠屈を感じずに過しました。例へばある扉を開けて見ますと、中は果樹園になつてをります。そして、そこに實つてゐる果物は、私の父の果樹園のものなどは、比べもつかない程大きなものでした。またある扉を開けて見ますと、中は花園になつてゐて、バラや水仙やヒヤシンスやアネモネーなどをはじめ、その外名も知れない何百といふ花が咲き亂れでをりました。それからまた、あらゆる種類の歌をうたふ鳥のゐるところもありますし、

寶石を一ぱい積み重ねた倉もあります。凡そ何處を見ても、その物の種類が殘らずそろつてゐました。

三十九日は私の思つてゐたよりも早過ぎました。そして、明日はいよ〳〵王女達がお城へ歸る日になりました。しかしあゝ、私はもうどこの隅々までも見てしまつたのです。私を慰めてくれる物はもうありませんでした。殘つてゐるものはたゞ、黄金の扉の閉つた部屋が一つあるだけです。私は暫くの間禁じられてる場處の前に立つて、その美しさに見とれてをりました。が、ふいに、うまい考へが浮んで來たのです。

『扉を開けたつて、必ずしも中へ這入らなくてもいいのだ。外に立つてゐて、どんな不思議なものが中にあるか、たゞそれを眺めただけで澤山だ。』と、こんな風に自分の良心にでたらめな理窟をつけたのです。そして鍵を廻しました。と、どうでせう、ぷーんと香がして來たのです。それは〳〵いゝ香でしたが、それにすつかり醉はされてしまつて、私はばつたり闕の上に氣絶して倒れてしまひました。しかし、これに懲りもしないで、私は正氣づくと暫くの間、外の空氣に吹かれてゐましたが、今度は大膽にもすか〳〵中へ入つて行きました。やがて大きな圓天井のある部屋に出ますと、金の燭臺には蠟燭がともされてをります。伽羅の香や、龍涎香の香がたゞよつて參ります。天井からは黄金や銀のランプが下つてをります。

私の周圍には實にめづらしい細工物が一ぱい列んをりましたが、私はそんな物には目もくれませんでした。といふのは、一方の隅に立つてゐる黑い馬にすつかり氣をとられたからです。全くこれまでに見た動物の中で、これ程美しい形の整つたものは見たこともありませんでした。鞍といひ手綱といひ、がつしりした黄金で出來てゐて、皆な面白い形に出來てゐます。その餌槽は中をしきつてあつて、一方には大麥と胡麻が入つてをりますし、もう一方には薔薇水が入つてゐます。私は馬を部屋の外に引出して來ました。それから其の背中に飛び乘つて手綱を引張つて見ましたが、どうしても動きません。そこで私はためしに厩で拾つた鞭を輕く馬にあてゝ見ました。と、忽ちに馬は、この時まで見えなかつた翼をさつと擴げて私を乘せたまゝまつしぐらに大空めがけて飛上りました。そして、非常に高いところまで達したと思ふ頃、今度は忽ちに大地を目がけて矢のやうに下つて行つて、あるお城の櫓の上に降りました

が、その途端に私を鞍の上からはげしく振り落したのです。その拍子にビシヤリと尻尾でもつて、私を打

ちましたので、私の右の眼はつぶれてしまひました。

私は半氣絶してしまひました。

『あゝ、あの十人の青年たちと同じ運命に出遇つてしまつたのだ。』と考へながら、私は雲の中へかけ上つて行く馬の姿を見つめてをりました。それから私は橋を下りて、よろよろ歩き廻つてゐますと、廣間に出ました。どうも見覺えのあるところのやうな氣がしますので、よく見ると、その筈です。さきにロック鳥が私をさらつて行つたところだつたのです。

十人の青年達は私が入つて行つた時にはゐませんでしたが、間もなく老人に連れられて歸つて參りました。そして、親切に私にあいさつして、私の不幸を慰めてくれました。この人達は私がかうなるのを前から豫想してゐたのでした。

青年たちは私に申しました。『あなたが爲すつたことを私たちも同じにやつたのです。あなた私達以上に賢くなかつた爲めに、同じ罰に遇つたのです。ですから、あなたも私達の仲間に加へて、一しよに苦行を修めて行きたいのですが、前にお話しいたした通りそれが出來ないのです。ですから、こゝを去つて、バグダットの宮殿へお出でなさい。そこへ行けばあなたの運命が決りますから。』

さういつて、青年達はそこへ行く道を私に敎へてくれました。私は皆なにお別れを告げました。

途中で私は髯と眉を剃り落して、坊さんの衣を身につけました。それから長い旅をして漸く今晩この町へ入つて參りました。ところが町の門のところで、私と同じ回々敎の僧に出遇つたのでございます。不思議にも三人とも同じく右の眼がつぶれてをりますので、お互ひに顏を見合せて不思議なこともあるものだに思ひましたが、まだ暇がなくてお互ひの不幸な運命を語り合ふことも出來ずにをります。』

――かういつて、坊さんは長い〳〵不思議なお話ををはりました。（をはり）

支那傳奇童話號

孫悟空と牛魔王……楠山正雄

仙人……小島政二郎

醉つぱらひ狐……三宅房子

妙な占者……宮島資夫

とんだお客樣……藤森淳三

瓢簞と冬瓜……犬田しげる

孫悟空と牛魔王

楠山正雄

一

唐の三藏法師が天子さまのおいひつけでその時分天竺といつた西の方の印度の國まで、何千里といふ道をはるばる貴い佛さまのお經の本をもらひに行く旅に出てからもう三年あまりたちました。その間には隨分いろいろなことがあつて恐しい化物につかまつて命をとられやうとしたり、それでなくつても長い旅の間はたべ物も水もない荒野に行きくれて、凍え死か飢ゑ死かといふ目にあつたことも幾度だか知れませんでした。でもその間、かよわい三藏法師の影身に添ふやうにして、守護して來た三人のお弟子がありました。それもみんなあたり前の人間のやうではなくて、第一にまづ孫悟空、これはもと不思議な石から生れたお猿の化物でした。その次に猪八戒、これはもと大空の星の仲間であつたのが惡いことをして、この世に落ちて猪の姿に變へられたものでした。それから、最後にもう一人、沙悟淨、これは河童の化けたものでした。

この三人は形こそ醜い化物ですが、みんな心から三藏に歸依して風を起したり、雲に乘つたり、雨を呼んだり、稻妻を走らせたり不思議な術を使つては行く先々の化物を退治して三藏を危難からのがれさせました。中でも孫悟空は智慧も勇氣も法術もすぐれてゐて、觔斗雲といつて一分間に十萬八千里走る雲に乘つたり、金箍棒といつて縮めると耳の中にも入る代りに、これを伸ばすと上は大空を突きぬいて、下は地獄の底までも屆くといふ不思議な鐵棒を振りまはしたり、身外身といつて、體についた何千本といふ毛をぬいて吹けば、自分の姿に似た何千匹の猿になつて、その猿が一匹々々、一本づつの金箍棒を持つて驅け出すのでした。

さて夏もすぎてもう秋も末に近く、木の葉がはらはら風につれて舞ふ頃でした。三藏法師と三人のお弟子たちは、ある日長い野道をとぼとぼすぎて、はるか向ふに一つの大きな山を仰いで見る一つの村へかかりました。山がだん／＼近くなり大きくなつて來るに從つて、何となく蒸し暑く、けさ宿を立つて來た時の肌寒さとは大違ひで、夏がきたかへつて來たかと思ふやうな陽氣になつたので、三藏法師は思はず額ににじんだ汗をふきながら、乘つてゐた馬を止めてかういひました。

『どうもあつい。もう秋も末なのに、どうしてこんなにあついだらう。』

すると八戒が、

『何でも西へ／＼と道をとつて行くと、俗に「天のはづれ地の果。」と呼ぶ國があるさうですね。そこは何でも日が落ちて海にはひるはづれの所で夕方日がおちると一しよに海の水がぐらぐらと煮え立ちます。その熱でむし殺されるやうになるのです。で、毎日

その時刻になると、その國の王さまのお城の上から太鼓を打つたりどらを鳴らしたりして、人民たちを山の蔭や森の中の涼しい方へにげさせるのださうですね。きつとわたしたちはあんまり西へ〳〵來すぎて、とう〳〵この天のはづれの國まで來てしまつたに違ひない。』

かういふと悟空が笑つて、

『この阿呆、くだらないことをいふな。どうしてこんなにぐづ〳〵歩いてゐたのでは、われわれが三度位生れ變つて來なければ、天のはづれはおろか、天竺までだつて行き着けさうもない。』

と、いひました。

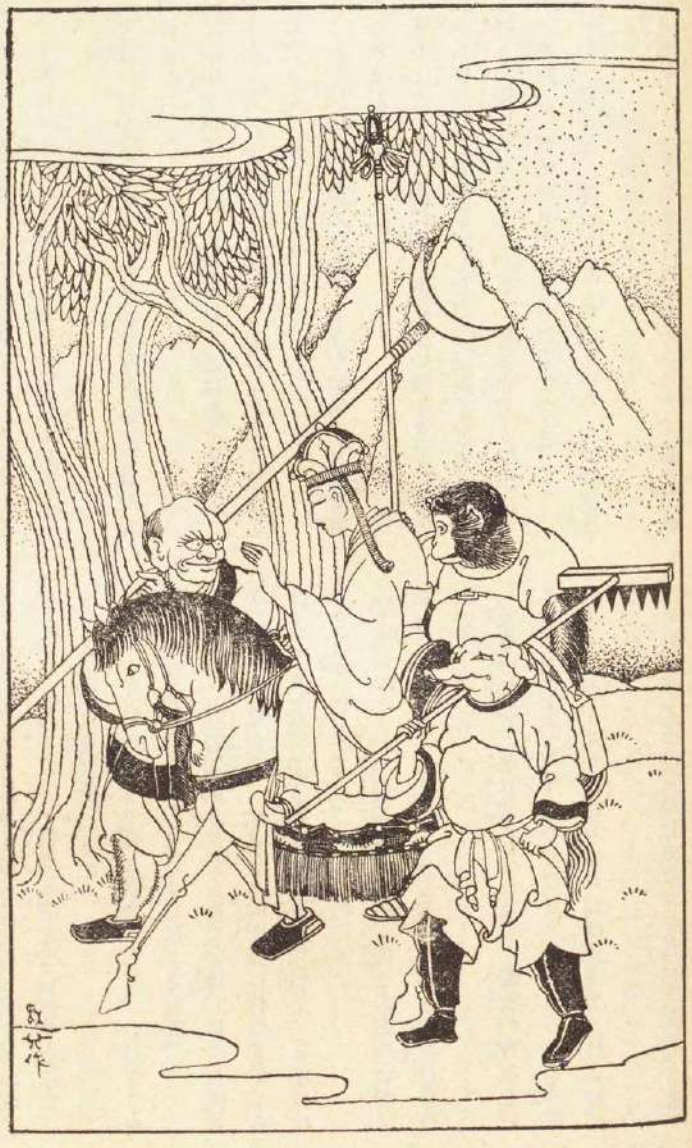
沙悟淨はまた一人で呟くやうに、

『ことしは氣候が不順だつたから、夏と秋が入れ變つたんだらう。』といつてゐました。

かういつて三人てんで〳〵勝手なことをいひ爭つてゐるのを、三藏は止めて、

『これ〳〵お前たちそんなことをいつてゐるよりもあれに一軒屋敷が見える。あすこへ行つて聞いて見るがいゝよ』といひました。見るとなるほど一町ばかり先に、門も屋根も壁も眞赤にぬつた一軒の屋敷があつてちやうど中から品のいゝ一人のおぢいさんが出て來ました。おぢいさんは悟空たちの恐しい顏つきを見ると、びつくりして門の中ににげこまうとするのを三藏は呼び止めて、どういふわけで秋の末だといふのに、この邊はこんなに氣候があついのだといつてたづねました。おぢいさんは三藏があたり前の人間である上に、氣高い樣子をしてゐるのを見てやつと安心して、かう話しました。

『もうこの邊は夏も冬もない、いつもこのとほりです。それはごらんのとほり向ふに見える山ですが、あれは火焰山といつて、こゝから六十里ばかりの道ですが、その山はいつも一めんの火で、そのまはり百里あまりといふものは一本の草も生えません。それ



をむりに越さうとすれば、銅や鐵でかためた體だつて、とろけて水になつてしまうでせう。』といひました。

『天竺へ行く道はほかにありませんか。』と三藏がたづねました。

『この山を越すほかに天竺へ行く道はありません。ですから昔から天竺へ行つたものはないのです。』とおぢいさんは答へました。

これを聞いて三藏は勿論、さすがの悟空たちも青くなりました。

するとその時、赤い車の上に赤い旗を立てた男が頭からぽつぽと湯氣をたてながら『團子やい。團子』と呼んで賣りに來ました。さういふ中でも悟空はお猿の本性で、意地がきたないものですから、

『おい、團子屋、團子をおくれ。』といつて、呼び止めました。團子屋はにこ／＼しながら、

『旦那あつうございますよ。』といひ／＼、蓋を開けて、むんむ／＼と湯氣の立つ中から、大きなお團子を一つつまみ上げて、悟空の手の上にのせました。

すると悟空は思はず、

『あッ。』といつたなり顏を眞赤にして、あわててお團子をはふり出してしまひました。そして、

『何だ、こんな馬鹿々々しくあつい物がたべられるか。』といひながら、いきなり團子屋に打つてかゝらうとしました。でも團子屋は平氣な顏で、よけいにこにこ笑ひながら、

『だつてこゝは火焰國ですもの、何でもあついのはあたり前ですよ。』といひました。すると悟空はなほおこつて、

『馬鹿、昔か　暑さ寒さがあるので穀物が實るといふぢやないか。年中あついばかりで、どうして米が出來るのだ。米が出來なければ團子もつくれまい。』といひました。

それまでだまつて聞いてゐたおぢいさんが、この時口を出し、『それはかうですよ。たといまも申たとほり、この界隈百里四方は暑さのために草も生えない位です。ましてお米がみのらうはずがありません。でお米を作らうと思ふ時は、鐵扇仙人の所へ十年に一度猪と羊の肉にお酒を添へて持つて行つて、丁寧に賴んで芭蕉扇といふものを借りて來るのです。その扇で一度あふぐと、さしも盛んな火焰山の火がぱつたり消えます。二度あふぐと、そよ／＼涼い風が吹いて來ます。三度あふぐと　ざあ／＼雨が降つて來て、いゝ具合に土をうるほしてくれます。その間に種を蒔いて、苗を仕立てゝ、實を結ばせて、稻を刈り取るのです。取り入れがすむと一緒にまた山の上には火が燃え出して、やがてもとのとほりの、草も生えない燒野原になつてしまうのです。』

かう聞くと悟空はよろこんで、

『ふん、それは耳よりな話ですね。その仙人のゐる山はどこにあつて何といふ山です。』とたづねました。

『それはこゝから西南の方にあたる翠雲山といふ山で、山の中の芭蕉洞といふ所に仙人は住んでおいでなのです。でもその山はこゝから千四五百里もある。どう急いでも二十日あまりかゝる遠方ですよ。』とおぢいさんはいひました。すると悟空は馬鹿にしたやうに笑つて『なに千四五百里。よし／＼ぢやあちよいと行つてその扇を借りて來る。』とかういふが早いか、雲に乘つてついと飛んで行つてしまひました。

おぢいさんは呆れて空を仰ぎながら、

『やれ／＼、妙な顏をした化物だと思つたら、雲や霧に乘つて歩く仙人だつたのか。』といひながら、あとに殘つた三藏法師やお弟子達を大事にして、屋敷の中に招き入れて、うやまひかしづきました。

二

さて孫悟空は觔斗雲に乘つてまた〻く中に翠雲山につくと、山の中から立ちのぼる光を目當に芭蕉洞らしい所へ出ますと、丁々、丁々といふ音が聞えて

一人の樵が木を伐つてゐました。悟空はこの樵の傍へ寄つて、

『もし〳〵、鐵扇仙人のゐる芭蕉洞といふのはどこですか。』といつてたづねました。すると樵は、

『芭蕉洞といふのはありますが、鐵扇仙人といふのはゐませんよ。鐵扇公主の間違ひではありませんか。その人なら、またの名を羅刹女といつて、牛魔王の奥さんですよ。』と答へました。

羅刹女と聞くと、悟空は思はず『しまつた。』と叫びました。それはこの羅刹女と牛魔王の間に生れた紅孩兒といふ、これも惡い化物をこゝまで來る途中に退治て來たあとなので、その母親の羅刹女に向つて行つて芭蕉扇を借せといつたところで、とても貸す筈もないし、それどころか息子の仇といつてどんな仇をしようとするかわかりません。けれどこのまゝ引き返すこともむろん出來ませんから、まあどうにかなるだらうとあてにもならないことをあてにしながら、樵に教はつたとほりの道を傳つて芭蕉洞の前へ出ました。見ると見上げるやうな岩乘な石の門がびつしやりしまつてゐて、その邊には、名も知れない美しい草や木の花が一ぱい茂つた中に、小鳥がのどかさうに鳴いてゐました。悟空はほかにしかたないので、門の前に立つてどんどん戸を叩きながら、

『もし〳〵、牛魔王はお内ですか。開けて下さい開けて下さい。』と、どなりました。

すると中から『はい。』と一聲返事があつて、戸が開くと、一人の毛むくぢやらな醜い顏をした腰元らしい女が、それでも手に花籠をさげて出て來ました。

『あなたはどなたです。』とその女がたづねました。

ほかにしかたがないので、『わたしの名は孫悟空、西天竺へ行く道で火焰山にとほりかゝつて難儀をしてゐるので、どうか芭蕉扇を貸していたゞきたい』といひました。羅刹女ははたして『孫悟空』といふ三字を聞いただけで目の色を變へました。

『この惡猿め、よくもやつて來た。』といふなり羅刹女は二本の寶劍を兩方の手に持て、びゆう〳〵振りまはしながら門の外へ駈け出して行くと、悟空がいひわけをするのも聞かずにいきなり打つてかゝりました。悟空もしかたがないので相手になつて戰ひながらそれでもどうかして羅刹女の機嫌をとつて芭蕉扇を借出さうと思ふものですから、いゝかげんにあしらつて置くと、羅刹女は自分が強いので悟空が逃るのだと思つて、よけいはげしく打つてかゝります。『ねえさん、そんなことをいはないで貸して下さいよ。』と悟空がいひました。すると羅刹女はよけいおこつて、『何がねえさんだ、お前のやうな畜生にねえさんだといはれるわたしぢやないぞ』といひます。『だつて牛魔王とわたしとは昔義きやうだいを約束をしたことがあるのです。あなたはそのお上さんでせう、だからわたしのねえさんですよ。』

かういふと、羅刹女はいよ〳〵猛つて、

『この惡猿、かなはなくなつたものだからいいかげんなおべんちやらをいつて瞞して、取らうとするのだらう。それほど芭蕉扇がほしけりや、腕づくで取つて見ろ。』と劍をりゆうりゆう振りまはします。

かうなると、悟空もいよ〳〵我慢が出來なくなつて、『よしこの棒をくらへ。』といふなり金箍棒をとつて眞劍にうつてかゝりますと、羅刹女も負けずにわたり合つて、かれこれ小半日戰ひました。

其うちだん〳〵羅刹女の勢ひが弱つて來ました。いよ〳〵かなはないとみると、いつの間に取り出したか羅刹女はふところから芭蕉扇を出して悟空に向つて一あふぎしました。見る〳〵悟空の體は金箍棒と一しよに宙に捲き上がつて、風にまかれる木の葉か、水に弄ばれる花びらのやうに、ふはりふはり、大風の上を一晩中漂ひ歩いて、明け方になつてやつと一つの高い山の頂まで來て止まりました。（つゞく）（附記、支那の一里は六丁のことです）

仙人

小島政二郎

昔、支那に海といふ學生がゐました。生れ故郷の地方に戰爭が打ち續いて勉強が出來ないので、遠い或市まで逃げて行つて、そこで勉張してゐました。ところが、同じ學校に、客といふ學生がゐて、海はこの學生と大變仲よしになりました。しまひには、義兄弟の約束まで結んで、二人揃つて一生懸命勉強してゐましたが、或年國の兩親が一時に死んでしまつたといふ知らせを受け取つた海は、驚き悲しんで急いで故郷へ歸つて行きました。それッきり、二人は逢ふ折がありませんでした。さうしたまゝ、二十年近い月日が立ちました。

その間に、客は出世をして、市でも指折の大金持になりました。二人子供を持ちましたが、二人とも相當の才能を持つて成人して、やがて長男も次男も嫁を貰ひ子を生んで、一家は愈々榮えました。

ところが、或年、ふと客の妻が病氣で死んだので、間もなく、客は後妻を貰ひました。この後妻は、大層美しい器量で、利口で、その上おとよしい女だつたので、すつかり客の氣に入りました。

ところが、この後妻が來てから間もなく、急に長男が、

『頭が痛い、頭が痛い。』と云ひ出したかと思ふと、或日突然死んでしまひました。父の悲しみと云つたらありませんでした。毎日わあ〳〵泣いてばかりゐ

ました。

すると、それから一月もたつた頃、今度は死んだ長男の嫁が患ひ出して、一週間とたゝないうちに、これもポックリ死んでしまひました。それからと云ふもの、變に病氣附いて、長男の息子が死ぬ、下男が死ぬ、下女が死ぬ、半年ばかりの間に都合合せて十三人も死にました。

『惡い病氣が流行ると見える。さあ〳〵、みんな氣を附けて疫病神にとつかれないやうにしておくれよ。』客はかう云つて、家内の者を誡めました。

しかし、いつぞや日本にも流行感冒が流行つた時のやうに、何しろ相手は目に見えない病氣と云ふのですから、どう用心したらいゝのかサッパリ分らないので、皆々唯戰々恟々としてゐました。

丁度その時、或朝のこと、門番があわたゞしく客の居間のドアをあけて

『海と仰しやるお方がお見えになりました。』と、恭しく一禮をしました。客は思はず

『なに、海が來たつて？　それは珍らしい。早速これへ御案内申せ。』と云つて、金で飾りのしてある立派な椅子から立ち上りました。昔の友達が、思ひもかけぬ時に尋ねて來てくれた嬉しさに、心は一杯でした。で、すぐ門番に

『いや、よし〳〵。わし自身迎へに出よう。』と云ひ直すが早いか、ッカ〳〵と玄關まで小走るやうに出向いて行きました。

顔と顔を見合はすが否や、海は

『おや。君の一家は死に絶えるかも知れないぞ』と云ひました。　客はびつくりして、思はず

『えッ？』と叫びましたが、『どうして君にそれが分るかね？　その後、君はエライ醫者にでもなつたのかい？』と尋ねました。すると、海は

『いや。唯私は人相や家相を見ることを學んだだけだよ。』

『それは丁度いゝ。實は、私のところでは人死が絶えないので、氣にしてゐたところだ。一つ家相に惡いところでもないか見てくれないか。』

『よろしい。お易い御用だ。』かう云つて、海は家の中から庭の隅まで、丹念に見て廻りましたが、

『家相には惡いところはない。では、今度は人相の方を見て上げよう。家中の者をこゝへ集めて御覽なさい。』

ヅラリと並んだ家内の者を、海は一人一人見て行きましたが、やがて後妻の前まで行くと、

『アハハハ……。』と天井を仰いで笑ひ出しました。

『何がをかしいのかね。』と、客が尋ねると、

『まあ、見てゐ給へ。』と云つて、急にキット後妻に向つて、『貴樣はまだ惡業を止めないな。』と睨みつけたかと思ふと、矢庭にそこにあつた文鎭を振り上げて、後妻の頭を一つ毆りつけました。すると、カーンと、鐵をでも毆つたやうな音がすると一緒に、後妻の體が、見る〳〵うちにチリ〳〵と縮まつて、二尺足らずの小さになりました。

『すぐこゝを立ち退きますから、どうぞお助け下さい。』後妻は、キイ〳〵聲で云ひました。

しかし、海は耳にも入れずに、グイと後妻の襟首

を摑んで
『客君、御覽よ。ここの襟毛のところに、白毛が三本あるだらう。こいつを拔くと、此奴の正體が分るんだ。』
『あゝ、御免なさい御免なさい。その毛を拔くことだけはお許し下さい。』手の下では後妻が、身をもだえながら許しを乞ひました。
『えゝ、ジタバタするな。』叱りつけて置いて海はキュッ〳〵と三本一緒に拔き取つてしまひました。すると、後妻の姿は搖き消すやうになくなつて、見ると、一匹の狸が海の手にブラ下げられてゐました。
客は唯目を白黑してゐるばかりでした。海はやがてその狸を袂の中へしまひ込んでしまふと、
『まだ不思議なことがある。次男のお嫁さんの背中を裸にして見てごらんなさい。』と云ひました。
見ると、どうしても手の屆かない背中の眞中に、銀の針を植ゑたやうに、そこにも白毛が三本生えてゐました。

『このまゝにして置かうものなら、お嫁さんは後一週間もすると、命を取られるところだつた。』と云ひながら、海はその白毛を拔き捨てゝやりました。『御覽なさい。拔いた跡が、こんな深くまで肉が腐つてゐる。』
みんなは恐ろしさに顏

の色を變へて、誰一人口を利く者もゐませんでした。
次に、海は、次男の息子を呼び出して、裸にして調べさせました。すると、これにも同じく白毛が三本生えてゐましたが、しかし、お嫁さんから見ると、長さがずつと短いのでした。
『危いところだつた。このまゝに過したら、一月とは命は保つまい。』かう云つて、海は白毛を拔き捨て、疵跡を指で靜に二三べん撫でてやりました。すると、不思議に忽ち肉が上つて來て、疵跡は見えなくなつてしまひました。
『客君、もうこれで祟りをするものがゐなくなつたから、安心なさい。では、私はお暇をします。』
海はかう云つて、それから袂を指さしながら、『狸は私の先生へのお土產に貰つて行くよ。』
が、袂を抑へて見て立ち止まりましたが、『さうだつた。尻尾の毛が拔くのを忘れたのだ。しかし、さう遠くへ逃げてはゐまい。まだこの家の中にまご〳〵してゐるかも知れない。』
見ると、部屋の隅に猫が屈まつてゐました。海は猫の頸筋を撮んで犬の鼻先へ持つて行つて、『ウシ〳〵。』と嗾けて見ましたが、犬はたゞフンフン鼻を鳴しただけで、吠え附かうともしませんでし

た。

『此奴ではない。』と呟きながら、海は猫をそこへ抛り出しました。『客君、君の家畜小屋へ案内してくれないか。』

鶏、兎、羊といふ順に見て來て、しまひに、豚小屋へはひると、忽ち海は

『あゝこゝにゐた。豚なんかに化けてゐた。』

と云ふが早いか、尻尾を掴んでグイと引くと、

豚は

『アイタタタ……。どうか尻尾の毛を拔くことだけは勘忍して下さい。もう二度と人間を苦しめることはしませんから……。』

と悲しい聲を出して頼みました。しかし、海はそんなことには頓着なく

『そんなことを云ふ暇に生れ變つて來い。』と云ひながら、手早く尻尾にまじつてゐる太くて長い白毛を探し出して、キュッと拔いてしまひました。すると、豚がチリ〳〵と縮んで狸になりました。それを袂に入れて立ち去らうとする海を、客が

『ねえ、海君、折角二十年振で尋ねて來てくれたんだ。せめて一晩でもいゝ、泊つて行つてくれないか。』

と引き止めましたが、海は

『僕も久振で君と話したいと思ふが、何を云ふにも、先生から云ひ附かつた事があるのでネ。』

『何だネ、云ひ附かつた事と云ふのは？』

『ナニ、困つてゐる人を救つてやれと云ふのさ。それで、實は君のところへも救ひにやつて來た譯さ。』

『一體君の先生と云ふのは誰だネ？

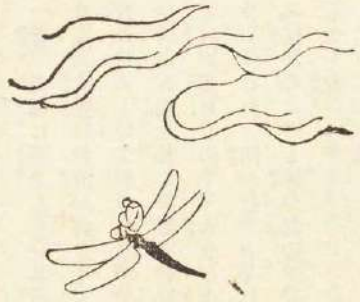
『山石道人さ。』

話してゐる目の前へ、小さな赤蜻蛉が一匹來てとまりました。

すると、海は

『左樣なら。』

と云つたかと思ふと、忽ち豆粒程の小さな姿になつて、赤蜻蛉の背中に跨つて、空を飛んでどこへ



ともなく行つてしまひました。

後に殘された客は

『山石道人といふのは誰だらう。』と、しきりに考へてゐましたが、やがて『ウム、山と石で岩か。岩道人のことだな。』

岩道人といふのは、その頃支那で有名な仙人でした。

『さうか。海は仙人になつたのか。』

と、客は膝を叩いて、暫く空を仰いでゐました。

（をはり）

醉つぱらひ狐

三宅房子

一

昔、支那に張さんといふ貧乏文士がゐました。張さんは大變にお酒が好きで、毎晩お酒を呑まないと眠れないといふ程でした。で、その晩も、いつものやうにお酒を呑んで寢ましたが、夜中になつて、ふと目が覺めたので、大きな欠伸をしましたが、そのひやうしに、何かむく〳〵したものに觸りました。

『猫かな！』と思つたので、手でなでゝ見ますと、もつと大いのです。

『犬かな。』と思ひましたが、考へて見ると犬が家の中に寢てゐる譯もありません。張さんはだん〳〵に目が覺めて來ました。そこで、起き上つてよく見ると、狐が正體もなく寢てゐるぢやありませんか。しかも、醉つぱらつて寢てゐるのです。

『おや〳〵。狐のやつに酒を呑まれたかな。』

そこで、張さんは寢床のそばに置いてあつた德利をとつて、ふつて見ると、ちつとも音がしません。すつかり呑まれてしまつたことがわかりました。

しかし、張さんは氣のいゝ人でしたから、別段腹も立てませんでした。それよりか『一體狐は何になつて化けて來たのだらう。こゝへ來たのには必ず何かに化けて來たのに違ひないのだが。』と思つて、それが見たくなりました。そこで張さんは、寢たふりをして蒲團をかぶりました。そして、布團の下から目をパチ〳〵させて、狐の化けるのを待つてゐました。

張さんは暫くねむいのを我慢してゐました。と、程なく、狐が

『アーゥ。』と大きな口を開けて欠伸をしました。それッと思つて、張さんが目を見張りますと、狐は自分が正體もなく寢てゐたことに氣づいたと見えて、びつくりして、あはてゝキヨロ〳〵見廻しました。でも、別段張さんが起きてゐる樣子もないので、ホッと安心したと見えて、起き上りました。しかし、その時には、もう人間に化けてゐました。若い學生に化けてゐたのです。

張さんは、その時まで蒲團の中で覗き見をしてゐましたが、狐があわてゝ學生に化けて、キヨロ〳〵してゐる有樣が、あんまりをかしいので、思はず

『ウフ、、、、。』と笑ひ出してしまひました。

すると狐は、倒れる程びつくりしましたが、張さんが、

『どうだね、よく眠れたかね。』といつたので、漸く安心したと見えて、そこへ跪きました。

『ハイ、申譯ございません。ついあなたのお眠りになつた處へ來て、お酒を呑んでしまつた上、正體もなく寢てしまふなんて、私ども狐としてこの上もない恥辱でございます。しかし、それを十分にご承知

の上、ご親切におゆるし下さつたご恩は決して、忘れません。』と、狐は泣かないばかりにいひました。

『ナニ、さう恩にきなくつてもいゝよ。僕は酒が好きなために世間の人達からは馬鹿にされてゐる。が、しかし、僕は君を友達として、これから扱ふから、

是非毎日遊びに來てくれ。淋しくつて仕樣がないのだから。』

『有難うございます。是非これからお伺ひいたします。』

張さんと狐はすつかり仲よしになつてしまつて、それから二人でまた蒲團にもぐつて、寢てしまひました。

やがて朝方になつて、張さんが目を覺した時には、もう狐はゐませんでした。

二

その日の夕方になると、張さんは上等のお酒を買つて來ました。それは、狐がその晩も、約束通り訪ねて來るかも知れないと思つたからです。

果して、夜になると、狐が來ました。張さんと狐はいゝ氣持ちになつてお酒を呑みながらいろ〳〵面白い話をしました。すると狐が何かの話の序に、

『あなたもお見受けしたところ、大してお暮しが樂

のやうでもありませんから、こんなにご親切にしていたゞく以上は、何とかお金の入る工夫をして差上げます。』と、いひました。

しかし、張さんは

『なアに、そんな心配をして貰つては困るよ。』といつて、自分の貧乏なことなどは、少しも苦にしないやうでした。

狐はその次の晩も、またやつて來ましたが、

『張さん、私と一しよに來て下さい。これから東南の方角で、二里ばかりの處に、お金が落ちてゐるのですから。』と、いひました。

張さんは氣乘りのしないやうに笑つてゐましたが、あんまり狐がいふものですから、とう〳〵一しよに出かけて行きました。

山を越して、川の土手のところまで來ますと、果してそこの草の中に、二兩の銀貨が落ちてゐました。

張さんは大喜びで、そのお金でもつて歸りにおいしいお酒と肴を買つて來て、狐と二人で一晩中呑み明かしました。

三

その後、また狐が來ました。そして、

『張さん、あなたの家の後に穴倉のあることがわかりました。その中にはお金がどつさり入つてゐるのですから、掘つてごらんなさい。』と、いひました。

張さんは、もう狐のいふことはすつかり信じてを

りますから、いはれた通りのところを掘つて見ました。鍬でもつて、堅い地面を掘りますと、最初は瓦かけや石ころばかり出てゐましたが、その内に何かかち――んと當つたものがありますので、よく土をどかせて檢べると、それは大きな平い石でした。

『きつとこの下だらう。』と思つて、その石をどかすと、狐のいつた通り、そこから大きな穴倉に入れるやうになつてゐました。

そこで、張さんは、灯を持つて來て、穴倉の中へ入つて行つて見ますと、お金の入つた箱が澤山にありました。張さんは大喜びで、それを家へ持つて歸つて、

『あゝ、僕もこれでお金が出來たから、もうあくせくと働らかなくてもよくなつた。』と、いひました。

すると狐が、

『そんなに安心してはいけません。その位のお金は怠けてゐたら、無くなつてしまひます。』と、意見しました。

張さんは成る程と感心しました。

その後暫く狐が來ませんでしたが、或る日、またひよつこり來て、

『張さん、今お蕎麥の値段が大變に安いやうですから、是非買つて置きなさい。』と、いひました。

そこで張さんは、町へ行つて、穀問屋からお蕎麥を四十石も買ひました。ところが、それを見た町の人達は笑つて、

『張の馬鹿め！　蕎麥を四十石も買つて何にするのだらう。』と、嘲りました。

しかし、狐のいつたことに、間違ひはありませんでした。それから間もなく大旱になつて、畑の穀物といふ穀物はみんな枯れてしまひましたが、お蕎麥だけは平氣でよく實りましたので、張さんは四十石の蕎麥を蒔いて實をとつて、大儲けをしました。そして、そのお金で田を二百畝も買ふことが出來ました。

張さんはその後も、狐と相談をして萬事をしましたので、いつも失敗がありませんでした。狐が麥を蒔けといへばすぐ麥を植ゑますし、黍をまけといへば黍を蒔いたので、いつも非常に收穫が工合よく行つて、貧乏文士の張さんも、すつかり大金持ちになつてしまひました。

ところがその後になつて、不意に狐が來なくなりました。

『病氣にでもなつたのか知ら。』と張さんは大層心配して、毎日狐の來るのを待つてゐましたが、とうとう來ませんでした。

で、張さんもあきらめて、もう狐は死んだものと決めてゐましたが、しかし、その後も決して怠けずに働いたので、一生お金持ちで送ることが出來ました。（をはり）

水滸傳

妙な占者

宮島資夫

支那の梁山泊に澤山の豪傑が集つて、山陣の勢ひは日増に熾んになつて來た時でした。ある日北京大名府の龍華寺の和尚、大圓といふ人が諸國行脚をして梁山泊の麓を通つたので、山陣の大將宋江はすぐにこの坊さんをよび迎えて、死んだ晁蓋を初めとして、諸々方々の戰ひに命を落した人達のために、盛んな法事を營みました。法事が終つてから宋江は、大圓和尚に御馳走をして、いろ〳〵な話をしてゐましたその時宋江が、『大圓さん、あなたは方々の國國を歩いておいでなさるから種々な土地の事や、有名な人の事も知つておいでゝせうが、今民間でこれはと云ふ豪傑は誰でせう』と尋ねました。

すると大圓和尚が、

『あなたはまだ御存知ないか知らないが、北京には河北の英雄玉麒麟盧俊義がゐるではありませんか』と云ひましたので、宋江はすぐに、あゝさうだつた

と盧俊義のことを思ひ出しました。

盧俊義は北京の有名な長者でして、武藝は天下に雙ひなき達人と云はれるほど有名な人でした。

この人がもし梁山泊に入つてくれゝば、それこそ虎に翼をそへた勢ひを得ることゝは思ひましたが、何しろ北京第一の長者と云はれるほどの人ですから、却々味方に引入れることは出來まいと思つてゐました。

ある日宋江は、多勢豪傑の集つた時に、その事を軍師の智多星吳用に話しました。そして、

『盧俊義が來てくれゝば、梁山泊のためにも本當に好いのだが、何しろあんな長者ではとても來てくれることはあるまい』と嘆かはしさうに云ひますと、吳用はこれを聞いて笑つて『どんな事でも計を用ひれば出來ないことはありません。私にいま好い考へがありますから、それでもつてきつと盧俊義を味方に引入れてお目にかけます』と云ひました。

『軍師はどんな計を以て盧俊義を連れてくると云はれるのか』と宋江は不思議さうに尋ねますと、

『私のこの三寸不爛の舌を以てきつと賺して、終には山に來るやうにして見せます。夫にしても誰か大膽な人を一人連れて行くと大變便利なのですが』と吳用の言葉のまだ終らない中に『軍師、軍師、私をどうか連れて行つて下さい』と大きな聲で叫ぶ者がありました。吳用が見るとそれは黑旋風李逵でしたので、

『お前は人を殺したり、家を燒き拂つたりする事は得手だが、こんなことにはとても駄目だ』と云ひますと、李逵は口を尖らせて、

『私は馬鹿で氣が利かないと云ふことは自分でも知つてゐます。けれどもその位のことはちやんと判つてゐるのに』と恨めしさうな顏をして云ひました。

宋江明は傍から、

『これこれ李逵、お前はそんなに軍師を恨むことは

ない。北京の大名府は別して見廻りの多い所だからお前の言葉つきや仰かで一風變つてゐるのを見咎められてはいけないと思つて軍師はあゝ云ひなさるのだ。決して軍師を恨むではない』と宥めましたが、李逵は、

『私は平素からこの山陣のために一命を捨てようと思つてゐるのです。だから軍師、どうか私を連れて行つて下さい』と子供のやうにせがみましたので、吳用も笑ひながら、

『それならお前は私のいふ三つの事をちやんと守るか。もし守るなら連れてつてやつても好いが』と尋ねました。

『えゝ三つは愚か三十でも守ります。早く敎へて下さい』

『まづ第一にお前は酒癖が惡いから、途中で決して酒を飲まない事。第二にお前は道家の小坊主のやうな形をして私の云ひつけることはどんな事でも背いてはいけないこと。第三には今日から啞の眞似をして決して口を利いてはいけないこと。この三つを必ず守ると誓へば連れて行つてやるがどうだ』

『そんなことを守るのはわけのない事です。啞し眞似をしようと思つたら、錢を一つ口に啣へてさへゐれば、決して物が云へないからこれも大丈夫です』

李逵は嬉しさうに誓ひました。すると宋江明が傍から、

『お前が頻りに行きたがるから私も强て留めないが萬一にも過ちがあつて官軍に捉まるやうなことがあつても、決して私を恨んではならないぞ』と云ひました。李逵は、

『宋長兄大丈夫です。私にこの二つの斧のある間はあの馬鹿者の官軍共が近づけばすぐに殺して、平素の鬱憤を晴して樂しみます』

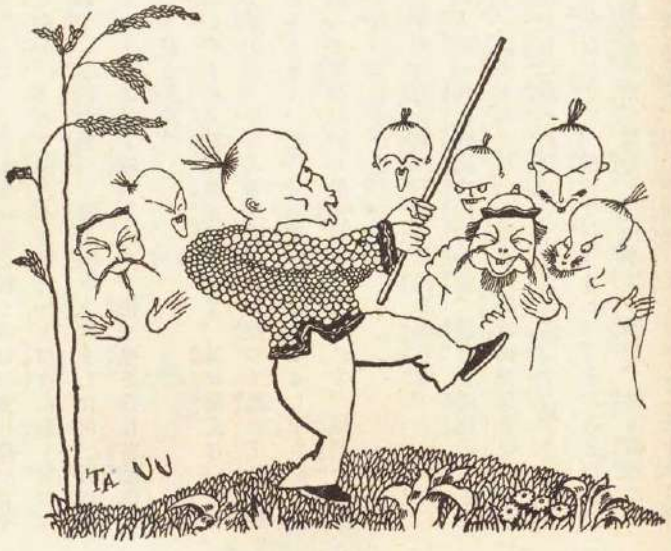
と云つて、もう敵が近づいても來たやうに拳を握つて力んだので、並居る豪傑達も思はずどつと笑ひ出してしまひました。

その翌日吳用は李逵を連れて山を下りました。宋江はじめ多くの豪傑達は二人を金沙灘まで送つて來ましたが、そこで別れをつげて二人は北京をさして急ぎました。やがて五日たつてから二人は北京の城門の邊まで近づいて來ましたが、宋朝に惡い役人共が澤山ゐるために、諸方に群賊が起つて世間の穩かでない時でしたから、この城門にも四五十人の兵卒が集つて、通行の人を嚴重に調べてゐました。吳用はこの光景を見ると、城門の中へ進んで行つて、その中の大將らしい人に恭しくお辭儀をしました。

『あなたは何方からお出でゝした』とその人が尋ねました。

『私は張用といふ八卦見で、諸々方々を流浪して歩く者で、この連れてゐる童子は李といふものです』

と吳用は答へて、僞の手形を出して見せました。城門を守つてゐた人達は李逵の顏を眺めて、



『どうだ、このお供の奴の眼つきは、實に凄いぢやないか、まるで盜人みたいだ』と口々に惡く言つたので、李逵は怒つて拳を振り上げましたが、吳用がちつとその顏を睨めたので、極り惡さうに首垂れてしまひました。

『いやこの人間は元來啞でして、耳が聞えないものですから、やゝともすれば人を疑つて怒つて仕方がありません。どうか無禮の段はおゆるし下さい』と云つて笑ひながら吳用は李逵を連れて、城門を通つて行つてしまひました。

やがて町へ來ると吳用は鈴を鳴して、

『人間一生の禍福吉凶、時節、運命、生死のことでも、何でも知りたいと思ふ人はお出でなさい。銀一兩を私に與へれば、身の上の事は何でも見てあげる』と云ひながら、進んで行きました。そのあとに從つた童子のやうな形をした李逵の姿が、餘り滑稽だものですから、町の子供達は笑ひながら二三十人もぞろぞろとあとからついて歩いてゐました。やがて盧俊義の家の門の前に來た頃には、子供達の數は益々增して來て、町の中はそれは〳〵喧しくさへなつて來ました。すると家の中に何か本を讀んでゐた盧俊義は、

『あの町の騒ぎは何事だ』と家人に尋ねました。あれは一人の占の先生が、銀一兩で吉凶を見てやると云ひながら歩いてゐるのですがその後に一人の童子をつれてゐますが、それがまた恐ろしく醜い顏をして變な衣物を着てゐるので、子供達が笑つてゐるのです』と答へました。すると盧俊義は、

『普通の賣卜者といふものは、二三十錢の金で易をたてると云ふのに、一兩でなければ見ないと云ふのは餘つぽど傑い先生に違ひない。私も一度見て貰ひたいから、すぐと呼んで來て見ろ』と家の者に云ひつけました。

やがて吳用と李逵は家人に連れられて入つて來ました。吳用はその時はじめて盧俊義を見たのでありましたが、身の丈けは六尺に近く、眼の光は星のやうに輝き、眉は八の字を分けたやうで、黑い髮は房々と腮に垂れて、相貌堂々たる有樣は、全く萬人に勝れた英雄である事が一見して解つたので、心の中で『本當に得難い立派な人だ』と感心してゐました。

やがて盧俊義は吳用に向つて、

『あなたは大變好い先生らしいが、どうか私の身の上を見て下さい。殊に君子は災を聞いて禍を問はないと云ふこともありますから、格別此の後の好い事は聞かなくてもよろしいのです。どうか近いうちにありさうな事だけを話して下さい』と云ひました。

すると吳用は鐵の算といふものを取り出して、仔細らしく八卦を置いてゐましたが、しばらくたつて、

『や、これは大變です』と顏色を變へました。

『何です。何か變つた事がありますか』と盧俊義が尋ねると、吳用は益々鹿爪らしい顏をして、

『あなたがお疑ひにならなければ、易の面に出た事を話しますが』と云ひますと、

『えゝ、先生は迷つた人に道を敎へて下さる人です。私は決して疑はないからどうか話して下さい』と盧俊義が云ひました。

『それではお話しますが、どうもあなたの運勢はいま大變に惡いのです。恐らく百日の中に何か災が身へふりかゝつて來て、刄の下に死なゝければならないやうな事が起ります』

と云つて吳用は氣の毒らしい顏をしました。

『いやそれは先生違ひます』と盧俊義は笑ひ乍ら、『私はこの北京に生れて幸ひに富貴の家に人となりまだ曾て惡い事をした事もありません。それに親族の中にも法を犯した者もなく、また不義の事をして金を取つた事もなく、至極正しく平和に暮してゐるのに、どうしてそんな劍難などゝいふ災があるものですか』

と尙も心の中で冷笑ひながら云ひました。これを聞くと吳用はいよ〳〵顏色を變へて形ち改め、盧俊義の出した銀一兩を押し返して、

『世間の人は皆なうまい事を云つておべつかを使はれゝば喜び、本當に好い事を聞かされると腹を立て仕方のないものです』と嘆息して坐を立つて急いで歸らうとしました。これを見ると盧俊義はあはてゝ吳用を引き止めて、

『先生、今私の言つた事は間違ひでした。どうかさう怒らないで、難を逃れる法を敎へて下さい』と云ひましたので、吳用も顏色を和げて、

『いやそれならお話しますが、あなたの運命は今までは大變によかつたのですが、今年は大變に惡くなつてゐます。それで僅かこの百日の中が危くなつてゐるのです』と云ひました。

『それならどうしたら　その難を免れることが出來ますか知ら』と盧俊義が尋ねますと、吳用は再び鐵

算を出して卦を立てゝ、わざと三十分ばかり考へてから、

『あなたがもし、この難儀を避けようと思はれたら東南の方へ百里ばかり旅行されなければいけません』と云つて、『私はもう一つあなたに、一つの歌を敎へます。これは私の立てた八卦の中に現はれた言葉ですから、これをよく記憶しておかれゝば、後になつて思ひ當る節が必ずあります』と部屋の壁へ、

盧の花しげるこかげに小舟漂ふところ
俊傑にわかに北の方から來て遊ぶ
義人にしてもしかく此の理が解れば
身を反して難を逃れて憂ひなからん

と書きました。この詩の書き出しのはじめの方の一字づゝを取ると、盧俊義反き、となるのですが、その時は盧俊義もそれに氣がつかないので、

『どうも有難う』と大變厚く禮を述べました。吳用はこれを書いてしまふと、急いで泊つてゐた宿屋へ

歸つて、
『もう私達の計はちやんと行はれたから、すぐに山陣へ歸らう』
と云つて、李逵を引つれて、その日の中に梁山泊へ歸つて行きました
盧俊義は一世の雄と云はれるほどの豪傑でしたがどこかかう人品の高いさつきの易者に云はれた事が氣になるものですから、兎も角、商賣の用事をかねて少時旅行して來ようと心にきめました。さうして家の事を委せてある二人の番頭をはじめ一同の者を呼びよせました　するとすぐに盧俊義の部屋に、皆なが集つて來ましたが、第一に來た男は、身の丈け五尺位ですが、顏の色は雪よりも白い、二十四五の綺麗な人でした。盧俊義の前に來ると、恭しくお辭儀をしました。此人は小さい時から盧俊義の家に養はれて、子供のやうにして育てられたのですが、大變に利口なので、盧俊義は殊に可愛がつて文學武

藝凡ての事を學ばせ、音樂の事まで覺えさせましたが、どれもこれもすぐに上手になりました。殊に弓と相撲は名人と云はれるほど巧みで、百たび矢を放つて百度中ると云ふほどでした。身體の色が一しり白く綺麗なので、盧俊義は身體一面に五色の花を刺させたので裸になるとその美しさは何とも云へないほどでした。姓は燕、名は青、綽名を浪子と云ふので、北京の人達の中には浪子燕青といへば隱れもないほど有名な人となつてゐたのです。家の者が皆な揃ふと盧俊義、今日の易者の話をしました。そして、『私も少時旅をしないから泰洲の東岳泰山へお詣りして、その序に種々の品を持つて行つて賣り、又た珍しい物も買つて來たいし、なほ方々の名所見物もして來たいと思ふ。それで旅の方へは李固を連れて行き、留守は燕青にしてゐて貰いたい』
と云ひました。すると燕青は第一に、
『御主人はそんな易者の言葉を信用して旅に出ると云はれますが、泰洲へお出でになるには梁山泊の麓を通らなければなりません。あすこには惡い者が澤山ゐて、金持らしい旅人と見るとすぐに　て物を奪つてしまふさうです。昨日來た男と云ふのも、ひよつとしたらそんな者の廻し者かも知れません。それにそんな易者がたとへ何と云はうとも、あなたがちやんと家に籠つて、身を修めておいでになれば、災の起るわけがないと思います』
と諫めましたが、
『梁山泊の賊位を恐れる盧俊義とお前は思ふか。ともかく一度旅立すると心に決めたら、私はどうしても行つてくる』
と云つて、盧俊義は肯き入れませんでした。
『それならば御主人』
と燕青は云ひました。
『私は幼少の時からあなたのお蔭で武藝を覺へさして頂きましたから、私がおそばについてゐれば盜賊共の四五十位は追拂ふことも出來ませう。李固をお留守の役として、私をどうかお連れ下さい』
『いやお前は何事にも氣が利いてよく出來るが、商業の事はまだ李固にかなはない。途中で色々の交易をやりながら旅をしようと思つてゐるから、供には李固をつれて行く』
と盧俊義が云ひますと、今度は李固が、
『私は此頃脚氣にかゝつて居りまして長い道中は歩けませんから、どうぞ留守番をさせて下さい』
とおずおずしながら云ひました。
『何を云ふのだ。兵隊を千日無駄に養つておくのもたゞ一日の用に立てるためだと云ふ言葉がある。今日私の言葉に背くものがあれば承知しないぞ』
と盧俊義が怒りましたので、李固は顏色を土のやうに變へてぶる〳〵慄へて默つて首垂れてゐました。李固は此時己に盧俊義を心の中に恨んでゐましたが、顏色には現はさず忍んでついて行く事となつたのです。（つづく）

とんだお客様

藤森淳三

支那の或る田舎に大へんなお金持がありました。その家には二階が二間ありましたが、日中はみな家のものは下の部屋で働いてゐて、二階へ上るものなどありませんでした。

或る日、その家のお上さんが着物をとりに二階へ上つて行きましたところが、二階の戸が今日はどうしたのか内から閉つてゐて開きません。家の人はみな下にゐるのですから、内へ入つて戸を閉めるといふやうなことはない筈です。いつたいどうしたわけだらうと不審に思つて、板の隙からそつと内の様子を覗いてみました。

すると、どうでせう、男の人が寢衾の上に寢てゐるぢやありませんか。てつきりこれは泥棒に違ひないと思つて、早速下の人たちを呼びたてました。

ところが、そのとき部屋の中の男が大きい聲で、

『わしは今度住居を移して、當家に引越して來たのぢや。だからお客さまぢや　此處にある机を一つ借りるが、他のものはいらぬからみなお返しする。』

さう威丈高に云ひました。それから筆筒やら長持やら、その他細々した道具類やらを、みんな窓口から地面へ投げ出しました。

家の人が驚いてゐると、そのうち二階ではがやがやたくさんの人の聲がします。寄つたのや若いのや、さうかと思ふと女の聲まで混つて、お鉢を叩くやら銅の鈴を鳴らすやらして、間もなく歌を唄ひ出しました。

『おやぢさん、おやぢさん、千里の野山をはるばると、

折角來たのに酒がない、
お客が來たから酒出しな。』

とんだお客さまもあつたものです　家の人はみな顔を見合せて驚いてゐますが、このうへ亂暴をされては堪らないと思つたものですから、二階の人の云ふ通り、たくさんの御馳走やらお酒やらを机にならべて、庭へ出して置きました。

すると、不思議ぢやありませんか。その机がひとりでむくむくと動き出して、空に舞ひ上がるのです。そして窓のところから、二階へはいつてしまひました。

呆氣にとられて見てゐると、間もなく机が庭へ落ちて來ました。見るともう、机の上には御馳走がなくなつてゐるのです。家の人は、お化に違ひないと思ひました。

その後二階のお化は、べつだん惡いことをする様子もありませんでしたが、それでもあまり氣味がよくありませんので、家の主人は一人の道士を呼　で來て、妖怪退散のお祈りをたのみました。

みんなが外でその相談をしてゐますと、もうそれがお化にわかつたとみえて、二階の人々がまた歌を唄ひ出しました。

『道士道士、
馬鹿道士、
お前に何が出來ようぞ、
出來れば一つやつてみな。』

幾度も幾度もさう唄つては馬鹿にするのでした。

しかし堅くる日になると、道士は朝早くから來ました。そして庭に祭壇をこしらへて、うやうやしくお祈りをはじめました。

すると、風も吹かないのに、ゆら〳〵と動いたと思ふと、忽ちどつと倒れました。道士はすつかり怖氣ついてしまつてよろめきながら逃げ出します。祭壇の上に飾つてあつた神様やいろんな道具は、みんな門の外へ吹き飛ばされてしまひました。

しかもそればかりか、その日は晝も晩も、二階が大荒れに荒れました。お蔵で家の人は家の中にゐることも出來ず、晩ぢう庭に出て夜を明かす。といふ始末でした

主人はいよ〳〵困りました。そこで、今度は江西といふところにえらい道士がゐるといふことを聞きましたので、その人に相談をかけました。その人は張天師といふ人ですが、

『よろしい、承知しました。そんなお化ごとき少しも心配はいりませんよ。』

さう云つて、弟子の法官を一人よこしました。

しかし、その日もまた、二階のお化が唄つて云ふには、

『天師、天師、へぼ天師、
何にも出來ない馬鹿法官』

そして、法官がその家の前まで來るか來ないに、また目に見えないものが出て來て法官の首を高く持ち上げて、それから地面へ投げつけたから堪りません。あつといふ間に、法官の顔は血みどろになり、着物はずたずたに破れてゐました。

『いや、お化はよつぽど强くてとても、私の手には及びません。』

法官は頭をかきながら云ひました。そして、

『このうへはもう謝法官が呼んで來るより仕方がありますまい。』

謝法官といふ道士は立派なお寺に住んでゐて、大層名高い人ですから、普通ならなか〳〵來てくれませんし、しかしお金持のことですから、無理にたのんで　やつとのことで承知して貰ひました。

謝法官はぴか〳〵光る絽麗な着物を着て、車に乘つてやつて來ました。そして、また前と同じやうに祭壇をこしらへてお祈りをはじめました。

ところが、今度はさすがのお化も歌など唄ふほどの元氣がありません。二階はひつそりして、物音一つ聞えません。その家では今度こそは大丈夫だらうとみんな喜んでなります――。

突然、空の方から一筋の赤い光りがさして來たと思ふと、白い髯の生えた老人がしづ〳〵と高い天から降りて來ました。みなが見上げてゐますと、老人は下へ下りずに二階の窓へはひつて行きました。

『皆何も恐がることはない。謝道士くらゐの法力が何んぢや。今わしが破つてやるから安心するがいゝ。』

二階では、その老人が大聲あげてさう云つてゐます。

謝道士はと云ふと、こればまた一生懸命お祈りをつゞけながら、やがて手に持つたお鉢を地面に投げつけました。お鉢は地に落ちないで、家の廻りを廻つてゐます。そして、幾度も、幾度も、二階へ舞ひ上らうとする模樣ですが、どうしても上れません。

そのうち二階は二階で、やけに銅の鈴を打ち鳴らしはじめました。

そして、それがが〳〵とやかましく響き出すと、そのときまで空中を舞つてゐたお鉢は、急に地面へ落ちたまゝ、もうちつとも動かなくなりました。それを見た謝道士はびつくりして、

と云つて、どん〳〵逃げて歸つてしまひました。

家の人の困りようつたいありません。今はもうどうしていゝのかわかりません。が、さつき法官の云つた通り、謝法官なら多分お化を退治することが出來るだらうと思ひました。

『どうもこのお化はただものぢやない。私の力でどうすることも出來ません。』さう云つて、今度の道士もまた落ちたお鉢をとるが早いか、こそこそと逃げて行つてしまひました。

二階のお化は多分それを喜んだのでせう、騒々しい聲が門の外まで聞えるくらゐです。さうして、それからといふものは、ひどい惡戯のしどほしです。今はもう家の人もすつかりあきらめて、別に家を建ててその方で住つてゐました。それが半年かばりもつづきました。その年の冬は例年にない大雪でした。ですから、近郷近在からたくさんの獵師が狩りに出ましたが、雪に困つて、或る日その家へやつて來て宿めてくれと云ひました。家の主人はお化のことを話して、

『お宿にいくらでもしてあげますが、さういふわけですから何か災難があるといけません。』と云ひました。

そのとき、主人の話を聞いてゐた一人の獵師が云ふには、

『何、それはみんな狐の惡戯なんですよ。私がひとつ退治してあげませう。だから、まあとにかく御馳走をして下さい。』

そこで、その家ではたくさんの蠟燭を内や外に點じて、机にはお酒やら御馳走やらをならべて、みなをもてなしました。

獵師たちは大騒ぎをしながらお酒を呑んで、みな〳〵へべれけに醉ひました。そして、丁度夜半切になつたとき、みなは鐵砲の筒先そろへて、二階目がけて打ちはなちました。煙硝の煙りはもう〳〵と立ちこめて　二階は一晩ぢうまるで大地震でも起つたやうに搖れたり、ごうごうと大へんな音がしたりしました。

翌くる日は朝かた雪がやみました。そこで獵師たちはお禮を云つて

その家を立ち去りました。

その後二階はひつそりかんとして物音一つ聞えません。で、或る日主人がそつと二階へ上つて、板の隙から覗いてみましたすると不思議にもお化らしいものは何もゐません。中にはひつてみるとあたり一面に狐の毛が散らばつてゐて、窓の戸はすつかり開いてゐます。つまり狐は、鐵砲の音にびつくりして、また他の家へ引越して行つたものとみえます。（なぼり）

瓢簞と冬瓜

犬田しげる

一

昔、支那に許遜と云ふ仙人がありました。號を眞君といひました。南昌の人で、吳の赤烏二年の生れでありました。

眞君のお母さんは、一羽の黃金色をした鳳鳥が飛んで來て、口に啣んでゐた珠を自分の掌の上に落した夢を見て、眞君を孕んださうであります。

眞君は生れながら大變悧巧で、且つ慈悲深く、ある時狩獵に出て一頭の仔鹿を射殺すと、親鹿が木蔭から出て來て、涙を流し、悲しげに啼きながらその死骸を舐ぶるのを見て、自分も共に涙を浮べ以後は弓矢を棄てゝしまつて、一切遊獵を止めたといふことであります。

それから眞君は、一意專心學問を修め、瞬く間に百家の書に通じ、そればかりでなく西安の吳猛といふ仙人に就いて、その仙術を習得いたしました。年四十二の時でありました。眞君は旌陽縣の長官となりましたが、もとより德の高い人物でありましたから、人民は皆、眞君に悅び服して居りました。

ちようどその時のこと、非常な飢饉が襲つて來ました。人民は租稅を納めることが出來ないで、大變困つて居りました。

それを見ると、眞君は靈丹を練つて瓦や小石に塗りつけ、人知れずそれを畑の中へ埋めて置きました。そして困つて居る人々を呼び集めて、

『その方共は困つてゐると口でばかりで云つてゐないで、すぐにでも行つて自分達の畑を耕して見るがよい。』

と申し渡しました。

そこで百姓共は鍬を擔いで行つて耕して見ますと土の中からぴか〳〵と光る黃金がぞく〳〵と出て來て、租稅を無事に納めたばかりか、自分達まで富有な身分になることが出來ました。

ある年はまた惡い疫が流行して、死ぬものが毎日何百人といふほどありました。眞君はそれを聞くと、またも仙丹を練つて多くの人に施しましたので、さすがの惡疫も止んでしまつたといふことです。

それから間もなくのこと、眞君は職を辭して故鄕に歸り、悠々として、その日その日を送つて居りました。

二

以上は眞君の人となりを搔い摘んで申し述べたのですが、これからいよ〳〵お噺の本題に入ります。

時は懷帝の永嘉六年のことでありました。海昏といふ高山の麓に身に不思議な毒を持つた一人の大魔王が棲んでゐまして、附近四十里の間は、その毒氣が發散してゐて、それに觸れて死ぬものが日に何百何千人といふほどありました。

附近の住民は、とても自分達の力では魔王を退治することは出來ないと思ひあきらめて、眞君のところへ來て、そのことをいつて救ひを求めました。

眞君は快く承諾して、大勢の弟子を引連れて海昏山の麓に來ました。すると大魔王は、眞君の名を聞いて怖ぢ恐れて、洞穴の中へ深く埋つてしまつて、二度と出て來ようとはいたしません。

眞君はしかしたゞ洞穴の中へ隱れてしまつて出て來ないだけでは、自分がこの土地を去つてしまへば何時なん時妻を現して、再び附近の住民を惱ますないとも限らないと考へまして、八方手を盡して驅り出しました。

さすがの魔王も毎日々々驅り立てられては堪りません。たうとう仕舞には洞穴から出て來ました。見ると兩眼はぎら〳〵と日月の如くに輝き、口から吐き出す毒氣は四方に飛散して、まるで雨か霧のやうです。これに觸れるものは忽ち斃れてしまひます。

魔王は怒りの形相物凄く、口から火焔を吐きながら、眞君目がけて寄り進んで來ます。數百の村民は眞君を助けながら魔王の方に向つて、これまた劣らじと寄り進みます。その時、眞君は眞先に進み出て、手下の神兵と共に、何の恐れもなく大魔王を縛り上げて、身動きすることも出來ないやうにしてしまひました。魔王は死力を盡して抵抗しましたけれども眞君の仙術にかゝつては、その毒氣も火焔も、何の役にも立たなかつたのです。

眞君は手下のものに命じまして、縛りつけた魔王の腹を割かせました。すると中から身の丈數尺ほどの小魔が出て來ました。村民共はそれを見ると、この小魔も打ち殺してしまはうとしましたが、眞君はそれを押し止めて申しました。

『この小魔はまだほんの子供であつて、まだ一度も人間に向つて害を與へたことはないのだから妄りに殺してはなりませぬ。この惡魔は今から一千二百五十年經つて、はじめて、人間に向つて害をします。しかしその時には、また自分が再生して來て、これを退治しますから、その時まで、生して置いてやりなさい。』

これを聞いて村民共は殺すのを止めました。さすがは眞君だけあつて、動物にまで慈悲流くていらつしやると云ひながら、小魔を放してやりました。

すると小魔は、口から赤い炎を出しながら眞君や村民共を眺めて、そのまゝ飛ぶやうに楊子江の中へ身を隱してしまひました。

その樣子を眺めてゐた眞

君、何と感じたか顔をしかめて、悔しさうな表情をいたしました。

『如何なさいましたのですか。』

と村民共は訊ねました。すると眞君は顔を上げて、

『し、し、まつたことをした。今の小魔は靈物であるによつて、俺の言葉を聞いて、心に謀叛を企てたに違ひない。情けをかけてやつて、却つて仇をされるかも知れない。』

と心配さうに申しました。

三

眞君は間もなく故郷の郡城へ歸りました。

それから十年ばかり經ちました。ある日のこと、眞君は弟子達を連れて、郡城の邑々を見廻つてゐますと、忽ち一人の衣冠を着けた美しい少年が現れました。自分から愼某といふものだと名乘つて、眞君に面會を申し込んで來ました。

見れば擧止も閑雅で、態度も落ち着き、應對振りもなか〳〵馴れてゐました。美しい少年はこれと定つた用事もないらしく、間もなく暇を告げて去りましたが、何事にも目敏い眞君は、この美しい少年の正體を一目で見拔いてしまつたのでありました。

少年が去ると同時に眞君は弟子に訊ねました。

『その方達は今の少年を何と思つて見たか。』

弟子達は答へませんでした。誰しも普通の少年だと思つてゐたからです。眞君は言葉をつゞけて、

『それでは云つて聞かすが、あれは普通の少年ではない。先年楊子江に隱れた小魔王の化身である。あの時親の大魔王を退治された恨みを、今以て忘れず、あゝして俺を試しに來たのだ。隙があれば仇を報じようと思つて俺を窺ひてゐるのだ。察するところ、この附近に棲んでゐて日毎夜毎、俺をつけ覗つてゐるのであらう。』

弟子達は聞いて驚きました。

眞君はその時、一人の弟子に命じて、少年のあとをつけさせました。待つほどもなく、弟子は歸つて來て、

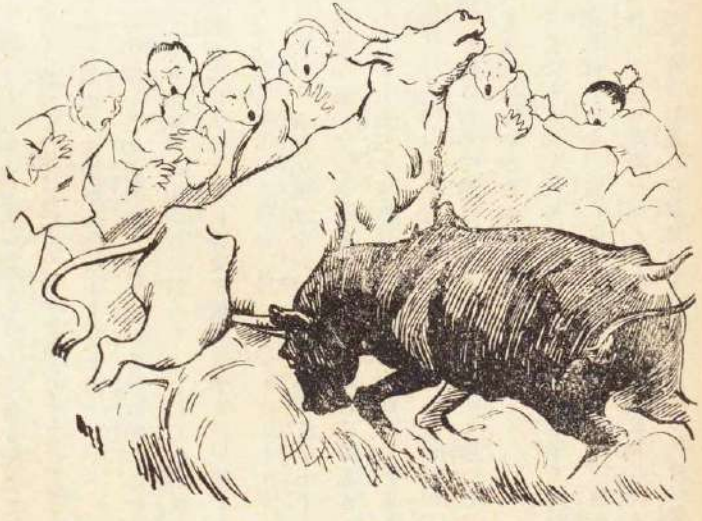
『先生、今の少年は、あの川のほとりへ行きまして、一匹の黃い牛と化け、砂の上に寢ころんで遊んで居ります。』

と報告いたしました。

そこで眞君は早速川のほとりへ行つて見ますと、なるほど一匹の黃ろい牛が遊んで居ります。眞君は一枚の紙を剪つて、仙術を以てそれを黑牛と化し、砂の上に寢てゐた黃牛に鬪を挑ませました。

それと知ると黃牛は恐ろしい唸り聲を立てゝ黑牛に向つて來ましたが、もとより勝つ見込はありません。角先で股を突かれて血を流して、そのまゝ逃げ失せてしまひました。

眞君は逃げた黃牛が何處へ行くかと思つてまたも弟子に命じて、あとをつけさせたのです。すると黃牛は城の南方にある一つの井戸の中へ身を投げ入れ



て姿を隠してしまひました。

眞君はそれを聞くと、自分も井戸際へ行つて、仙術を以て大地の神様を呼び出して、黄牛の行方を探らせました。と、黄牛は井戸の下から長沙といふところへ逃げ延びて、その町の賈玉といふ人のところへ美しい少年に化けて、住み込んでゐるといふことが知れました。

四

さて、お話は少し後へ戻りますが、眞君に命を助けられた小魔は、楊子江へ姿を隠して日を送つてゐるうちに、何時か賈玉の家の附近を通る時、賈玉の娘を垣間見まして、一策を案じてこれ幸ひと、美しい少年に化けて賈玉の家に住み込みました。間もなく少年は娘と夫婦になつて、數年間何事もない月日を送つてゐるうちに、二人の子供も出來て、夫婦の仲も至つて睦じく暮らして居たのです。

親の大魔王を殺ろされた恨みは、しかし片時も忘れることが出來ません。隙があつたら仇を報じてやらうと思つて、彼は眞君の樣子を窺つてゐたのです。

しかし眞君には油斷も隙もありません。

その頃、この若者は、春の末から秋の始めにかけて、毎年何處かへ出かけて行つて、そして金銀寶玉の類を澤山大きな船に乘せて歸つて來るのが例でありました。

これは、春夏の滿水を利用して、楊子江を上下する商船を襲つて、その貨物を盗んで來たのでありまし。しかし賈玉の家族は、この若者が妖靈であるとは少しも知りませんでしたので、毎年自分の婿が、商ひに出て行つて儲けて來るものとばかり思つて、少しも疑はなかつたのです。

ところが如何したものか、今年の秋は空手で歸つて來たばかりか、股に傷さへ受けて居ります。賈玉は怪んでその理由を訊ねました。すると若者の云ふには、今年は儲けた財寶はすつかり盗賊のために奪

はれ、その上左の股にこの通り傷まで受けたのだ、とまことしやかに申しました。

聞いて賈玉は大層驚いて、急に町から醫者を呼び迎へて、その治療を乞ひました。

五

仙人の眞君は、あらかじめこんな事があらうと思つて、長沙へ行つて醫者となつてゐました。

賈玉の迎へを受けると、眞君の醫者は、早速傷をうけた若者を診察するために賈玉の家へ行きました。

ところが妖魔もさるもの、醫者の姿を一目見るや否や、奥の一室に入つてしまつて、呼んでも叫んでも出て來ようとはしないのです。

そこで眞君は賈玉を案内役として無理に奥の一室へ行つて、怖ぢ恐れてゐる若者をきつと睨んで、

『聞け、若者、その方は人間に化けてゐるが、汝は先年俺が楊子江へ放してやつた小魔に相違あるまい早く本性を現して降伏しないと、こんどこそ助けては置かないぞ。』

と雷のやうな聲で申しました。

妖魔は堪りかねて急に本身を現して、身の丈數丈もあらうと思はれる大人道になつ眞君目がけて飛びかゝつて來ました。が、眞君の仙術にかゝつて、たあいもなく斬り伏せられてしまひました。

眞君は小魔王を斬り伏せて置いてから、水を一口含んで、彼の二人の子供に吹かけました。すると忽ちこれも本體を現して妖魔となつたので、眞君の弟子はすぐに二人を斬つてしまひました。

この時賈玉の娘も魔身に化けようとしましたが、これは眞君の仙術で、もと通りの人間になりました。

眞君はその時賈玉に向つて、

『妖精の居るところは、必ずその下に水がある。今あなたの居られる家屋の下は、わづかに一尺にも滿たぬ水のやうではあるが、その實底も知れない深淵である。一日も早く此處を引き拂つて、安全なとこ

ろに家を建てた方がよろしからう。』と申しました。

賈玉は聞いて大いに驚いて、附近の丘に家を移しましたが、果して數日經ちますと、もとの家は陷落して底も知れない深淵が口を開けました。これを見た賈玉一家のものは、今更のやうに眞君の德に感じて、厚くその恩を謝したといふことであります。

六

大魔王と小魔王とは、このやうにして眞君のために退治されてしまひましたが、尙、その眷族どもが、豫章といふところに棲んでゐて、盛んに附近の住民に害を加へて居りました。

訴へをうけて眞君は、またも弟子達を連れて豫章へ來ました。すると妖魔共は、殺されるのが恐ろしくなつて、何れも人間に化けて町の中に散らばつて住むことになりました。

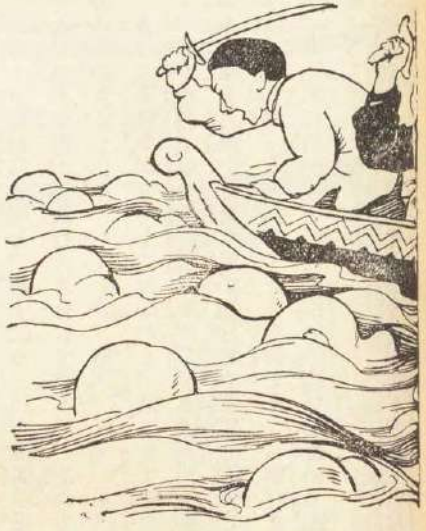
このお化けの人間は、ある日眞君の弟子の一人に向つて、

『自分の家は、豫章の舊家で、代々德を積み、善を施して人樣から尊敬せられて居ります。ところが今、人から聞くところによりますと、眞君のところには一振りの寶劍があつて、天地間のあらゆる妖精を退治することの出來る力が、その寶劍に宿つてゐるといふことですが、それは本當でありますか。』

と訊ねました。

弟子はこの人が妖魔であらうとは少しも知りませんでしたから、

『なるほど眞君の家には寶劍があります。そしてその寶劍は功德が非常に廣大で、一度び天を指せば天が裂け、地を指せば地が裂け、星辰を指せば星辰が忽ちその軌道を失ひ、河を指せば河の水が逆流し、世にありとあらゆる妖魔は、一度この劍に遇へば、その身が微塵となつて碎けてしまふといふ、世にも稀なる寶劍です。』と、答へました。



聞いた男は、さも感心した樣子をして更に言葉巧みに、

『成るほど有り難い寶劍でございます。しかしその寶劍でも傷けることの出來ないものが何かあるでせう。もしあつたら聞かして頂きたいものですが……』

と、訊ねました。

弟子共は冗談半分に、笑つて答へました。

『よし、よし。聞かしてあげよう。それは瓢簞と冬瓜だ。瓢簞と冬瓜とは、さすがの寶劍でも斬ることは出來ない。』

智慧の少し足りない妖魔はこの言葉を聞くと大いに喜んで、これは、しめたとばかり仲間のもの全部、

瓢簞や冬瓜に化けて、枝のまゝ、蔓のまゝ、楊子江に浮んで、ごろ〳〵ごろ〳〵と何處へともなく逃げ去らうと企てました。

仙人の眞君は、その時獨り一室にあつて本を讀んでゐましたが、俄かに妖氣が天地をこめて立ちあがつたので、スワこそ妖魔が襲つて來たか、一刀の下に斬り伏せてくれようと思つて窓を明け放ち、きつとあたりを見廻しますと、楊子江の上に妖魔共の化けた冬瓜や瓢簞が、幾百とも知れず浮んで、流れて行くのが見えました。

さてこそ妖氣が立ち上つたのかと、はじめて覺つて、すぐ樣弟子達と共に船を浮べて、すばり〳〵冬瓜や瓢簞を片端から斬り棄てました。冬瓜や瓢簞ですから、刀などを用ひなくとも面白いやうに斬れます。暫く間に川一ぱい浮いてゐた冬瓜や瓢簞を、皆斬りすてゝしまひました。

妖魔の眷族どもは、かくして一人殘らず眞君のために退治されてしまひました。が、眞君は、

『たとへかうして一人殘らず斬り棄てたからと云つて安心は出來ない。何時なん時殘黨が起つて、人民に仇をなさないとも限らない。』

と、思ひました。

そこで一策を案じて仙術を以て鬼神に命じて、城の南方の一つの井戸に鐵柱を埋めさせました。そして、その頭の方數尺を地上に殘して目標にして、更に八本の索をかけて、仆れないやうにし、誓ひを立てて云ひました。

『この鐵柱が若し歪むやうなことがあつたなら、それは再び妖魔の精がこの世にゐて人に仇をなす證據であるから、その時は再び俺が生れて來て退治て呉れる。この鐵柱が何時までも歪まなかつたら、それは妖魔が永遠に降伏した證據である。』

其の鐵柱は一寸の歪みなく、人々は安心して生きてゐることが出來るやうになりました。（をはり）

今月から毎月一回、私が講師となつて、『金の星誌上講演會』といふのを開く事になりました。當分の間『どちらが偉い？』といふ題で、お話を致します。

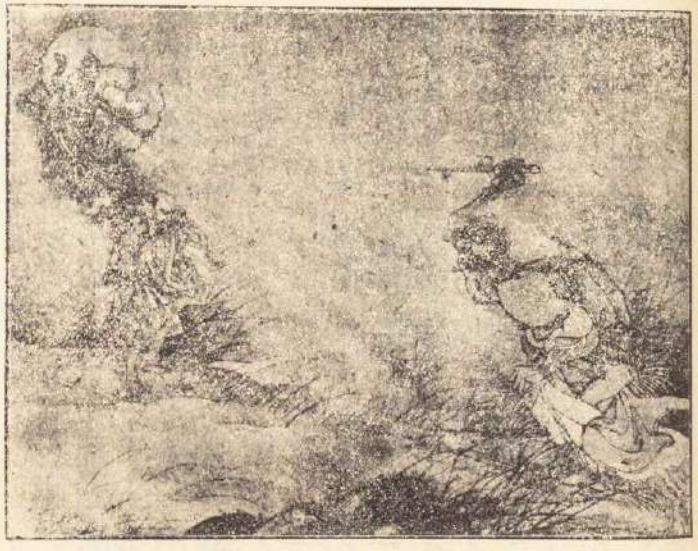
昨年一ヶ年間、本誌で皆さんにお目にかゝりました、鈍栗山のお猿さんは、『神は天地の主宰にして、猿は萬物の靈なり。』と申しましたが、人間の中には昔から、『人は萬物の靈にして、酒は百藥の長なり。』と勝手な事を言つて、酒に醉つぱらッて威張つてばかり居た者がありました。これで見ても全體人間と動物と、どちらが偉いかといふ事は、今日でもまだ決定されない問題であるといふ事がわかります。

『あいつは畜生見たいな奴だ！』

こんな事を言つて人を罵る者があります　昔の學者は『人面獸心』などゝ言つて、惡人の事を、顏は人間らしいが、心は獸のやうだ。』と罵つたものです。獸が若し字を讀み、人間の言葉を解し得るならば、こんな事を駄つて聞いて居るでせうか。私は彼等が默つてゐないだらうと思ひます。そこで御互ひは、鳥や獸が默つてゐるのを善い事にして、餘り惡口を言はないやうに、先づお互ひ人間といふものゝ素性を研究してみたいと思ひます。

今から恰度六十八年前、西曆千八百五十六年の事でした。獨逸のヂュッセンドルフといふ町の近くにある、ニンデルの谷で、工事をしてゐました人夫が、一つの人間の骸骨を掘り出しました。所が其の人間の骸骨には、不思議にも眼の上に恰度獸の角のやうな大きな瘤が『多分二つ』あつたのです。人夫はてッきり鬼の頭を掘り出したのだと思つて、早速それをヒュールロットと云ふお醫者樣の所へ持つて行つて見せますと、ヒュールロット博士は、いろいろ研究した結果、

『これは鬼の頭ではない。矢張り普通の人間の頭で多分此人が生きてゐた頃、何所かで轉んで　石で額



（如意輪觀世音鬼婆を射殺し玉ふの圖）

を打つたのでせう。其の時額の骨が膨れ上つたまゝとうとう角のやうな形になつて了つたのだらう？』と申しました。しかしヒュールロット博士は賢い人でしたから、『だらう？』と云ふ言葉で鑑定しましてそれをボンヌ博物館へ寄贈致しました。

所が其後千八百八十七年、卽ち今から僅か三十七年前の明治二十年に、フランスの大學教授フレーボンといふ學者は、フランスのナムールの附近にある『間者の穴』といふ洞穴の中から、人間の骨を十人分掘り出しました。所が不思議にも其の骸骨の頭には、皆なそれより三十一年前に、ドイツのニンデルの谷で掘り出した頭と寸分違はぬ角があるのです。そこで學者達は集つて、いろ〳〵研究した結果、どうもヒュールロット博士の云つたやうに、轉んで石に額をぶつつけたのではなからう、こんなに十人が十人共同じやうに轉んで、同じやうに額へ瘤を作る筈はないと云つたのです。だからヒュールロット博

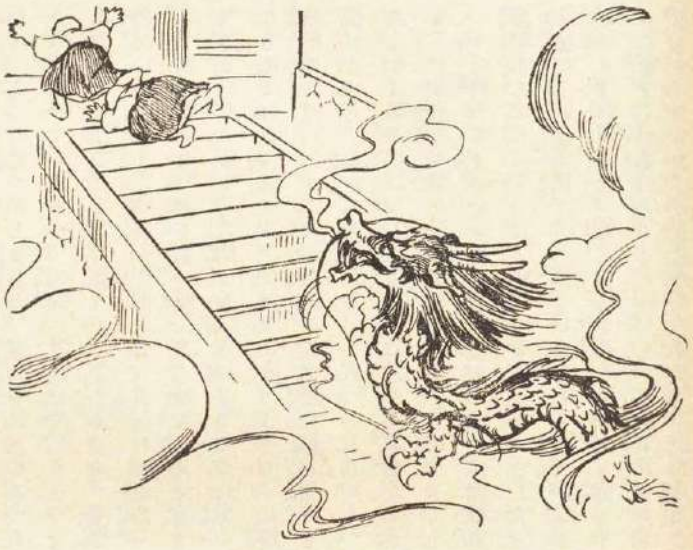
士は、『だらう？』と言つて置いたのでした。

さア、さうなると大變です。今まで吾々人間は、最初からこんな完全な人間であつて、鳥や獸とは全く素性が違ふと言つて、威張つてゐたのですが、吾吾人間の先祖の骨を掘り出して見ると、それには角があつたといふ騒ぎですから、もう『人は萬物の靈長』などと、偉さうな事を言つてはゐられなくなりました。

しかし負けぬ氣の人達は、『それはドイツやフランスの人達の先祖は鬼だつたかも知れないが、吾々の先祖には角なんか有りやアしない！』と言つて力んでゐましたが、其後間もなく、オースタリアのクラビナでも、同じやうな角のある人間の頭を十も掘り出しました。そこで段々々々今迄力んでゐた人達も、『ではやッぱり、吾々の先祖には角があつたのかなア。』と言つて額を撫でゝ見るやうになりました。

で、たまゝハイカラな人が、髪を叮嚀に兩方へ分けて、額を半分も隠してゐようと、『あいつは怪しいぞ、屹度角があるんだ。』などと囁き合つたといふ事です。

こんな事を申しますと、皆さんは、『それは外國の話だ、日本人には角なんかありやアしない。日本人には日本魂があるんである！』と言つてお怒りになるかも知れないが、一寸待つて下さい。日本の古いお伽噺には、鬼婆なんといふ恐ろしい者があつて、途に行き暮れた旅人を親切ごかしにして宿めて置いて、それを殺して食つたといふやうな話がありません。安達ケ原の鬼婆はその代表的なお話です。それから紀州の日高郡には鐘卷道成寺といふ有名なお寺があつて、其所では清姫といふ女が蛇になつて、安珍といふお坊さんが、鐘の中に隠れてゐるのを、七卷半捲いて火を吹いて殺したといふ話があります。それから皆さんはお家のお祖母さんやお祖父さんに聞いてごらんなさい。日本では昔から、『女には十二



本の角があつて、一人子供を產むと、其の角が一本脫け落ちるので、十二人の子供を產まなければ、角が皆な落ちてしまはないのだ。』と言つてゐたものです。

勿論それはヒユールロット博士や、フレーボン教授のやうな實驗的の議論ではありませんでしたが、偖日本人だッて、やッぱり獸の先祖をもつてゐた證據を握られてゐるから、どうとも致樣がありません。その證據といふのは何でありませうか。

皆さんは牛や犬のお乳を御覽なさいましたでせう。牛や犬の乳は人間のやうに乳の數が二つではありません。あなた方がお小い時、おッ母さんに一抱ッこして頂戴。』と云つて直ぐ、お手々をおッ母さんの懷へさし入れたのは、何の爲でしたらう？　それは其所に眞白い二つのミルク罐がおつて、それがいつでも熱からず冷たからず恰度いゝやうに溫められてあるからでした。そのミルク罐は、『乳房』と云

つて、二つに定つてゐました。獸の乳は四つあつたり六つあつたりするが、人間の乳は二つにきまつてゐるとお思ひでせうが、さうではありません。學者の說によりますと、吾々人間は昔々其のむかし獸であつたのだから、到る所に獸であつた記念碑が殘つてゐるのださうで、人間のお乳も決して二つに定つたものではありません。ドイツのショーテッバの指物師の男は、二十二才の時、お醫者樣に體格檢査を受けますと、胸からお腹にかけて八つの乳房があつたといふ事です。又た或女の人は八つの乳房があつてそれが皆なお乳の汁を分泌したといふ事です。

一寸待つて下さい。今どなたかが、男には何故乳房があるのだらう？　と囁いたお方がありました。本當にこれは疑問です。斯くいふ私にも乳房が二つありますけれども、私は此の乳房からお乳を赤ちやんに飲ました事はありません。しかしお乳は確かに出ます。男のお子さんは十四五才から十五六才頃にお乳のぐるりが二錢銅貨位の丸さに堅くなる事があります。其時お乳を搾つてごらんなさい、美しく澄んだ水が出ます。私は十四才の時川へ泳ぎに行つて岩の上に腰を掛けてゐて、自分のお乳の出る事を發見しました。そして友達の孫四郎といふ子供に飲ませますと、孫四郎は、『鹽つばい。』と云つて、ペッペッと唾を吐きました。それからずつと後、私はお友達のお醫者さんの家へ遊びに行つて、本棚の中にある大きな書物を抽出して讀んでゐますと、其中にアメリカの土人の男で、主人の奧樣が亡くなられたので、其の赤ちやんに自分のお乳を哺ませてゐるうちに、段々乳房が大きくなつて、おしまひには女の人と同じやうに、お乳かどん〳〵と出るやうになつた話が書いてあるばかりか、其の寫眞まで載つてゐるのを見ました。

話は元へ戻ります。人間が動物であつた證據の一つとして、お乳の澤山ある人の事を話しましたが、

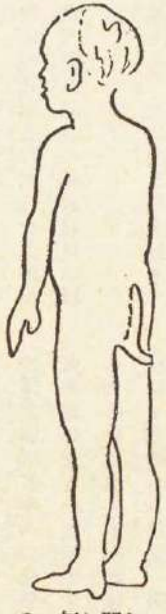
皆さんは『それは外國の話だ、吾々日本人には、そんな馬鹿な事はないぞ！』と言つて自警團のやうに竹槍や日本刀を持ち出して來て、私を殺しに來るかも知れませんが、一寸お待ち下さい。日本の大學の先生であつた有名な博士の調査によりますと、日本人は、女百人の中に五人一分九厘の平均、男百人の中に一人六分九厘の平均に『乳頭痕跡』といふのがあります。乳頭痕跡とは、卽ち二つの乳房以外の乳であります。

それから今一つ二つ最も著しい點を申上げますと、先づ手足の指です。御承知の通り鈍栗山のお話に出ましたお猿さん、あのお猿さんは手が四本あつて、四本共自由自在に物を掴んだり握つたりします。そのお猿が人間に進化しますと、もう人間は手だけ盛んに使つて、足の指は殆ど使はなくなりました。西洋人、朝鮮支那の人達は、年が年中きちんと靴を穿いてゐて、足の指は殆ど無用のものになつてゐます。所が日本人は世界中で一番よく足の指を使ふ人間です。下駄や草履を、西洋人や朝鮮支那の人に履かせるなら、皆な轉んで了ひます。しかし日本人は下駄を履いて何十里でも歩きます。それから草履を作つたり、繩を繕る時、實に上手に足の指を使ひます。東京の醫科大學で先生をしてゐられたベルツ博士は、日本人の此の足の働きを見て、一つの論文を書いたといふ話です。

それは日本人が一番猿によく似てゐるといふのではなく、猿が一番よく日本人に似てゐると云つてもよいのです。所が此所に一つの問題が起つて來ます。それは人間にも猿や犬や猫と同じ『尻尾』があるといふ事です。

『馬鹿な、そんな事があるものか。』と云つて無やみに腹を立てないで、少しく聞いて下さい。米國のハリソンといふお醫者さんは、尾のある二人の子供を診察しました。其の一人は生れて六ヶ月目に長さ二

寸三分の長い尾をもつてゐる子でした。其の子の尾は間もなく脱ちてしまつたさうですが、今一人の子は十歳になるまで、可なり長い尾があつたといふ事です。これは何も米國人ばかりでなく、人間全體は、おつ母さんのお腹の中に居る時、五週間目位には、頭と眼と手と足と、そして立派な尻尾とが出來てゐます。其の尻尾は丁度オタマジャクシの尻尾のやうに段々に消え失せて了ひますが、成長しても、脊髄の下の端の方に、尻尾を動かす梶に類したものだけは、明に殘つてゐるといふ事です。それは日本人にだつて無論あります。だから今でも、人間が嘘を吐いて、それがばれた時の事を、『とうとう尻尾を出した。』と言つてゐます。勿論これは狐が人間に化け損つた時の話で、日本人は、



猿から進化しないで、狐から進化したのだらうなどと、ふざけてはいけません。

さて、人間の先祖が猿であつたり、角が生えてゐたりしたと假定して、其の猿や鬼から、ぽいと一足飛びに人間になつたものでせうか。皆さんが溝やドブを跳び越えるやうに、ぴょんとこなと猿から人間に飛び越えられるものでないとすれば、猿と人間との間に、猿でもなく人間でも無いものがあつた筈です。

それに就いては種々の説もありますが、千八百九十一年、即ち今から三十三年前、明治二十四年にオランダのお醫者さんで、ユージンジュボアといふ學者は、ジャバ島で、猿に非ず人に非ずといふ骨を掘出した事です。それは水道工事か何かをしてゐる人が、見付けたもので何でも澤山の骨だつたといふ話です。

學者はこれを『仲間類猿人』と言つてゐます。

しかし或人は言ひます、吾々人間は動物の進化したもので、吾々の先祖は猿であり鬼であつたといふ事を承知します。しかし進化した以上人間は人間です。吾々はもう人間だから獣類以上、偉いものだ。動物には道德といふものが無い。學問がない。智慧が足りない。しかし人間には道德があり智慧があり、學問がある。だから人間は、動物よりも遙に偉いのだ……。私も其説に賛成したいのです。しかし人間には學問があり智慧があるといふ以上、唯むやみに、偉い偉いと威ばるワケには參りません。一つ〳〵議論をしてみたり、研究をしてみた上で、果してどちらが偉いかといふ事を決定しなければなりません。そこで私は先づ人間と蟻と、どちらが偉いかと云ふ問題を掲げます。

蟻には王様といふものがありません。何十萬居ても皆な互ひに仲よく扶け合つて、せつせと働きます。それから蟻は蜂のやうな武器をもつて居ません。人間でいふなら、王様もなく鐵砲も刀も持たないお百姓さんばかりが何十萬と集つてゐる國民のやうなものです。若し世界に、そんな國民があつたとするなら、其の國民は皆な勝手氣儘な事をして懶けたり遊んだり、鋭々にしたい放題な事をして、なか〳〵統一なんかつくものではありません。所が蟻は、誰から命令させられるのでも無く、皆な一つ所に集つて、一生懸命に團體の爲に働きます。

蟻は巣を作つて其所に卵を産んでありますが、萬一にも其の巣が人間か犬かに碎かれた時は、皆な大周章に周章て逃げ廻りますが、其時感心な事が一つあります。それは逃げる時、其所にある卵を見つけ次第に銜へて行く事です。それに誰の産んだ卵、かれの産んだ卵といふ區別はありません。これは何でも無い事のやうですが、今度の地震の時の騒ぎについて考へてみても解ります。若し、人間であつたな

ら、學校が火事だと聞くと、生徒のお父さん、おッ母さん達は直ぐ學校に駈けつけては來ませうが、他人の子供には目も呉れず、先づ一生懸命になつて、自分の子供の名前ばかり呼んで、他人の子供は突き除けて置いても、自分の子供だけ助け出さうとするやうな人が、百人の中に何人ありませうか。恐らく九十人までさうでは無いでせうか。しかも人間には役人があつたり新聞があつたり、お友達があつたりして、あとで「あいつは實に利己的な卑劣な奴だ。」と云はれる事が恐ろしくて、強ひて善い事をしようと骨を折る者があるかも知れませんが、蟻には役人も警察も新聞も何にもありませんから、後から非難されるのを恐れる心配はありません。しかし蟻には人間よりも強い道德心があると見えて、自分の子だ他人の子だといふ區別をするやうな事はありません。と云つて蟻はそんな事の見分のつかないやうなボンクラではありません。

或熱帶地方に何百町歩何千町歩といふ廣い野原があつて、其所には蟻の塔ばかりで、殆ど他の動物は居なかつたさうです。所が或年其所へ何萬とも知らぬ澤山の小鳥が飛んで來ました。そして毎日その蟻を取つて食べてゐました。それを見た一人の探險家は、『あの野原の蟻も、今度は皆な絶果てゝ了ふわい。あの何萬羽の鳥にかゝつては今に皆な食べて了はれる。』と云つてゐましたが、一月二月經つと、今まで木の枝に群がつて鳴いてゐた鳥が急に一羽も見えなくなりました。はてどうした事だらうと云つて、能く〳〵調べてみますと、大變な事が發見されました。

野原の蟻は自分より何百倍も大きな小鳥と戰爭を始めたのです。王樣も何もない何億萬の蟻は皆な心を合せて、或夜の或時間に、一齊に鳥の宿つてゐる木の枝に攻め登つて行つたのです。そして一羽の小鳥に對して何千疋づゝの蟻が、一度に攻めかゝつて行つたのです。今まで毎日蟻を食べて安心してゐた

小鳥は、枝の上ですや〳〵と眠つてゐますと、俄かに野原一面の木の枝全體が蟻になつて了つたのです。そして何萬の小鳥は皆な全身に何千疋の蟻を脊負つて飛び立つたのですが、蟻が全身の羽の中毛の間一面に這い込んで、がつしり咬みついてゐるので、小鳥は二三町も飛べないで、皆なばた〳〵と野原に落ちて、却つてすっかり蟻の餌食になつて了つたといふ事です。此の一つの話を考へてみても、人間といふものは、蟻に較べてみて、眞に團結心の薄い淺ましいものだといふ事が解ります。毎日の新聞を御覽なさい。近所隣りの噂を聞いてごらんなさい。人間は三人集ると直ぐ嫉み合つたり喧嘩をしたりします。悲しい話ではありませんか。さて、蟻と人間との比較はまだ終らないのですが、來月號でもつと面白い有益なお話をいたしませう。そして御互ひ人間が萬物の靈長だといふ證據を探り出さうぢやありませんか。（つゞく）

童謡

野口雨情選（大人篇）

ふくろ

横濱市本牧町　佐藤　義美

夜ながだ
お月さん
お休みな
どんもり鳥が
吃って　ほッ
夜ながだ
おまへも

お休みな
窓から覗いて
寒かつた　ほッ

お沼のあひる

埼玉縣豐田村　高橋　枝青

あひるあひる
お沼のあひる
寒そな波を
つくつておよぐ

あひるあひる
お沼のあひる
今朝は西風
筑波があをい

あひるあひる
お沼のあひる
早くあがれ
焚火にあたれ

お留守居の夜

大阪市絹笠町　菅　時三郎

美代ちやん、美代ちやん
ねねしたの
お話聞き聞き
寝てしもた

美代ちやん、美代ちやん
かせ引くよ
おこたが冷えたに
寝てしもて。

今夜はさびしい雪の晩
父様歸りがなせおそい
どんなに降つたろ
ねむたいな。

葱坊主

新潟縣青海村　片平　庸人

葱坊主
すつぽり
笠かんぶれ
畑さ
あられは
ばんらばんらだ

葱々坊の
笠さ
雀も來
ばんら
ばんらふる
あられだぞ

どろどろ道

京都市田中鶴田町　三須　英三

お背戸り細道
どろどろだ

赤いかつこ履いたら
とられるぞ
ぽつくり履いたら
とられるぞ

花ざかり

神奈川縣中川村　小山えうじ

お馬ヂヤンカヂヤンカ
お山を上るよ
お山よいよい
花ざかり
花ざかり

馬子はホーイホイ
峠で唄ふよ
峠よいよい
花ざかり

花ざかり

お山と一軒家

三重縣上野町　松田　星兒

青いお山が暮れました
黒いお山になりました
白い一軒家が暮れました
赤い一軒家になりました
黒いお山の山の上
お星さん一つ飛びました
走い一軒家の家の前
くひながなき〳〵通つてつた。

落葉たき

深川區西平野町　藤本秀太郎

落葉よ落葉よ
ぼうぼともえろ
まつかなはつぱは
まつかにもえろ

きいろいはつぱは
きいろくもえろ

おいらは風の子
寒くはないぞ
焚火のまはりを
踊れや踊れ

落葉

三重縣松阪町　林　ゆ　美

落葉がサラ〳〵
ふるきだす
着物のすそを
ひきづつて
風の吹くたび
サーラサラ

蕎麥屋の煙突

小石川區西丸町　相川　幸雄

蕎麥屋の煙突
土管を重ねた
曲つた煙突

ゆうべは
火の粉を吹いてゐた
火事が多いよ
あぶない〳〵

寒い月さん

新潟市龍ヶ島　北澤鹿次郎

お月さん傘さした
風にとぶよな傘さした
枯れた柳の中
橋の明しも傘の中

今夜の傘の大きこと
今夜の風の寒いこと

童謡

野口雨情選

（子供篇）

青菜

山梨縣廣里東校　津田　利晃

青菜の畠は
青畠
青菜がちやか〳〵
ひかつてる。

北の國

福島縣郡山町　今泉　仁藏

北の北國
銀の國
青い青い
雪すだれ
そりの小鈴の
なるお國

蜘蛛

京都市小川通　伊藤冨士雄

お家は絹糸
百疊敷
御主人一人で
淋しかろ
大きな眼鏡を
びか〳〵と
廣いお家の
隅までも
たまには お客も
あるそうだ

木枯

同　人

木枯の風吹く頃は
どこの障子も
寒むい寒むい

じやくろの木

大阪府谷川校　辻　克己

風にふかれた
じやくろの木が
葉がなくて
かれた木のよにみえる
一つのこつた
じやくろが
風にふかれて

うごいてる

鳥

鳥取縣下中山校　河内　定雄

かあ〳〵かあちやん
何處へ行つたと鳴き鳴き
お山へ飛んで行つた

舟

門司市清見町　岩石　三雄

兄さん乘せた
船は行く
兄さんあすから
兵隊さん

赤城山

高崎市八島町　近藤　高雄

陽の出る頃の赤城山
紫色の赤城山
入り陽の頃の赤城山
眞赤に燃える赤城山

夜

水戸市田見小路　松岡　弘

ふくろが
お山で
鳴いて居る
さら〳〵
さらと
葉が落ちる
今夜の
星の
青いこと

月

埼玉縣野上校　黑田　包市

半かけお月樣
いそ〳〵と
銀の靴はいて
鈴ふつて
すすきの道を
いそいでいつた

お月さま

奈良縣神戸校　浦島　馨

お月さまの
せんせいが
大せいの
星の
せいとーに
光るけいこを
敎へてる

夕方

山口縣麻里布校　森本　靜江

西のおそらが
まつかになつた
お日樣山へ
おかへりだ
からすもかあ〳〵
おかへりだ
ばうやもなかずに
かへりませう

鐵管の中のピアノ

東京市青山南町　鈴木　芳

鐵管の中で
足ぶみすると
鐵管の中で
ピアノが鳴るよ
ボンボンボン
ボンボンボン
鐵管の中で
足ぶみすると
わたしの足の
拍子につれて
ボンボンボン
ボンボンボン

冬の夜

東京市外淀橋町　富岡みさを

話をしながら
弟とこたつに入つてゐると
いつの間にか弟が
眠つてしまつた
淋しい冬の夜

幼年詩

若山牧水選

すゞめ（賞）

香川縣木田郡水田校尋六　松本　初

裏の竹やぶで
雀が米のほを
ひろつて來て
一つ一つたべてゐる

評、優しい雀、優しい米の穂。（牧水）

野良道（賞）

山梨縣北巨摩郡泉校尋四　小宮山秀則

向ふの野良道
小供が一人
泣いてゐた
腰のこごんだ
ぢいさん聞いてゐた

評、田舍の景色をよく寫しました。（牧水）

石屋さん（賞）

東京市深川區明川高等校一年　藤本　司郎

石より固い
のみの先
かつちん〳〵
石を切る
村のしづかな
おひる時
かつちん〳〵
石がなる

評、歌の調子が何だか、その石の音の樣だ。（牧水）

ちみきり草

香川縣木田郡水田校高二　西田富己子

日がてつてゐる
ちみきり草
ふみ石のかげに咲いてゐる
小供が

綴方

齋藤佐次郎選

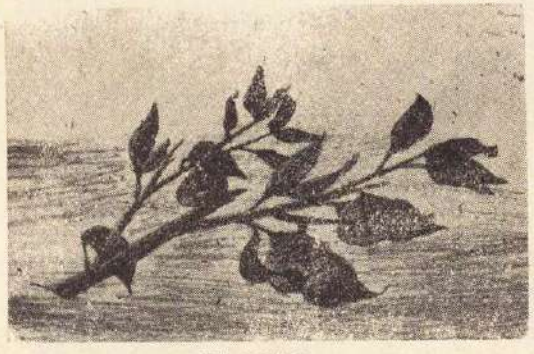
卵買ひ（賞）

香川縣木田郡水上校尋六　鍛治繁雄

卵買ひ「卵はありまへんか」と表の方で言つた。「へえあります」と言ふと、卵買ひはスタ〳〵と家の中に入つて來た。爺さんは「卵はどのくらゐして居るのな」と聞くと「えゝ少しく下げましたせ。今日は二圓六十錢貰です。」と鼻をなで口を尖らして卵買ひは云つた。

爺さんは奥の方から卵箱を取出して卵買ひの前にもつて來た。卵買ひは早速卵をはかりかごの中に入れた。爺さんははかりゝ方ばかり見ておられた。卵買ひは竿ばかりを取出して分銅をあつちこつちと動して居たが、やがて卵を下して「七百六十匁あります」と云つた。

爺さんは「それで何んぼになる」と云ふと卵買ひは「えゝ一圓九十四錢六厘になります」と云つた。やがの事に卵買ひは「キセル」を取出して煙草をのみ始めた。「旦那はん、もうこつと等のやうに歳が寄つたら、もう何する事も出來ないやうになつたでのう」と卵買ひは云つた。爺さんは「えゝさよ、年が寄ると目からは涙が出るし、夜が來るとコン〳〵たぐるので、何にもしないでも若い時分にいかげん仕事をしたぐらゐえらいのだからもう仕方がない」とおつしやつて居た。しばらく話をして居たが「又たのみます」と云つて卵買ひは又もすた〳〵と歸つてしまつた。爺さんは「あの爺も歳が寄つて、あんなに歩くのはえらいであらう」と叔母さんと話をして居た。



金柑の實（賞）　千葉縣山武郡海隣校四年　佐藤重男

みねをぢさんの死（賞）

長崎市國石校　金丸榮子

學校から歸る時芳枝さん方にうちのお母さんが居たので行つて見ると、おろくをばさんが佐世保に行く所だつた。おろくをばさんとは、みねをぢさんのおよめさんで、昨日みねをぢさんが佐世保の病院に入院したが、さつききとくの電報が來たので行く事になつたのだつた。翌朝お母さんが「みねやんは死んだよ」と、言つたのでおどろいた。お父さんも「打ち殺しても死なん樣な者が死んだもんなあ」と言つてゐる。みねをぢさんは四十五位の、強い今まで病氣などしたことのないと言ふくらゐ健康な人だつたが、去年から病氣

ちみきつても
ちみきつても
いぢらしく咲いてゐる

評、ちみきらすにつみきりなさい。(牧水)

桑畑

熊本市下益城郡海東校尋六　中井はづみ

桑畑の細い路を
人が通る
桑よりも小さい
人が通る

評、これも田舎の景色が見える樣。(牧水)

猫

山梨縣北巨摩郡村山西校高二　伊藤とり子

えんがわに
ぬくまつてゐる
ねこよ
もう日はくれるぞ

評、ほんとだ、もう暮れるぞ。(牧水)

鶴

山口縣熊毛郡八代校尋四　鬼武ミチコ

くもつた空を
ながめたら
たくさんのつるが
悲しさうにないた

評、山口縣に鶴の澤山ゐる所があるさうだが、あなたの村ですか。(牧水)

霧

山梨縣北巨摩郡村川西校高二　山本よしみ

霧が下りた後で
天氣になつた
青い空か
しめつぽさうだ

評　山本さん中山さん坂本さん三人の共靜かな景色がほんとに靜かに歌つてあります。(牧水)

空

山梨縣北巨摩郡篠尾校尋六　中山ますみ

廣い青空へ
遠くの山がうかんでる
雞がいせいよく
ときをつくつた

く　つ　（賞）　住所不明　宮崎秀一

變な店員

北海道旭川市六條　大谷喜代子

明日クリスマスだと云ふので、今井へ弟と二人で美ちやんのおくりものを買ひに行きました。二階にある玩具の賣場へ行つて、美ちやんにはどんなおもちやがいゝだらうと思ひながらはしから順々に見て行きました。さつぱりよいのが見つかりませんでしたが、すつとはしの方にコーヒーの器で全部せとで、本物の小さいやうなのがありました。弟と二人で、「これがいゝ。これがいゝ」と云つて、そこに居た女店員に「このコーヒー一揃を下さい」と云ひました。すると女店員はこちらへ來て「どれですか」とたづねますので、「このにかゝつて、とう〳〵昨夜病院で死んだのだつた。晝からお葬式を見に行つた。宮が前を通る時、私は心の中で「みねをぢさん、さよなら」と言つた。涙が一つおちた。

コーヒー器を一つ下さい」と又云ひますと、「これは一組になつてゐますから一つは賣りません」と答へました。私は一組のつもりで一つと云つたのですから「えゝ、その一組を下さい。」と云ひますと「これは一圓七十錢です」「えゝその一組を下さい」「一圓七十錢です」と云つて仲々ガラス箱から出してはくれません。私は弟と顏を見合せましたが、弟もへんな顏をして私を見上げました。それで思ひきつて今度は「その一圓七十錢のを包んで下さい」と云ひましたら、やつと今度はわかつたと見えて、出して包んでくれました。

歸る途中、弟に、「さつきの女店員ずゐぶん變な店員ね。」と云ひましたら、弟も「何べん一圓七十錢と云つたんだかわからないや。さつとね、子供ばかりで行つたから、一圓七十錢ぐらゐに高い玩具なんか買はないだらうと思つて、何べんも一圓七十錢ですつて云つたんだと思ふよ」と云ひました。私もなるほどさうかもしれないと思

燒人形と夫　廣島高女立縣一　佐藤喜久代

すみきつた秋の空

山梨縣北巨摩郡
篠尾校尋六　坂本　俊信

すみきつた秋の空
垣根の上で
にはとりが
ないてゐる

月夜

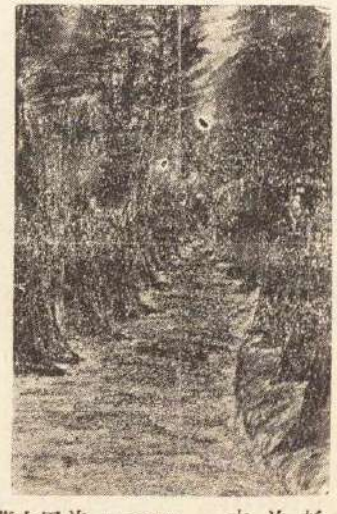
東京市麹町區
日比谷校尋六　伊藤　駿二

月夜はなんでも青い
お月さんも青い
空も青い
森も青い
ものゝ陰も青い
門の電燈だけ
あかるい

竹葉集

香川縣木田郡
水田校尋六　森川　恒彦

こたつで本を讀む
竹葉集と
表紙に書いてある



住所不明　前田大藏

杉ゆめを見てゐるのだ
並らう、につこりとほ
木ほゑんでねがへりを
うつた。そうして又
すや〳〵と小さない
びきをしてねむつ
た。紅葉のやうな愛
らしいお手々をむね
の上にのせて、につ
こりと又ほゝゑん
だ。まくら時計がかつちん〳〵と
音を立てゝ、平氣の平ざで時間を
すゝませる。姉さんはしけんがあ
るのか、一心にペンをはしらせて
ゐる。

朝禮

東京府豐島師範
附屬校尋五　稲葉　廣直

この間朝禮の時、主事先生が「み
ひました。何にしても變な店員で
す。

弟の寝顔

神戸市平野下祇園町
平野校尋四　氷上　正

そうつとふすまを明けて中へ入
つた。電氣がぱんやりとうすぐら
くともつてゐる。音を立てないや
うに弟の横にならんで寝た。弟は

なんだかたくさん
和歌が集つてゐる
優しいお母さんの本よ

大根

大阪府泉南郡
谷川校尋四　大道　林

よそのおばあさんが
だいこんをひいて
大きなのを
よつてゐる

けいこぎ

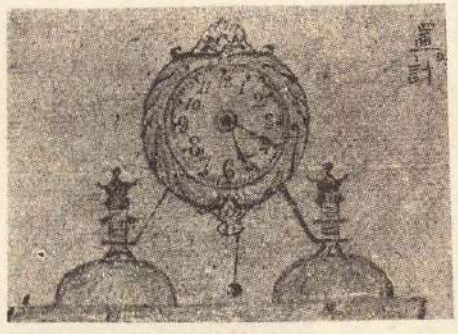
東京府豐島
師範附屬校尋五　稲葉　廣道

なくなつたけいこぎ
けんどうの時どうしやう
兄さんのかりてこか

古井戸

香川縣木田郡
水田校尋六　平井　茂

古い井戸を
のぞいたら
雪の下が長く
さがつてゐる



置時計　高田市高森町
杉山一之　横山幸治

んな横をむいていけない。まつす
ぐ前にむいて歩け」とおつしやい
ました。するとうしろで組中でも
茶目の久田君が「おことばにした
がひまして」などゝさわいでゐた。
「前へ進め－」のがうれいに歩き出
したはいゝが、久田君は前にすゝ
んでいつてごつんと電柱に頭をぶ
つけた。そして「先生前へ行けま
せん」と申しました。教生の先生は
「君、馬鹿だなアー」とおつしや
つて、とめやうとなさいましたが、
「主事先生のお言葉にそむくこと
は出來ない」といつてきゝません。しかたなしにほつておいて見
ることにしました。すると久田君
は一年の教室をおして「まだか。
まだか」といつてゐます。そして
とう〳〵先生にしかられました。
久田君は本當にいたづらでこまり
ます。

驚いた事

臺灣彰化第一公學校尋五
吳　啓　宗

大正十二年六月かの頃に私と友
達三四人がからだをあらひに行き

冬の夜

山梨縣北巨摩郡 篠尾校尋六　新海俊太郎

凍つた道を
だまつて行く
夜のおつかい
さみしいな

土曜日

山梨縣北巨摩郡 泉校尋四　山田富士惠

土曜日はんにち
かへつたら
お日樣ちやうど
まん中だつた
庭のがんがら
ひかつてた

いかけやさん

山梨縣北巨摩郡 篠尾校尋六　新海　眞治

黒い手のいかけやさん
なべをまわしながら
小づちでうつてる

き く　香川縣水田 校尋六　内原正夫

私もあらひました。しかし岸のあさい所であらつてゐると、不意に足がすべつて、私はとう〳〵水に流されてしまつた。「あッしまつた」と思ふと、もう一間ばかりも水に流されてしまひました。「たすッ……」と聲を出すと、水が口一ぱい入りました。かうしてかぞへきれない程に澤山水をのみました。耳はぼう〳〵とすさまじい音だけきこえてゐる。その中に神の助か、きしにうち上げられた。その時のうれしさと驚きはとても言ばが分りません。氣がついてうしろをふりかへつて見ると、意外にも友達が私をほめてゐる言ばがきこえる。それもそのはず、友達は私がおよぐ事が出來たと思つたからだ。

學校がへり

山梨縣北巨摩郡 篠尾校尋六　有賀　一猛

學校からかへつたら
母は一人ではりしごと
僕もおさらいでも
しるかな

水車

熊本縣下益城郡 海東校尋六　吉迫あきの

向うの岸の
ぎつこん水車
降る日もぎつこん
照る日もぎつこん
ぎつこん〳〵

兵隊

東京府下戸塚町大字戸塚　寺島秀四郎（十三才）

戸山ヶ原へいつたら
兵隊さんがゐた
一人の兵隊さんが
とラッパをふいたら
皆ならんだ

父の歸り

北海道函館市松風校尋六　濱岡榮一

チリ〳〵〳〵〳〵目ざまし時計が鳴りひゞいたとたんに、ぱつと目があいた。さうだ今日は父が札幌から歸るのだ。着物を着かへて、弟達と家を出たのは五時半頃、ぶら〳〵と町を歩いて行つた。ガラガラ〳〵雨戸をあけてゐる家もある。大人が一人辨當を横わきにかかへ、話しながら菅谷の方へ行つた。どこかの職工であらう。

停車場の廣場へ出た。「入山一」では小僧が外をはいて居た。停車場の中で入場券を買つて、改札口で切符を切つてもらつて、プラットホームで待つて居た。時計の長針が二十分をさそうとした時、ゴウーゴウーと音をさせて、稚内發急行は、父を乘せて驛内に入つて來た。ガタ〳〵〳〵〳〵汽車は止つた。

ガラ〳〵〳〵〳〵〳〵荷物を運ぶ荷車「函館々々四分間停車」函館驛夫の聲。トン〳〵〳〵〳〵階段を上る音、今まで靜かであつた驛内はさはがしくなつた。僕は往つたり來たりして探したがどうしても見つからなかつた。歸らうと思つて階段近くまで來ると、いつにもあらず前から二番目の列車に乘つてあつたのだ。

ピリッ〳〵〳〵ヒリッ驛夫の鳴らす笛に汽笛と共に汽車は棧橋めがけて進行した。僕等は父と一しよに出口を出た。

通信

自由畫選評

山本鼎

今月は賞にだめでしたね。數も少いし、佳作も乏しい。ですから今月の入選はあまりいばれませんよ。

△横山幸治君の『置時計』要領よく、ていねいに描いてある處がいゝのです。

△佐藤喜久代さんの『里の燒けたお人形と犬』繪はよく描けて居ます。

△前田大藏君の風景の繪、圖取りはなか〳〵面白いが、少し描き足りませんね。棒の處はよいが、木の葉の綠のかたまりが、たゞ塗りつぶしたやうになつて居てまづいですね。

△内原正夫君の『きく』少し、だら〳〵とだらけて居りますが、色の感じはいゝ繪です。

△宮崎秀一君の靴の寫生はのんびりした感じがいゝ。テツサンもしっかりして居ます。

△佐藤重男君の、鉛筆畫、なか〳〵しつかりした素描です。枝も葉も力があります。

幼年詩選評

若山牧水

△震災後の東京を歌つたものが幾つかあつたが中で、次ぎの二つがいゝと思ひました。『木枯』といふ題で、

寒い寒い
焼野の町の
焼殘つた碁を
ピューピューと
木枯が吹いてゐる

これは牛込區原町の寺本やいち君の作。

それから『燒けたポスト』といふ題で、

燒けたポストは
可哀想だねェ
あつちもこつちも
さびだらけで
おでぎが出來た樣で
可哀相だねェ

これは麹町區日比谷尋常小學校六年生伊藤駿二君の作です。

▽よく口が叶はない樣で、可笑しい樣な無邪氣なのを一二篇お目にかけませうか。

『ふれ』といふ題で

ふれよ〳〵
お前の頭は
黑い〳〵
眞黑である。

『ふれ』とは何か、皆さん考へて御らんなさい。

『なみ』といふので、

おなみ二なみ
風にふかでて
ゆら〳〵、
ゆでてる

△近頃は殆んで學校同士の競爭の樣で、或る一つの學校からは無數に歌が來て、一人々々の個人の投書は甚だ少くなつた。個人組も學校組にまけずにどし〳〵佳いのをよこして下さい。

綴方選評

齋藤佐次郎

○今月の分は十二月中に集つたためか、數もいつも程でないし、作もいつも程いい出來ばえでないやうでした。しかし、賞に入つた作は決して他の月のと比べて劣らないと信じます。

○例へば賞の第一席に入つた鍛治繁雄さんの『卵買ひ』など、ゴヅ〳〵した下手な文章のやうですが、本當はいゝ作だといふことがわかります。卵買ひのお爺さんがはつきり出てゐます。よぼ〳〵のお爺さんの氣の毒な姿がよく見えます。いゝ加減でなく、よくお爺さんを見て書いたものだといふことがわかります。すべて此の調子で行かなければいけません。書かうと思ふものをよく見て、それから書いたのでなければ、たゞ頭の中で上手に書かうたつて駄目です。

○金丸榮子さんの『みれをちさんの死』も一寸見たゞけでは平凡な作のやうですが、讀み終ると、感動を與へられます。それは上調子でなく、力がこもつてゐるからです。よく物を見て急所をのがさずに書いてゐるからです。この作のもつてゐるおとなしい、靜かな調子も大好きです。

○大谷喜代子さんの『變な店員』はすら〳〵と上手に書いてゐます。

ほんたうに上手に書いてゐるといふのでは、今月中の作でこれに及ぶものはありませんでした。もしこの作にもう一層力がこもつてゐたら、と思ひました。

童謠の選後

野口雨情

さきに『童謠教育』についての疑問の點にちよつとお答へしておきましたが、その後或る人は、童謠教育と綴方の教育とはその間に何等の違ひがないから、ことさらに童謠教育と名づくべき程のものでないと言つてゐられますが、童謠と綴方とが同一のものであつたならば、それでよいかも知れません。しかし童謠と綴方とは同一性質のものではなく、童謠には童謠の本質があつて、綴方とは全然違つたものであります。それにもかかはらず童謠教育と綴方の教育とが同一の如く思ふのは自ら無智を暴露した愚論と云はれば なりません。又、兒童が尋常四年五年の年齡に達すれば、理智心が發達して來るから、それ等の學年兒童には理智的判斷を促すべき作品を與へて初めて童謠教育の効果が收めらるるかの如く論ぜられる方もありますが、これも大なる考へ違ひであります。一體、兒童の理智的判斷にまつ如き作品は、ほんとうの童謠としてみることは出來ないのであります。なぜなれば、童謠の元來が兒童の鼻唄であり、兒童の民謠であるからであります。鼻唄と云ひ民謠と云ひ感情の律動であつて、理智心にうつたへて味ふべき性質のものではないのです。もと〳〵童謠教育は理智心の發達をはかる教育ではなく、兒童の心にうるほひをもたらすべき唯一の教育なのです。心の教育であつて、頭の教育ではないのです。理智的判斷にまつは頭の教育であつて、童謠教育の精神ではないのであります。

現代の教育は、あまりに統一的であるから、一定の型より出ることが出來ません。機械のやうな國民をつくることが唯一の目的なれば、それでよろしいかも知れませんが、生きた國民をつくるには統一的といふ遺憾があります。國家の進展は生きた國民によられねばならないことは無論であり、童謠教育は生きた國民をつくる教育の基礎ともみることが出來ます。然るに近來、童謠らしくない童謠の多くなつて來たのは、兒童にとりて不幸であり、教育上にも憂ふべきことであります。要するに童謠は過度期にありますから、この際、眞に童謠の愛護者たる誰もは童謠の整理を行つて、本質的にひきもどして置かなくてはならないのであります。

童話選評

齋藤佐次郎

○三四篇はいつも優れた作があるので、選をした甲斐もあつて、何ともいへない喜びを後で感じます。

○さて、今日の應募作に就て述べる前に、前月號の分の推薦作を發表します。前月號の分の中にはなか〳〵面白い作がありましたが、次の久保さんの作が特に注意をひきましたので、これを擧げることにしました。

片目の猿

鹿兒島市上荒田町　久保一馬

この作は四月號で發表する豫定です。

○で、再び今月號の應募作に就て述べますと佳作の名は別欄で發表してありますが、佳作中でも特に優れてゐると思はれたのは、大人

の部では久米栫一さんの『きやッきやッ物語』土橋力さんの『圓栗の木』桃原良雄さんの『天女の羽衣』八ッ代春村さんの『眞ちゃん』須賀鬼郷さんの『大盗賊』などでした。

○また少年少女の部の作では、神藏德寸さんの『たぬきの腹づつみ』關地畿子さんの『實行して得をした若者』、寺島貞治郎さんの『天罰』などでした。

○久米栫一さんは何といつても、特にぬきんでてゐます。大抵の題材を立派に書きこなすだけの力を持つてゐられる事を感じます。例へば前月號の『盗賊を捕へて叱られた話』も巧いと思ひましたが、今月の『きやッきやッ物語』など實に手に入つたものです。力の餘裕を見せて、樂々と書いてゐます。話の書方のコツも十分に知つてゐられます。この作に就て强ひて難ないへば、最後のところで、病氣が治つて猿の親子が戻るところが力拔けしてゐる事を感じます。大事な場面でありながら、突然に猿が現れ出たやうな感を與へたのは、作者の力が拔けた爲めだと思ひます。

○土橋力さんの『圓栗の木』も巧いものです。前半が大層よく出來てゐました。しかし後半へ行くと、作者の計畫が非常に亂れて來た事を感じました。圓栗の木がはじめて此の世に出來たといふ童話的由來を述べるには、少し無理な筋だつたとも思ひます。もう一と工夫あつたら讀者がなつとくすると思ひました。

○桃原良雄さんの『天女の羽衣』は沖縄の羽衣傳說なので大ッ面白く讀みましたが、日本や朝鮮などのより規模が小いので、作者の筆致はなか〳〵しつかりしたものですが、見こたへのしないのが殘念です。

沖野先生の講演旅行

（二月は山梨縣下へ）

各地から沖野先生の講演の御希望がありまして、いつも伺ひ切れない程でございますが同先生には、本年は是非出來るだけの繰合せをして伺ふことにしたいと申してゐられますから、御希望の方は早くからお申込みを願つて置き度うございます。尚本年からは先生の御都合上、一度に一方面を一とまとめにして伺ふことになつてをりまして、二月は大月の廣東校をはじめ山梨縣下へ講演旅行をなさることになつてゐます。で、同方面で先生の講演の希望の方は、此際大至急お申込み下さい。——記者——

編輯室より

（記者）

○雜誌の上ではもう春がそろ〳〵おとづれていいはずですが、實際にはまだ來てくれません。寒いのには閉口いたします。おまけに、ふいに大きな地震めが飛出し來たりしますので早くあたゝかい春の來るを待つてをります。皆樣お變りもございませんか。

○さて、前月號には自由畫を發表することが出來ないのが殘念でした。選者の山本先生が御旅行のためと、もう一つには特に此の月は締切を急ぎましたので、間に合ひませんでしたゞ止むなく一月延し、三月號で發表する事にいたしました。

○次に皆樣におなじみの深い『アンデルセン號』をまた出します。面白くつてさうして又實に高級なお話ですから、一度讀んだ方はあゝうれしい、と手をたゝいて喜んで下さいませうし、まだ讀んだことのない方は、初めてアンデルセンのお話を知つて、成る程アンセルセンは世界一の童話の作者だとお喜びになるでせう。面白いお話をタントのせます。

○今月から『金の星』の花形沖野、西條兩先生の二大長篇がいよ〳〵始りました。沖野先生は本年は目先きを變へて、金の星誌上講演として、先生の深い知識と面白いお話を皆樣にお目にかけようといふのです。また西條先生は、いよ〳〵ゼエラール中尉の冒險談を進めて行つて、手に汗をにぎらせるやうな冒險を語つて下さるのだそうです。御愛讀下さい。

金の星誌友募集

『金の星』の誌友を募集いたします。誌友にはいろ〳〵の特典と便宜がございますから、御希望の方は本社宛に誌友規則書をお申込み下さい。

四月號豫告

アンデルセン傑作童話號

◇三月十二日發行◇　◇定價金四拾錢◇

毎年春と秋には『金の星』の年中行事として、世界の傑作童話を紹介することになつてゐます。で、この四月號には、特別讀物として、世界第一の童話作家として有名な、アンデルセンの名作中特に傑作のみを嚴選し、『アンデルセン傑作童話號一』として發行します。尚四月號にはおなじみの諸先生の作をはじめ、文壇の大家宇野浩二先生の『姉と弟の唄一』など面白いもの揃ひです。アンデルセンの傑作童話として推薦され、掲載す主なる作は次の通りです。

□小さなマッチ賣の少女……吉江孤雁
□火打箱と兵士……加藤朝鳥
□變な家鴨……中島孤島
□大助小助……西川勉
□豆の花……秋庭俊彦
□雪の女王……齋藤佐次郎
□赤い靴……馬場孤蝶

『合本第三輯』出來!!

（第五卷七號より）（同十一號まで）定價一圓五十錢 送料十四錢

◇水島爾保布先生裝幀

目もさめるばかり美しい金の星の合本第三輯が出來ました。裝幀も大家水島先生の苦心になり、表紙全部總クロース製の美本でありますから實に立派です。一册づゝにして持つて居られる方も、この美しい合本をごらんになつたら、必ずほしいとお思ひになるでせう。しかも、この中には數十篇の面白い童話と童謠が集つてゐるのですから、一大童話童謠集が頗る安價に求められるわけです。

愛讀者のために特に五百部を限り製本しました。註文殺到!! 忽ち賣切れにならうとしてゐます。この際至急にお申込みになつて、是非皆樣の書棚にお飾り下さい。

◎第一輯（絶版）

◎第二輯（再版）

（第五卷一號より）（同六號まで）定價壹圓八十錢 送料十四錢

◇合本第二輯も最早僅かしか殘つてゐりません。これも限り今後は絶版になりますから、御希望者はなるべくお早くお申込み下さい。

＝自由畫掲載外佳作＝

岡添信次郎（東京）　寒竹　進（東京）
村上　清夫（神奈川）　湊　一調（東京）
富永　良一（新潟）　市村　正（栃木）
酒井　俊治（長野）　渡邊　賀東（東京）
田中　文八（香川）　寄田　静夫（香川）
中山　新七（香川）　神谷　彰子（東京）
鈴木　薫（香川）　上高　五夫（香川）
齋木　文雄（不明）　松井　克己（福岡）
成瀬　義博（香川）　小林　章吾（新潟）
松井シヅエ（福岡）　松井　千代（福岡）
白木　正二（廣島）　内原　富子（香川）
野邑　裕（北海道）　前田孝四郎（東京）
村山カズ子（高田）　櫻井　正美（新潟）
大崎　妙（北海道）　寺岸　シヅ（北海道）
内田　秀一（埼玉）　井崎　進（大垣）
俣野　了（東都）　湯淺　宗一（東京）
榎　八郎（和歌山）　横山　武司（新潟）
鈴木　英二（東京）　鈴木　秀三（東京）
片岡　明（神戸）　湯澤　實長野）
久利　清（山口）　川婁　又治（滋賀）
神林　二男（不明）　古川　一衞（愛知）
榊　良吉（不明）　品川　吉雄（東京）

＝幼年詩掲載外佳作＝

西原　渡（香川）　淺川　三藏（山梨）
三浦　繁雄（香川）　熊野　一行（香川）
南部　正夫（香川）　山本みさへ（山梨）
山本みや子（山梨）　宮武みつゑ（香川）
じんないしな（香川）　清水滿詠子（香川）
辻　峯成（大阪）　菊水　芳男（山梨）
左武善十郎（大阪）　花輪　清雄（山梨）
山本　茂（山梨）　岩部　忠連（香川）
中坂石次郎（東京）　清水八重子（山梨）
中村やた（山梨）　小谷野　榮（埼玉）
荒田　萬治（埼玉）　井口　タネ（香川）
堀上　義雄（香川）　島崎あや子（神戸）

＝綴方掲載外佳作＝

藤原不二枝（長崎）　千ヶ崎英三（山梨）
宮田　曠兒（東京）　古川　一衞（愛知）
奥田　準一（福岡）　岩坪　美實（長野）
中島　幸雄（福岡）　星野　彰（群馬）
寺島貞次郎（東京）　中尾千太郎（奈良）
關口平八郎（千葉）　落合守宇郎（埼玉）
加納　一雄（大阪）　小田　初枝（京都）
池澤　泰谷（茨城）　白木　正二（廣島）
吉田　政三（東京）　鹽　正（京都）
伊藤三千夫（山口）　鳴海まさ子（青森）
井崎　進（岐阜）　前田孝四郎（東京）
今野　直治（秋田）　植田宇太郎（奈良）
久米　敏（茨城）　八郎（和歌山）
太田ちづ子（静岡）　榎　宗一（富山）
芳賀まさな（兵庫）　湯淺　宗一（富山）
岡本キヨ子（山口）

＝童謠掲載外佳作＝

（大人篇）

（子供篇）

＝童話佳作＝

（大人の部）

（小人の部）

金の星新誌友名簿

新しく出た本

◆睡蓮の夢（露谷虹兒先生著）　金の星でおなじみの露谷虹兒先生の畫譜第一輯です。睡蓮の花を見るやうな詩と散文詩と童謠三十篇に、各一篇ごとに色刷の美しい畫をそへたのが此の本です。當代にならびない天才畫家として少女の方々から渇仰のマトとなつてゐる虹兒先生の傑作ぞろひです。虹兒畫の見のがすべからざる本である事はいふまでもありません。「裝幀内容共に親しみ深く、いづれの一篇をとつても、若き讀者の胸を擽がせずにはおかないでせう。」（四六判一一二頁、定價一圓四十錢。神田南神保町十六　交蘭社發行）

◆學校用小脚本（坪内逍遙先生著）　劇のために一生をさゝげてならられるのが坪内先生です。坪内先生は此の頃になつて、皆さんのために、「家庭用兒童劇」を澤山にお書きになりました。方々で實演されて、その面白さを皆さんは御存知でせう。しかし、坪内先生は最近の經驗から、兒童劇は家庭に重きを置いてはゞ今のところ駄目だ、それよりも先きに學校で演じるやうな學校劇を作らなければならないといふ考へから作られたのが此の脚本集です。「文福茶釜」「小野の道風」「道灌と鉢皿」「烏朝子と狐の群れ」「若返りの泉」「人と浪」の六篇を收めてゐます。（四六判一七〇頁定價貳圓。牛込早稲田、早稲田大學出版部發行）

讀者だより

▼すつかり日が暮れました。そして向の上野の山に、一つ星が出ました。私、お窓に凭つてお星さまを見て居りますうちに、ひとりでに金の星の事を思ひ出しました。そして、思はずペンを取りました。どこかで靜なヴァイオリンをひいて居ります。金の星の皆様、どうぞおたつしやで。…そして、なほ私達の爲に、お盡し下さいますことを、お願ひ申上げます。

（東京下谷根岸　新井朝子）

▼僕が金の星の正月號をとつて見たら、八月の二十日ごろに鎌倉から出したくつのしやせいが思ひがけなく出て居て、下に賞と書いてありました。僕は九月の大じしんでこちらへ來て居ます。賞品は記念のためとつておきたいと思ひますから、こちらへおくつて下さい。

（茨城縣眞壁郡　酒井　亮）

▼何よりも亡妹の遺作を出して下さいましたことを感謝致します。妹を失つた寂しさと、あの大地震とは永久に忘れられない寂しいことの一つとなるでせう。いろ〳〵のことで私の心は一すもおちつかないでゐました。又多忙なため思ふ樣になりませんでした。誌友費は月末までにお送りしたいと思つてゐます。左樣御承知下さい。出來るだけ長く誌友になつてゐたいと思ひます。今月の童話では『日に映える豚』と云ふのが好きでした。僕は今『お菊の話』と云ふ童話を書いてゐます。面白いものに成りそうですから、出來ましたならお目にかけることに致します。

（東京府西巣鴨町　岡添信次郎）

▼すべての野心覇氣を脱しこの仙境に來て浪世的生活をしてゐます。ここは、日本稀有の野鵲渡來地です。幾十の仙鳥が悠々舞てゐます。時々いたましい聲をして、なきます。村民は殊に村童（私の敬へ兒）の率直さほんとにいゝ所です。四方の高い山が見つめ彼等の生活を思ふと涙ぐましくなります。皆樣、殊に震災に惱まれた皆樣を御呼びし度い。どうか御手紙下さい。仙鵲の紅葉書を差上げます。そして又近くの御方は御出下さい。私の許へ來る金の星を唯一の友と樂しむ原始的な村童に面白い本を御めぐみ下さいませ。御禮をいたします。本屋にかけつけて御誌を手に取つた時は田舎者の都會へ出た時の樣な感じがした、とでもいふより外ありません。それにしても日進月歩金の星の發達は驚くばかりです。野へ放たれ美味しい木の實を與へられた小鳥は、大正十二年より生れかはつた氣持で、せいぜい投書させて頂きます。私は下手の横好きとでも申すのか、何よりも童話に趣味を持つて居ります

（岸和田中學　山本秀夫）

▼永らく御無沙汰致して居りました。學科に追はれ、試驗に苦しめられ、一日としてのどかな日を送つた事は御座いません。さういふわけですから御許し下さい。こゝに冬休みといふうれしい日を得て實に籠の小鳥の放たれた樣に感じます。本屋にかけつけて御誌を手に取つた時は田舎者の都會へ出た時の樣な感じがした、とでもいふより外ありません。それにしても日進月歩金の星の發達は驚くばかりです。野へ放たれ美味しい木の實を與へられた小鳥は、大正十二年より生れかはつた氣持で、せいぜい投書させて頂きます。私は下手の横好きとでも申すのか、何よりも童話に趣味を持つて居ります

（岸和田中學　山本秀夫）

▼投書は之で五回目です。子供にかかせて出さうと思ひましたが私がふらんで書きました。いつか御社の神野先生が私どもの村へお出でなされてから見童達は非常に金の星をよろこんで見てゐます。つまらぬかもしれませんが四五篇出します。まだ〳〵子供に落ついた見方が足りないと思つてゐます。

（山梨縣日下部小學校　内田倫任）

▼新年號は百五十頁以上もあつて大變愉快に拜見致しました。殊に『十二人の兄弟』『赤萬寿』『紙田姫』それから『杜鵑の話』は面白いと思ひました。童謡では『鼠の小母さん』が好きです。いつかその内に一度童謡を主にして特別號を出して下さいませんか。又童謡童話の研究といふ樣な物ゝ連載して下さいませんか。お願いたしておきます。それから今度『象牙の船』といふ童謡の小雑誌を作りました。會費は一ケ月四錢です。童謡を愛する方々の御投稿を御待ち致しております。

（大阪市北區絹笠町十　黄時三郎）

▲記者樣、御ていねいにお手紙下さいまして有難うございます。私は今日こそ〳〵と毎日令本の來るのを待つてゐました。今日學校から歸つて來るとあの葉書が來てをりました。私はすぐ、手に取つて讀みました。一輯が、こないだの地震火火で燒けてしまつたのでかはりに二輯をお送り下さつたのですね。それでも結構です。第三輯も出ましたね。同じ發禁でしよう。又その中に投書も注文も致します又地震がゆりました。御社と皆樣にはお變りございませんね？それから燒失された本も出來上つたら誌上でおしらせ下さい。四月號を童謡號にして下さい。野口先生の名所めぐりの童謡をもつとのせて下さい。皆樣お體をお大切に。金の星の爲におつくし下さい。さようなら。（熊田滿佐音）

▼先生、私は今、淋しいそして悲しい日を送つて居ります。昔のお伽話にでもある樣な哀れな身の上です。ですけれど一方から考へて見ると、非常に幸福な身の樣にも思れます。私は學校へ行きたいばかりに、此の反町の家に書生として來てるのです。私の父が私を立派な者にしたいばかりに、私を此家へ書生として送つたのです。ですから朝も女中さん達と　緒に起ねばならぬし、夜は主人が休むまでは起きなくてはならないのです。然し私の心の中は幸福で滿て居ります。貧乏ながらも學校へ行けるのを私は幸福だと思つて居ります。貧乏な爲に學校へも行けぬ人も又此度の震災で學校へ行け無くなつた人も澤山ある中に、私は何事も無く毎日學校に通ふことが出來るのを幸福に思つて居ります。私は只父母の側に居られないと言ふ悲があるばかりです。その私の一つの悲をなぐさめて呉る物は只『イエス』と『金の星』より他に無いのです。金の星！！金の星！！あゝ其れは先生方の手に成る私の心の友達です。私は金の星が發展するのを私の心をなぐさめて呉る爲に發展するのでは無かしらと頭をかしげます。私の投書はあれで良いでせうかお尋ね致します。

（東京牛込區喜久井町　松井實）

▽あなたのやうに物事を卒直に考へる人からこそ、きつと立派な作品が生れます。投書はあれで結構です。（記者）

▼貴社益々御發展心から御祝ひ申します。私等の組織による夢の壺は休刊してゐましたが、新年にあたつて再刊することになりました。今度一月二日に夢の壺社の會員の親睦をはからんがために會を催します。大聖寺公會堂に於て。今の處、豫定入場者が三百人もある模樣です。何か廣告になる樣なものを深山送つて下さい。誌友募集書でも何んでもよろしく、極力誤も奮闘して募集に骨折ります。貴社の發展を祈つて筆を止ます。

（石川縣大聖寺町　夢の壺社）

▽御厚意を深く謝します。（記者）

▼記者樣　私は大正十一年から金の星を愛讀してゐます。私は中學校へ入學しましたが、どうしてもやはり金の星から別れることが出來ません。野口先生の可愛い童謡の星を愛讀してゐます。私は中學校へ入學しましたが、どうしてもやはり金の星から別れることが出來ません。野口先生の可愛い童謡寺内先生の可愛い繪。何につけても金の星は天下の良雑誌です。それから金の星の合本第一輯まだ再版出來ませんか。（失名）

▼合本第一輯にする雑誌が上野のもとの、出版部に置いてあつたので、それが例の大火に遇つてすつかり燒けてしまつたのです。殘念乍ら、第一輯だけは永久に再版出來る見込みがありません。そんなわけで第一輯を御注文になつた方へは全部第二輯から御送りしました。第三輯も製本出來ました。澤山注文があつて、これもすぐ絶版になりさうです。御注文なさるんでしたら、なるべく早くなさつた方がいゝと存じます。（出版係）

▼若草の春が近づきました。陽炎のほのぼのと立つ春の野に、樂しいたのしい童話の國、童話の世界です。おてんとさまの光りも、だんだん和らいで來ました。（京子）

懸賞創作募集

◆少年少女の創作◆

自由畫……山本鼎先生選
幼年詩……若山牧水先生選
綴方……編輯部選

〔注〕課題は何でもかまひません。諸君の日々見たり感じたり、したことや諸君のすきなものな、諸君のすきなやうに畫なり、詩なり、文なりにしてかいてください。一人で何題出してもかまひませんが、姓名は學校や學年(または住所と年齢)とともにおとさないやうにして下さい。用紙は自由畫はなるべく畫用紙に、幼年詩や綴方はなるべく原稿用紙(または半紙)に書いてください。よく出來た方には『金の星』特製の賞品を差上げます。次號〆切は二月廿八日(その以後は次號へ廻る)發表は五月號、宛名は東京市外田端三百五十一番地金の星社。

◆一般讀者の創作◆

童謠……野口雨情先生選
童話……齋藤佐次郎先生選

〔注意〕童謠は十五行以内、童話は二十字詰二百行以内、優秀な作品は「推薦」または「特選」として發表いたします。推薦の場合は童話には五圓、童謠には二圓づつ、特選の場合は童話には拾圓、童謠には五圓づつ賞金として呈します。但し少年少女の創作童話にして『入選』の場合は『金の星』賞を呈します。締切、發表、宛名は少年少女の創作と同じです。原稿には必ず住所姓名を記して下さい。原稿はお返しいたしません。

定價壹冊金四拾錢送料壹錢
三ヶ月分三冊(送料共)壹圓貳拾錢
半年分六冊(送料共)貳圓四十錢
一ヶ年分十二冊(送料共)四圓八十錢
但し新年號は特別號で五十錢ですから、御註文の節はこの分だけ必ず加へてお拂込み下さい。
振替口座東京五九五九六番

〔送金〕
▽送金は振替が一番便利で御座います
▽切手代用は(壹錢切手)一割増しです

〔注意〕
▽第何卷第何號よりと書いてください
▽住所姓名はハッキリ書いてください

廣告料は御照會次第お答へ致します

大正十三年二月九日印刷納本
大正十三年三月一日發行(毎月一回一日發行)

東京市外田端三百五十一番地
編輯兼發行人 齋藤佐次郎

東京市小石川久堅町百八番地
印刷人 大橋光吉

(東京市小石川久堅町百八番地)
印刷所 株式會社博文館印刷所

東京市外田端三百五十一番地
發行所 金の星社

振替口座東京五九五九六番
電話小石川五三八七番

ほるぷ出版複刻版'83

家なき子

三宅房子先生譯・寺内萬治郎先生裝幀並に挿畫
改正定價金壹圓六拾錢 送料金十四錢

・四六判函入總クロース美本・本文二百七十頁・挿畫十數葉入・
(定價は金壹圓冊錢の予定の處、定價改正の上、特に上製にしました。)

▽『家なき子』は世界的の名作として、世界各國語に飜譯され、如何なる少年少女も是非一度は讀んで置かなければならない本として推薦されてゐます。
▽原作は佛國文豪エクトル・マローの作になつたもので、一人の孤兒の生涯を書いたものです。名家の家に生れながら、不思議な運命にもてあそばれて、遂に旅役者に賣られ、村から村へ、さすらひ歩く哀れな物語りです。
▽しかし、『家なき子』は、少年少女の涙をしぼらせるだけでなく、また大きな教訓を與へるものです。主人公が悲しい身の上でありながら、一つ一つと人生を學んで行くあたり、實に一大教訓小説ともいふべきです。歐米の各學校がそつせんして、本書を推薦してゐるのも、これが爲めであります。出版發表以來注文殺到!!賣切れぬ内お申込み下さい。

東京市外田端三五一 振替口座九五九六番 金の星社

沖野岩三郎先生著 父戀し ▽定價金壹圓 ▽送料十二錢

同 童話讀本 赤い猫 ▽定價金九十錢 ▽送料十二錢

本居長世先生作曲 人買船 ▽定價金六十錢 ▽送料四錢

同 一つお星さん ▽定價金六十錢 ▽送料四錢

『金の星』第六巻第三號（大正十一年九月十日発行）
（定價金四十錢　送料一錢五厘）

雪のちらちらする朝も、
窓に小鳥のうたふ日も、
わたしはきつと忘れずに、
ライオンはみがき
を使ひます。
きれいな、やさしい櫻色、
ほんのりにほふなつかし
さ、わたしの齒は、だん
だん綺麗になりますの。

ライオン齒磨本舗
丸ビル一階